前には忌やがつて逃げ出した神尾の殿様の處へ今度は進んで行かうと言ひ出したのは、それだけ苦勞をして來た効だらうと思ひました。

「ほんとにお前は感心な處へ氣が附きました。それは甲府詰といへばお旗本の運の盡きで、ああして我儘をしておいでなすつただけに、今はどんなに苦勞をしておいでなさるかと其れを思へば、おいとしくてなりませぬ、お前がさう云つて呉れるのが、わたしに取つては親身のやうに嬉しい、御威勢のよい時は、隨分忠義を盡す人も多かつたのに、今は江戸からお手紙を差上げる人もない御容子、それをお前が、自分から御奉公に上がらうと云つて呉れる心が嬉しい」

お絹は喜びました。お松は何も元の殿様に忠義を盡す心から云つたのでは無かつたけれど、お絹はお松の初心な氣性を、ただ律義一遍にのみ受取つたから親身に嬉しく思つたのでした。さういふ風にすべて善意に受取られる事は、お松の性質の一徳でありましたけれど、お絹も亦此の頃では物に感じ易くなつてしまつたのです。さほどでもない事を嫉ましく思つたり、其の仕返しの種と思つて、圖らずお松と逢つて見れば、其の言ふ事のしほらしさに一々感心してしまふやうになつたのは、つい此の頃の事でありました。

「わたしはもう此れまでの體だから、これからお前を養女にして、町人でもいいから堅さうな養子を見立てて小店の一軒も出すやうにして、お前の世話になつて疊の上で死ねるやうになりたい」

なんぞと心細い事をも言ひ出すのでありました。今夜も亦二人は床を並べて寢に就きましたが

「お師匠様、まだお手形は出ませんのでございませうか」

お絹は思ひ出したやうに

「ああ、もう下りさうなものですよ、けれどもお前も知つての通り女の手形といふものは中々手つづきが面倒なのだから、それで此んなに延びるのでせう、若しあんまり後れるやうならば、わたしがまた頼み込んで見る處があるから、もう二三日待つて御覽なさい」

「若し、お手形が下がりませんでしたならば、わたしはお手形なしで裏道を通つても早く甲府へ參りたいと存じます」

「わたしの方はさうは行かないから、まあもう少し待つておいで」

お絹とお松との手形といふのは疑ひもなく甲府へ行かうとする其の道筋のお關所へ見せる女手形の事でありませう。それを願出て置いて、まだ下らないから二人で此んな噂をしてゐるのです。其の翌朝になると女中が

「旦那様、お客様でございます、山下の床屋からと申しました」

と聞いて、お絹は其れと氣が附きました。

「まあ、お待ち、どんな人が來たか見てやりませう」

お絹はワザワザ自身に立つて玄關の襖の際から表を見ると先日の夕方、がんりきの百藏と睦まじさうに山下の雁鍋から出て來たお角でありましたから、また居間へ歸つてわざと取濟まして

「何の御用ですか聞いて御覧、お門違ひではございませんかと尋ねて御覧」
それで女中が出て行きましたが、暫らく經つてまた引返し
「旦那様へこのお手紙をお目にかけさへすれば判るからと申しました、お客様は女の方でございます」
一封の手紙を取次いだからお絹は其れを取つて見ると、長者町の道庵先生からであります。
封を切つて讀んで見ると、其文面は兼てお預け申してあつた娘を此の手紙を持つた人が迎へに行くから渡してやつて呉れ、お禮には後で拙者が出るからといふことでありました。正しく道庵先生の筆に違ひないけれど、お絹はわざとらしく解せないやうな顔をして、クルクルと卷いてしまひ、其れを女中に突き返すやうにして
「如何も、お手紙の筋は手前共の主人にはよく解り兼ねますからお返事の致しやうがございません、とさう云つて此の手紙を返してやつて御覽」
「畏まりました」
女中はまた出て行きました。何と云つて來るか知らんとお絹は煙草の煙を吹いて居りますと
「旦那様」
またまた取次の女中がやつて來ました。
「返つたかい」

「否え、お客様は、其んな筈は無いと申して居りまして、兎に角御主人にお目にかかつた上で、お門違ひならお門違ひのやうにお詫を致しますからと云つて動きませんのでございます」
「さうだらうと思つた、それではお通し申して置き、それから用箪笥の抽斗の二番目のを悉皆引き出して此處へ持つて來て下さい」
女中が先づ命ぜられた通りに用箪笥の抽斗をそつくり引抜いてお絹の前へ持つて來てからまた取次に出かけました。
お絹は其抽斗の中を選り分けて一枚の借用證文を引き出しました。この證文は、お角が甲府へ旅興行に行く前に仕込み金として忠作から借りて行つた金の證文であります。
「お松や」
お絹は證文の皺を伸ばしながらお松を呼びました。
「はい」
「わたしが今お客様と話をしてゐますから、若しお茶をと云つた時分に、お前はお茶を入れて持つて來て下さい、お客様は、お前の面を見ると何か言ひ出すかも知れないが、お前は心配しないでお茶を出したらば直ぐに奥へ入つておしまひ」
斯う云つてお絹は取濟まして客間へ立つて行きました。

「お初にお目にかかりまして」
お絹とお角と兩女の挨拶があつてからお角が改めて
「先程お目にかけましたお手紙、どうやらお間違ひとも思はれませんのに、御容子がおわかりにならないさうでございましたから、押してお目通りをお願ひ申しました」
「道庵さんは始終懇意に致して居りますけれど、あの娘さんが如何した事やら文面が何の事やら飲み込めませんものですから」
「あの道庵先生から、當家様へ二三日お預かりを願ひました娘さんの事でございますが其の親許が今日見えまして、連れて歸りたいといふ事でございますから、早速道庵先生へお話しを致しますると、先生は當家様へお頼み申してあると仰有つて、おれが直に連れて來てやると御自身でお出かけになる處を何しろあの通り御酒を召していらしつて、お足元がお危なうございますから、それには及びませぬ、お手紙でも戴きますれば、私共の方からお迎へに上りますからと申しますと先生が、よしよしと仰有つて書いて下すつたのがあの手紙でございます」
「それは變な事でございますね、私共では先生から娘さんとやらを預かつたやうな覺えは一向に有りませんのですが」
「おやおや、それでは道庵先生が何か感違ひをなすつたのではございますまいか」
「あの先生の事だから、何かいたづらをしてお前さん達を欺いだのかも知れません」

「外の事と違ひまして人一人の事でございますから、そんな罪ないたづらをなさる先生でもございますまいし」
「何しろ、わたくし共では道庵先生から小猫一匹でもお預かり申した覺えはございませんから」
「其れは困つた事になりました、あの先生に限つて醉つぱらつておいでになつても信用の置ける事には置ける先生だとばつかり思つて安心して上りましたのに」
「如何もお氣の毒に存じます、もう一度先生の方を確めてごらんなさいませ」
「左樣いふ事に致しませう、これは如何も飛んだ失禮を致しました、粗忽かしい事でお恥かしうございます、幾重にもお許し下さいまし」
お角は當惑してしまつたからお絹に向つて自分の粗忽を詫びました。
「まあ宜しうございます、お茶を一つ召し上れ」
お絹がお茶を一つと云つた時に、何も知らないお松はお茶を立てて此の場へ持つて出ました。お角は今お詫をして歸らうとする處へお松が入つて來たものだから思はず其の面を凝と見て
「おや、このお娘さんは……」
お角が驚いて膝を立て直すのを見て、お絹は莞爾りと笑ひました。
お松は何の事だかわかりませんで、ただ此の女のお客が自分を見て仰々しい表情をしたことを少しくをかしく思ひながら

「お出で遊ばせ」
一體をして出て行かうとする時、お角の言葉つきがガラりと變つて
「奥様、おからかひなすつては可けませんよ、女の事でございますから怯えますよ」
膝を立て直したお角の擧動を益々怪しい事に思ひながらお松はお茶を出して、次の間へ立ち去つてしまひました。それを流し目でお角は見送りながら
「奥様、お前様は女の子は愚か猫一匹も道庵先生からお預かり申した覺えは無いと仰有いましたね、そんな事だらうと思ひました、危ない事、子供の使ひで追ひ返されて此方からは赤い舌を出され、向ふでは笑ひ物にされる處でしたよ」
お角は坐り込んで、ことわりも無しにお絹の煙管を借りて煙草を一ぷくつけた時に、お絹はさい前の證文を取り出しました。
「お前さんには、あの子より先にお預かり申した品があるから其れをお返し申してからの話にしようと思ひました」
お絹は其の證文をお角の前に置くと、お角は不審な面をして煙管を投げ出して證文を取り上げて披いて見ました。
「おやおや、こんな品物が奥様の方に廻つてゐようとは存じませんでした。エエ宜しうございますとも、お借り申したものは決してお借り申さないとは申しません、甲府へ行く前に此の證文通りお借り申しました。甲府から歸つて參りますと佐久間町の方へお返しに上つたんですけれど、お家が壞れておいでなすつて、何處へお引越なすつたか近所で聞いてもわかりませんから、ツイ其れなりになつてしまつたんですよ、決して返さないつもりぢやございません、お借り申したものはお借り申したもの、それを斯うして不意にわたしの鼻先へ突きつけて下さるなんぞは御念が入り過ぎましたね、あんまり御念が入つて御親切が有難過ぎるから、わたしの方でも少々御念を入れてから返して上げる事に致しませうよ」

「エエ、何時でも宜うございますよ、このお預かりの方は何時でも歸して上げますが、あの娘の方は何遍取りにお出でなすつても無駄道でございますから、其の方はお斷り申して置きますよ」
「おや、其れは如何いふわけでございませう、成程此の證文は口を利きますけれど、あの娘さんは彼りや山下の床屋から道庵先生のお手を通して當家様へお預け申した人、いくら高利貸が御商賣でも誘拐まではなさるんぢやございますまいね」
「氣を注けて口をお聞きなさい、誘拐とは其りや何の事です」
「誘拐が惡うございましたか、人の娘を預かりながら、其れを親許から受取りに來れば預からないの返せないのと、白を切るのは其りや誘拐ぢや有りませんか」
「幾ら淋しい根岸でも近所がありますから、當り前の聲で話をして下さいよ、お前さんは何も知らずに山下の床屋から尋ねておいでなすつたやうだが、あの床屋といふのは一體此の娘の何に當るので

すね、親許から迎へに迎へにと仰有るが、その親許といふのは如何な人なんだかそれがお聞き申したいね」

「その親許といふのは銀床の亭主の友達なんですよ、その人が今銀床に來てゐるんだから其れより確な事はございますまいよ」

「銀床の御亭主といふのは、如何な人だかお前さんは御承知ですか」

「それや銀さんといつて、片腕がないけれど腕がいいのであの邊で評判ですね」

「その銀さんとやらが如何して片腕が無いんだか知つてゐますか」

「大きにお世話樣ですね、片腕が有らうと有るまいと、好い人は好い人なんですからね」

「處があんまり好く無い人なんですよ、成程お前さんには片腕のない處がいいかも知れないが、あんな物騷な人に娘盛りの子を預けては置けません」

「何が物騷なんでせう、人には親切で、錢金の切れつぱなれは宜し、男振りだつて滿更ぢや有りませんからね、若い時喧嘩をして腕に怪我をしてから切り落すやうになつたんだから、軍人の向ふ傷と同じで、男に取つては名聞な位なものですよ、わたしは彼の片腕が大好きなのさ」

「おやおや、首の無い殿御を抱いて寢るといふお姫樣もあるんだから片腕のない處もまた乙でせうけれど、あの男が片腕を無くしたわけを聞いてしまつたら、お前さん三年の戀も冷めるでせう、何も知らないであんな男に賴まれておいでなすつたお前さんがお氣の毒」

「其んな事を聞きに上つたんぢや有りません、あの人の片腕が如何しようと其んな事は大きなお世話ぢやありませんか」

お角は非常に腹を立てました。自分に恥を搔かせようと企んでするらしい此の女の仕打が憎らしくて堪まらなくなりました。斯うなつては腕づくでも、お松を連れて歸らねば承知が出來なくなつたから。

「何を云つてやがるんだい、誘拐奴、愚圖々々云はずに娘をお出しよ、出さないと爲にならないよ」

斯う云つて太返りました。近所隣りへ聞えるやうな大きな聲で罵りました。

「いいえ、歸すことは出來ません、何ですお前さん、人の家へ來て失禮な、其の容裝は、さあ早く歸つて下さい、お歸りなさい」

お絹も負けてはゐませんでした。

「失禮は持前ですからね、とてもお前さんの樣にお上品な面をして人の娘を誘拐すやうな事は出來ませんよ、わたしに失禮な眞似をして貰ひたくなければ娘をお出し、大きな聲をされるのが忌だと思つたら預けて置いたお嬢さんを出してお仕舞ひ、愚圖々々云つてると腕づくだよ、わたしはお前さんに嚙り着くよ」

「勝手になさい、わたしの體に指でも差してごらん、わたしも只は置かないが此の近所には、わたしの知合で公方樣の兵隊を指圖をする重い役人も居るんだからお前さんの爲めになりませんよ」

「面白いね、御家人が居たら出て貰はうぢやありませんか、公方様の兵隊を指圖なさるお役人がお
いでなすつたら其の兵隊を繰出して貰はうぢやありませんか、筋道を立ててお嬢さんを受取りに來る
人と、企みをして誘拐をしようといふ人と、何方が白いか黑いか、さういふお方に見て貰はうぢやあ
りませんか」

「お前さんのやうな下品な人とは口を利くのも厭、勝手に一人で喋べつておいで」

お絹は座を立つて、次の間へ行つてしまはうとする、お角は嚇と怒りました。

「下品で惡かつたね、どうせ、わたしなんぞは下品で失禮で阿婆擦でお丹珍ですから、自棄になつ
たら何をするか知れたものぢやありませんよ」

お絹の後から飛びついて引き戻さうとしました。

「何をするんです」

お絹は其れを突き返しました。

「さあ娘を返せ、お嬢さんを此れへお出しなさい」

お角は突き放されてまた武者振つく、それをお絹は突き返す。

「まあ、何をなさるんでございます、何卒お靜かに、お師匠様もお靜かに、お神さんも手荒いこと
をなさらずに」

次の間にゐたお松は見兼ねて其處へ仲裁に入りました。

「おお、お嬢さん、わたしは銀床から頼まれてお前さんを迎へに來たんですよ、お前さんの伯父さ
んが今甲州の方から歸つて、お前さんを連れて歸りたいといふから、わたしが道庵さんまで迎へに行
くと此方へ上つてゐるといふから、わざわざ此處まで來て見ると此の人が妙な眞似をするから、わた
しは腕づくでもお前さんをお連れ申すつもりなんでございます、さあ此んな忌な處においでなさらず
に、わたしと一緒にお歸りなさいまし」

お角は仲裁に出たお松の手を引つ張りました。お絹は其の間へ割つて入り

「お前さん方のやうな惡者の仲間へ此の子を渡す事はなりません」

「おや、惡者の仲間とはよく言つた」

お角はいよいよ荒れます。お絹は少しも萎みません。お松が持て餘してゐる處へ折よく

「まあまあ」

かねて容子を見てゐたもののやうに飛び込んで來たのは七兵衞でありました。

十二

七兵衞のこの場へ飛び込んだことはすべてに於て都合がよくなりました。

二人の女を旨く仲裁して、話をそつくりわかるやうにしてお角を和めて歸し、そのあとでお絹と萬

事話し會つて事情がわかり、話を纏めて置いて七兵衛は山下の銀床へ歸りました。

「百、今歸つた」

「兄貴、歸つたのか、俺が今出かけようと思つてゐた處だ」

「何處へ」

「根岸の後家さんとやらがヲカしな眞似をするといふから行つて見ようと思つてゐた處なんだ」

「それなら、話が纏まつたから廢せ」

「兄貴の方は話が纏まつたか知れねえが俺の腹には些とばかり居ねえ事があるんだ」

「あれはあの女の癖だから別に氣に掛けなさんな」

「癖にしては餘り性質が良くねえやうだ、何か此方に恨みがあつてするやうな、乙な眞似をしやがる」

「ははは、恨みは大有りだ、當つて見れば因緣がちやんと附いてる」

「一體其女といふのは何者だい」

「お前が其の女に惡戯をされるのはされるやうな因緣がついてゐるんだから仕方が無え、ちよつと調戯にやつて見たんだから、根に持つなよ」

「さう聞いて見ると猶更打捨つちや置けねえ」

「出かけて行つて如何するつもりだ、其の女に指でも差して貰ふと俺が困ることになるんだから打

捨つて置いて呉れ」

「兄貴の迷惑になるやうぢやあ濟まねえが何だか容子が解らねえから、まあ一通りの話を話して見て呉れ」

「根岸にゐる女といふのは其りやそれ德間峠の一件物だ」

「ナニ、德間峠の……まさかあの切髪の新造ぢやあるめえな」

「それだそれだ、お前が腕を一本取られた因緣物だ」

「成程、其奴は廻り合せが奇妙だ、其女なら因緣は此方から附けてやらにやならねえ」

「處が向ふから因緣をつけて來たといふのは、百、お前が氣が多いからだ、あの女輕業の親方とお前と出來て嬉しさうに歩いてゐる處を見せつけられたから嫉て堪らねえので、そんな惡戯をして腹癒をして見たんだ、早く云へば百、お前が色男過ぎるから調戯はれたんだ、ここは腹を立てねえで一杯奢る處だよ」

「うむ、さう云はれると何だか擽ぐつてえやうな氣持もするが、浮氣で云ふんぢやあ無え、あの女はあんまり薄情過ぎる」

「ははは」

七兵衛は笑つてゐるが、がんりきはまだ心の底に何か殘つてゐるらしい。

「兄貴の前だが、おれは一旦物にしかけた女を、其のままにして置くのは忌だ」

「おやおや、お前はまだ其んな事を言つてるのか、男らしくも無え、まだ未練が殘つてゐたのかい」
「未練といふわけぢやあ無えが、おれもあの女故に此の腕を一本亡くして、生れもつかねえ片輪にされちまつたんだ、身から出た錆だと云へば其れまでだが、如何も此のままぢやあ濟まされねえ」
「濟まされなけりやあ如何するつもりだ、腕一本で濟んだのが見つけ物で、すんでに命の無え所を助かつたんだ、餘計なチョッカイを出したお釣と思へば腕一本は安いもんだと諦めてゐた癖に、今になつて濟まされねえとは如何するつもりだ」
「兄貴、あきらめといふのは見ず聞かずの上の事だ、ツイ目と鼻の先にゐて、こんな惡戯をされた日にやあ、如何もがんりきも眼がつぶり切れねえ」
「存外、手前も男がケチだ、向ふは一寸調戯つただけの御挨拶で、女といふ奴は、ああもして見ないとバッが惡いんだ、可愛い位のもんぢやねえか」
「其處が兄貴と俺との性根が違ふ處なんだ、ケチな野郎ならケチな野郎でいいから、俺は俺の思ふやうにして見てえ」
「それぢや何か、執念深く何處までも彼の女を附け廻さうと云ふんだな」
「左樣だ、みん事、俺のこの片腕であの女を此方のものにして見せる、兄貴の方に何か差會があるかは知らねえが、お前も苦勞人だから一番俺の男を立てさせて呉れ」
「百、お前が左樣いふ心がけなら其れでいいから思ふやうにやつて見ろ、其の代りあんまり出過ぎると、ちいーつと危ねえ事があるから、さう思へ」
「合點だ、どの道危ねえ橋は渡りつけてるんだから、地道を歩くのが馬鹿々々しい位なもんだ」
「うむさうか、それぢやあ、彼の女は近いうちに娘をつれて甲州街道を上つて甲府へ行く筈だから手前も一緒に行つて見たら宜からう、其の途中には手前が望む危ねえ橋が幾つも有るんだから渡れるものなら渡つて見ねえ」
「兄貴、お前もついて行くんだらう」
「俺が頼んで行つて貰ふやうな仕事だから、道中は眼が放されねえ」
「さうなると兄貴と俺と楯を突くやうなもんだな、兄貴を向ふに廻して、俺が色惡を買つて出るやうなものだ」
「まあ宜いやうにして見ろ」
七兵衞とがんりきとは此んな問答をして、少しばかりお互に氣まづい色を見せて、七兵衞は此の銀床を立ち出でました。
「困つた野郎だ、何をしようと多寡の知れたやうなものだが、詰らねえ事にしたくも無え、何とかして彼奴を追拂つてしまふやうな工夫は無えものか」
七兵衞は考へながら歩きましたが
「さうださうだ、女から持ち上つた事は女に限る、一番あの女輕業のお角といふ女を焚附けて嫉か

してやらう、さうしてがんりきの胸倉を取捉まへて、やいのやいのを定めさして、動きの取れねえやうにして置けば、此方も道中餘計な心配が無くつていい、こいつは宜い處へ氣が附いた、あの女の居る處は兩國の小屋で直ぐわかるだらう、これから行つて、罪なやうだが狂言を書いて見る、いやはや、彼方でも此方でも野呂松人形を操るやうな眞似ばつかり、おれも釣り込まれていい加減の狂言師になつたわい」

十三

宇治山田の米友は此の頃お君の身の上を心配してゐます。兩國の木賃宿で別れてから時々便りのある筈なのが更にありません。自分は程遠からぬ箱惣の家に留守番をしてゐる事だから毎日のやうに宿まで通つてお君の便りを聞かうとするが、さつぱり何とも云つて寄越しません。

ああいふわけで、米友は兩國の見世物小屋を追出されてから兩國の近邊へは立廻れないわけなのですが、こつそりと出入をして、若しお君らしい人が通りはしないかと思つてキヨロキヨロ見てゐましたが一向それらしい女の子は見えないから、いつでも失望して歸ります。米友の身體は小兵な上に背が低いことは申すまでもありませんが、肉附だとて尋常の人よりは少し痩せてゐる位ですから夜なんぞは誰でも皆んな子供だと思つてゐます。米友が一人で留守番をしてゐると近所の子供が寄つて來て、

「お前も一緒に遊ばないか」

と云ひましたが

「やあ、この人は子供ぢやあ無えんだ、大人だよ、をぢさんだよ」

それで近所の子供等は米友を、をぢさんといふやうになりました。

「叔父さんは槍が上手なんだね」

と云つて槍をいぢくる。

「そりや上手さ、この間は侍の泥棒が十人も來たんだけれど、をぢさんが此の槍一本で追拂つたんだねえ、をぢさん」

「をぢさんは背が低いねえ、俺らと同じ位だねえ、如何して其んなに低いんだらう」

「其りやお前、生れつきだから仕方が無いぢやないか、背が低くつたつてお前、をぢさんの面を御覽、皺が寄つてるぢやないか、だから年を老つてるんだよ」

「それにをぢさんは跛足だねえ、如何して跛足になつたの、馬に蹴られたんぢやないの」

子供は正直だから寄つて集つて米友の身體の棚卸をしてしまひます。米友もさすがに苦い顏をしてゐますが、子供の事だから笑つてゐるより外はないのを、子供はいい氣になつて米友の背中へ乘りかかつたり膝を枕にしたりして

「跛足だつて槍は使へるんだよ、ほら、此の間兩國へ來た印度人の黑ん坊を御覽、あの黑ん坊も跛

足だらう、それでも槍を使はせると素敵だつたぜ、金ちやんお前、あの黑ん坊を見たかい」

「見なかつたよ」

「話せねえな、印度で虎を退治して來た黑ん坊なんだよ、俺らはお父さんに伴れて行つて貰つたんだ、隨分怖い槍の使ひ方をして見せたよ」

米友はいよいよ苦い面をしてゐると子供は頓着なしに

「それがお前、途中でふいと居なくなつちまつたから、もう一べん見に行くつもりだつたけれど詰らねえや、でも此の頃また朝鮮から象使ひが來るんだとさ」

「何處へかかるんだい」

「前に印度人の槍使ひが出たあの輕業の小屋さ、娘輕業といふのがあつたらう、あれが朝鮮まで行つて歸つて來たんだとさ、それで朝鮮から象使ひを伴れて來て來月から彼處へかかるんだつて、だから俺らはまたお父さんに伴れて行つて貰ふんだ」

「俺らも伴れて行つて貰はうや」

子供達の此んな話を米友が聞咎めました。

「子供衆」

「何だ、をぢさん」

「朝鮮から象使ひが來るといふのは、あの何かい、元、女輕業や力持がゐたあの見世物小屋かい」

「さうだよ、もうビラが方々へ廻つてゐるよ」

「それで元あの小屋にゐた輕業や力持も歸つて來たのかい」

「皆んな歸つて來たよ、久々にてお目見えお馴染の一座なんて書いてあるよ」

「さうか」

米友は腕を組んで考へ込みました。甲府へ旅興行に出かけたにしては可なり日數がかかつてゐたが、序に處々の旅興行をして歸つて來たものだらう。歸つて來たとすれば何よりも先にお君からの便りが無ければならぬ。友さん今歸つたよと云つてお君が眞先に此の米友を尋ねなければならないのだ、つづいてムク犬も尾を振つて咽喉を鳴らして跟いて來なければならない筈なのだ。それにもうビラも出來て諸方へ廻つてゐるといふのに自分の處へ音沙汰がない。お君は此の米友を忘れてしまつたのか、あんな仲間へ入つてゐるうちに氣性が變つて俺等の事なんぞは如何でもいい事にしてしまつたんぢやあるまいか。どうも訝しい。米友は單純な頭を色々に捻つて見たけれど結局、米友の智慧では如何しても其の間の消息がわからないから、これは直に行つて掛け合つて見るより外はないと思案を固めました。

併し乍ら米友には彼の小屋へ行けないわけがある。見せ物小屋の掟で、あんな事をしてブチ壞しをやつた藝人は、見世物師の背後についてゐる破落戸が寄つて集つて手酷い制裁を加へて追出すのであつたが、米友のは全く無邪氣でやつた失策であり且つ槍の名人と來てゐるから荒つぽい事をせずに單

に追放だけで濟みました。それを今ノソノソとあの小屋の附近へ近寄らうものならドンな目に遭ふか知れない。兩國廣小路は米友に取つて鬼門であるけれど、今は其危險を冒しても米友は其處へ行かねばならなくなりました。

「をぢさん、何處へ行くの」

「うむ、俺らは廣小路まで行つて來る」

と云つて米友は急に跛足を引ずつて此の家を出かけました。

「今日は」

もう開場三日前、小屋の内外の裝飾で忙しい處へ米友はやつて來ました。

木戸番は訝怪な面をして米友の面を見てゐると、米友は

「輕業の娘達は皆んな甲州から歸つたのかね、一人殘らず歸つて來たのかね」

「はい、皆んな歸りましたよ」

「では君ちやんも歸つたんだらう、君ちやんが歸つたなら、ちよつと此處まで面を出して貰ひてえ」

「お前さんは誰方でございます」

「君ちやんに會へばわかるんだ」

「此んな人が尋ねて來たつて君ちやんに左樣云つて呉れ」

木戸番は米友の面をよく見ました。

「今此方の方は忙しいんですから手が放されません、裏から廻つて樂屋の方へ行つて御覽なさいまし、樂屋でお聞きなすつて見て御覽なさいまし」

「さうですか、其れぢや樂屋の方へ廻つて見るかな」

米友は久しぶりで此の小屋の内部へ入つて見ました。

大勢の人は氣が附かないで立ち働いてゐるが、米友は何だか氣が咎めるやうな心持で、勝手知つた る樂屋の處まで來て、恐る恐る

「今日は」

樂屋では一座の美人連が出揃つて新興行にかかる小手調べをしてゐる處でした。

「今日は」

米友は女輕業の美人連の稽古場を覗き込むと

「誰方」

「おやおや、米友さんぢやないか」

「まあ、米友さんが來たよ、可愛らしい米友さんだよ」

美人連は稽古をしたりお化粧をしたりしてゐる手を休めて米友の方を見ました。米友は怖る怖る

「皆さん、暫らく」

「米友さん、ほんとに暫らくだつたね、何處に如何してゐたの」

「彼方の方に居たんだ、皆さんは何時歸つたんだい」
「わたし達は此の間歸つたのよ、まあお上り」
「上つちや惡からう、親方は居ねえのかい」
米友は樂屋の中を見廻しましたけれど、不幸にして、お君の姿は見えませんでした。土間を見たけれどもムクの姿をさへ見ることが出來ませんでした。
「親方は、ちよつと其處まで用達しに行つたから、もう直に歸るだらう」
「あの……あの、君ちやんは居ねえのか」
「君ちやん……」
と云つて、美人連は面を見合せました。
「君ちやんも旅から一緒に歸つたんだらう、何處に居るんだい」
米友は、美人連が見合せた面をキヨロキヨロと見てゐました。
「君ちやんはねえ……君ちやんは歸らないんだよ」
「おや、君ちやんは歸らないんだつて、皆ながら斯うして面を揃へてゐるのに、君ちやんだけが歸らないのかい」
「ええ、君ちやんだけが歸らないんだよ」
「其りや如何したわけなんだい、君ちやん一人を置いてけ拋りにして來たのかい、そんな譯ぢやあ

るめえ」
米友がお君の安否を氣遣ふ容子があんまり熱心であつたから、美人連は可笑しがつて、つい冗談を云つてやる氣になりました。
「米友さん、君ちやんは旅先で、いい旦那が出來たから其れで歸るのが忌になつたのだよ」
「いい旦那が出來たつて」
「わたし達なんぞは何れも此んな御面相だから誰もかまつて呉れる人は無いけれど、君ちやんは容貌よしだから忽ち旦那が附いちまつたんだよ」
「其んな筈はあるめえ、其りや嘘だ」
米友は、いよいよ一心になりました。一心になればなるほど其の態度が滑稽になりますから、人の惡い美人連は、そんなに惡い氣分ではないけれど、ついついからかひが惡どくなつて行きます。
「第一此處に君ちやんの居ないのが何よりの證據ぢやないか、ほんとにあの人は仕合せ者だよ、田府の御城内でお歴々のお方を擒にして今は玉の輿といふ身分で大した出世なのに、わたし達なんぞは何時までも此んな稼業をしてゐなけりやならない、ほんとに君ちやんを思ふと羨ましくて堪らない」
口から出まかせに此んな事を云ひましたのを米友は、其んな事は無いと思ひながらツイツイ釣り込まれて
「ナニ君ちやんが俺らに相談なしで、そんな事をするもんか、俺らがちやんと附いてるんだ」

ウカウカと米友が斯う云つたのが美人連の笑ひを買ひました。

「ホホホホ、左様でしたねえ、君ちやんには米友さんが附いてゐるんでしたねえ、こんな色男を捨てて君ちやんも罪な事をしたものさ」

彼等は辛辣な輕侮を米友の上に加へました。

女輕業の美人連は興に乘つて米友に毒口を利きました。こんな毒口は樂屋中で言ひ古されてゐる毒口でしたけれども、單純な米友は嚇と怒りました。

「馬鹿にするない、其んな了簡で言つたんぢや無えぞ」

「米友さん、怒つちやあ不可けないねえ、君ちやんに捨てられたと思つて其んなに自棄を起しちや可けないよ」

「馬鹿」

米友は眼をクルクルと剝いて美人連を見廻しました。

「君ちやんは俺らと約束があるんだ、約束を破るのは女郎と同じことなんだ、君ちやんは俺らと約束を破つて一人で殘つてゐるやうな女ぢや無えんだ、それを殘して來たのはお前達が惡いんだ」

「手が着けられないね、米友さん、お前が君ちやんと何んな約束をしたか知らないが現に君ちやんは此處にゐないで、江戸へ歸るより甲府がいいと云つて殘つてゐるから文句がないぢやないか」

「お前達が殘して來たんだ」

「馬鹿におしでないよ、斯うして座を組んで一つ鍋の御飯をいただいて歩いてゐれば姉妹同樣ぢやないか、離れようといつたつて離れられるわけがないぢやないか、それに君ちやんは花形だから親方の方でも離すことぢやありません、それを振り切つて行く位なんだから仕合せ者だよ」

美人連は此んな事を言つて米友を口惜しがらせた。

「本當の事を言つて呉れよう、本當の事を」

米友は焦れて歎願するやうに言ひました。

「本當の事はね……本當の事は、やつぱり君ちやんだけは旅から歸つてゐないんだよ」

「本當に歸らないんだね」

「それは本當だよ」

「よし、其れぢや俺らが其の甲府といふ處へ行く、さうして君ちやんに會つて話をして見りやわかる事なんだ、甲府は何といふ處で何といふ人の家にゐるんだ、其れを敎へて呉れ」

米友は斯う云つて急き込んだけれど、女輕業の美人連はそれほどに行き詰まつてはゐないから

「まあ、ゆつくり旅の話をして上げるから上つて休んでおいでよ、お茶を入れるから」

これ等の美人連も一蓮寺では、お君とムクのお蔭で危ない處を救はれてゐるから、それを思へばお君の爲にも米友の爲にも、もつと親切に身を入れて應對してやらなければならないのですけれど、米友を餘り輕く見てゐるからツイ身が入らないのでした。

「ちえッ」

米友は、モドかしさに舌を鳴らして氣がいよいよ焦立ちました。

「だから旅へ出るのをよせと云つたんだ、それを聞かないで出たから惡いんだ、ムクだつてさうだ何んとか役に立ちさうなものぢやねえか、ちえッ」

米友が舌を鳴らして立つてゐる處へ、お角が歸つて來ました。

「親方のお歸り」

と云つて、美人連の迎へを受けて樂屋へ入つて來たお角が米友を見ると、眼に角を立てて

「おや、見慣れない人が來てゐるよ、誰かゐないの、ナゼあんな人を此處へ通したんだらう、ここへ通して都合のいい人だか惡い人だか判りさうなものぢやないか、あんな人が小屋の廻りにウロウロしてゐて人氣に觸らないと思ふのが御目出度いね、ほんとに氣の利かない奴等だ」

お角の機嫌が大へんに惡い。美人連のうちの一人が米友の傍に寄つて來て

「お前さん、早くお返り、親方に怒られると大變だから」

十四

輕侮と冷淡の限りを浴びせられて米友は悲憤を怺へながら小屋を出て來ました。殊に親方のお角は如何ういふ蟲の居所か頭ごなしに米友を罵つて、水を浴びせかけないばかりにして米友を追ひ出させてしまひました。

いつもの米友ならば我慢しきれない處でしたけれども、感心に深く爭はずして此の小屋を出たのは日の暮れる時分でありました。

さすがの米友も此の時は、實に口惜しかつたと見えて兩國橋の眞中に來た時分に、立ち止まつて橋の欄干から下を覗きながら口惜し涙をハラハラと落します。

いくら自分が粗忽で黑ん坊を失敗つたからと云つて、折角聞きに行つたのだから、一通りの消息位は知らせて呉れても宜かりさうなものを、ああして寄つて集つて冷かした上に、ガミガミと突き出してしまふ事は、いくら稼業柄とは云ひながら薄情な奴等だと其れで口惜しくて堪りませんでした。

「腹が立つて堪らねえ」

米友は齒噛みをして兩國廣小路、見世物小屋の方を睨めました。

「覺えてやがれ」

米友の面に殺氣が浮びました。廣小路の見世物小屋の方を睨んで

「覺えてやがれ」

米友は遂に殺氣を含んで橋の眞中から相生町の方へ歩き出すと

「もし、兄さん」

と肩を叩いたものがあります。
「誰だ」
米友が振り返つて見ると七兵衛でありました。元より米友は七兵衛を知らないが、七兵衛は米友に見覺えがあります。
「兄さん、お前さん、これから何處へおいでなさるのだ」
「何處へ行つたつていいぢやねえか」
「先から此處で見てゐるとお前さんは何か心配がお有りなさるやうだ」
「大きにお世話だ」
米友は七兵衛の面を睨みました。
「私は通りかかりの者だが、如何やらお前さんの姿に見覺えがあるから、失禮な事だが暫らく立つて見てゐました、さうするとお前さんが頻りに何か云つて腹を立てておいでなさるやうだから、もしも變な氣を起して淘然とおやりなさるのかと思つて斯うして兩手を出して見てゐましたよ」
「大きにお世話ぢやねえか、川へ飛ばうと首を縊らうとお前達の世話にやならねえ」
米友は悲憤の思ひで一杯ですから何を云つても耳へ入りません。
「兄さん、若しお金にでも困るやうな事があつたら、隨分力になつて上げようぢやないか」
「大きにお世話だと云ふに、何時お前に俺らが金を借りたいと云つたい」

「左樣ガミガミ出られちやあ、折角親切に話をして上げても何にもならない」
「俺らはお前に親切をして呉れと云つた覺えは無え」
「でも、斯うして身投げでもしようと云ふには、よくよくの事があるんでせう、御主人のお金を遣ひ込んだとか、身の振り方に困つたとか、何かよくよくの事があるから、そんな無分別な考へを起すんだらう、それを通りかかつて見れば、見す見す見捨てて行くのは、人情として出來ない事だから其れで大きにお世話だが、言葉をかけて見る氣になりました」
「何時、俺らが身投げをすると云つたい、お前、俺らが此處に居たつて、身投をするつもりで此處にゐるんだか、また別に何か考へてゐるんだか、人の心持がよくわかるね、お前の方で身投げをするやうに見えたつて、俺らの方では身投げなんぞする氣ぢやあ無えんだ」
「兄さん、其んな事を言つて强がりを言つて見た處で、容子でわかりますよ、容子で、他から見るとお前さんの容子といふものが餘ほど變で、口惜し紛れに身投げをするか人殺しをするか、その思案に暮れてゐるやうな噓梅に見えますから、其れで私は見すごしが出來ないわけなんでございます」
「噓を云ふない」
「噓なもんですか、第一お前さんは伊勢の國から遙々出ておいでなすつて、今晩泊る處もないから其れで死ぬ氣におなんなすつたのだらう」
「何だ、お前は俺らが伊勢の國から出て來た事を知つてるのかい」

「知つてゐますとも、伊勢の國で宇治山田の米友さんといふのはお前さんだらう」
「おやおや、俺らの處から名前まで知つてやがる、俺らの方ではお前を知らねえ」
「それで兄さん、お前は盗賊の罪を被て、あの尾上山といふのから突き落されて死んだ筈だが、それが生き返つて今兩國橋の上に立つてゐるんだから、私は驚きましたよ、幽靈かと思ひましたよ」
「おや、お前は其んな事まで知つてるのか」
米友は不安と怪訝と交々七兵衛の面を見返しました。
「心配しなくつても宜うございます、お前さんの罪の無いことは私がよく知つてゐるのでございますからね」
「うむ、俺らには全く罪が無えんだ、盗人は外にあるんだ」
「左樣でせうとも、お前さんは盗人なんぞなさるやうな方ではない」
七兵衛の信用を得て、米友はやや安んじた形でありました。
「俺らもあれから隨分運が惡くなり通しでね、中々苦勞をしたよ」
「其りやお氣の毒でしたねえ」
「彼方へ行つても此方へ行つても馬鹿にされるんで遣り切れねえ」
今までの突慳貪に引き換へて訴へるやうな聲で云ひ出したから、七兵衛も可笑しくもあり可哀想にもなりました。

「私もお前さんの噂を聞いて、ほんとにお氣の毒で堪らないから、何處かで逢つたら色々お話をして上げようと思つてゐた處でした、今日はまあ宜い處で會ひました」
七兵衛と米友とは何方が先といふ事無しに兩國橋を本所の方へ向いて渡りながらの身の上話。

十五

七兵衛に焚きつけられたお角は案の如く口惜しがつてしまひました。百藏は此の頃、さる後家さんの處へ出入りするやうになつて、その後家さんが近いうち甲州へ出かけるに就いて、百藏も其の跡を追つて甲州へ行くから氣をつけなければならないと七兵衛はお角を嗾しかけました。その上、右の後家さんといふのは根岸に住んでゐて先日お前さんの家へワザと古證文を突きつけたりなんぞした女だと云ふことを聞かされると、勝氣のお角は矢も楯もたまらないほどに逆上せ
「あんな女にこの上、馬鹿にされて堪るものか」
お角は小屋へ歸つて其の腹癒せに折角來合せてゐた米友を散々罵つて、其の足でまた山下の銀床へ飛んで行きました。さうして百藏の胸倉を取つて思ふ存分に文句を云ひました。さすがのがんりきも此れには閉口して、頻りに申譯をして見たけれどお角は耳にも入れないから、結局がんりきがお角の前に謝罪つて、やつと其の場を濟ませたけれど、それからお角はがんりきの家に入浸つて其の傍に附

きつきりといふ事になつてしまひました。何かと云へば双物三昧でもし兼ねない勢であつたから、がんりきも閉口して當分外出も出來ない事になつてしまひます。

七兵衛は其の有様を見て手を拍つて自分の策略が當つた事を喜び、その間に手形が下りて、お絹とお松とはがんりきを出し抜いて甲州街道への旅路に出かけました。七兵衛は自分が見え隠れに此の女連を守護して行くつもりであつたけれど、幸に甚だ都合のよい從者を一人發見しました。其の從者といふのは卽ち宇治山田の米友であります。お君が甲州へ一人殘されたことの眞相を七兵衛を通してお角から聞いて貰つた處が、女輕業の美人連から冷かされた時のやうに宜い旦那が出來たから甲府へ殘つたわけではなく、全く火事の爲に行衛不明になつたのだとわかつて、米友はお君の事が心配になつて遙々甲州まで行つて見る氣になりました。

跛足でこそあるけれども米友は杖をついて飛んで歩けば、當り前の人には負けない速力で歩くことが出來ます。それで乘物で行く足弱の伴には結構役がつとまる。それは槍を取つても取らなくても生れついての俊敏で氣の早いこと無類で、氣が早くて直ぐに喧嘩を買つたりする、これは人氣の悪い郡内あたりを通らすには善し悪しであるけれども、そこはよく七兵衛が意見をして置きました。

「兄さん、道中は無暗に人と物爭ひをしちや可けねえぜ、甲州街道の郡内といふところは人氣の悪い處だから女連と見たら雲助共が因緣をつけるだらうけれど、酒手をドシドシ呉れてやりさへすりや他愛なく納まるんだから、お前の一本調子で相手になつちやあ可けねえよ」

「うむ、可いとも」

「さうかと云つて、丸つきり溫順しくしてゐると悪い奴に馬鹿にされるから、時々威勢を見せつけてやらなくちやあ可けねえ、殊に此の街道にはがんりきと云つて一本腕の胡麻の蠅が居るから、何でも一本腕の男が傍へ寄つて來たらウンと嚇かしてやるがいい」

「うむ、一本腕の胡麻の蠅が來たら用心するんだな、何と云つたけな、その胡麻の蠅の名前は」

「がんりきといふ渾名がついてるんだ、ちよつと色の白い小作りな綺麗な男だ、其奴が駕籠の傍へ寄つて來たら用心をしなくちや可けねえ、夜の宿屋なんぞも他に怖いものは無えが、其の一本腕だけは油斷をしちやならねえから確かり頼むよ」

「うむ、宜いとも」

「おれは道中師だから街道筋に如何な悪い奴がゐるかといふ事をチヤンと心得てゐるんだが、恐らく其のがんりきといふ奴位悪い奴は無え、またあの位スバシツコイ奴も無え、別けて女連と見た日には執念深く附いて廻つて仕事をする奴だから、其のつもりで確かり頼むよ」

七兵衛は米友に向つて、なほ委しくがんりきの人相や悪事の手並を語つて、それに多くの敵意と注意を吹き込んで置きました。

お絹とお松とには正式の手形、米友は其の從者として正當に關所を越えることの出來るやうに手續が出來ました。箱惣の家にゐる時分に際にまかせて米友は自分で工夫して、自分が名をつけた杖槍。

槍の穂だけを取り外して込の處を摺上げ、それを何時でも柄の中へ箝め込む事が出來るやうにして、穂を懐中に入れて置き、柄は杖にしてついて歩き、いざといふ場合には、それを仕込んで咄嗟の間に槍にしてしまはうといふ武器が出來たから米友は其れを持つて、頭には笠をかぶり首根ッ子へ風呂敷包みを背負つてお絹とお松との駕籠の直ぐあとへついて出かけました。米友の其の風采はお絹をもお松をも笑はせました。

それより三日目に兩國の女輕業の見世物が開けて、銀床に附ききりであつたお角も、どうしても小屋へ歸らなければならなくなりました。その隙を見てがんりきが根岸のお絹の住居へ駈けつけて見ると戸が閉つてゐました。

「失策つた」

急いで取つて返して旅の仕度をしてゐる處へ折悪くお角が歸つて來ました。

「お前さん、何をしてゐるの」

「何、その些とばかり」

「足どしらへをして何處かへお出でなさるの」

「何、近所まで」

「近所の何處へおいでなさるの」

「何、そんなに遠い處ではない」

「そんなに遠い處でなければ足どしらへなどしなくて宜いぢやないか」

「でも、久しく旅をしないから」

「おや、久しく旅をしないから何處かへ旅をして見たくなつたといふんですか、知つてますよ、その旅先はちやあんと呑み込んでゐますからね」

「何、少しばかり足慣らしをやつて見るんだ」

「出かけるなら出かけて御覽なさい、わたしといふ者をさし置いて行けるものだか行けないものだか、さあ出るなら出て御覽なさい」

お角は其處にあつた荷物と、がんりきが結びかけた脚袢を取つて拋ります。

「何をするんだ、やい巫山戯た事をするない」

がんりきは其の脚袢を取つてまた片手で足へ巻きつけようとすると

「可けませんよ、わたしの見る前でそんなものを足へ巻きつけると罰が當りますよ」

「やい、何、何をするんだ」

「何をするんだも何もありやしない、わたしが此の間から見張つてゐるのは何の爲めと思つてるの、此んな事が有るだらうと思ふから、其れで忙がしい小屋の方をさし置いて此方へ來てゐるんぢやないか、それに一寸の隙があれば、此の仕末だから呆れ返つちまふぢやないか、あれ、まだ其んなものを

足へ巻きつけて、片一方手で捻くり廻してゐる不器用なザマと云つたら、ほんとに突き倒してやるよ」

「な、なにをするんだ」

「突き倒すよ、片一方手ぢや起きられないだらう、獨り立ちで起きられもしない癖に、よくわたしを踏みつけにしたね」

「お前は何か感違ひをしてゐるやうだ、おれは今日組合の方の寄合で千住まで出かけなくちやならねえのだ、それで遊散旁々、久しぶりで草鞋を穿いて見ようと云ふんだ、何もお前に疑はれるやうな筋は有りやしねえ」

「冗談をお言ひでないよ、火事場へ行くんぢやあるまいし、千住まで行くに草鞋を穿いて行く奴があるものかね、組合の寄合に足ごしらへをして行くなんて、そんな馬鹿々々しい事があるものかね、千住が餘つぽど遠くつてお氣の毒様」

「如何も手が着けられねえ、お前が何と云はうとも友達が待つてゐるんだ、約束がしてあるんだから、やめる譯には行かねえ」

「おや、友達が宜かつたねえ、そりや左様でせうとも、いいお友達がお有りなさるんだから、一刻も早く行つてお上げなさる方が宜いでせう、向ふ様も嘸待つておいでなさるでせうけれども、わたしと云ふものがあつて見れば、さうも參りませんでお氣の毒様、ほんとにお氣の毒様」

と云つてお角は口惜しがりながらがんりきを横の方から突き倒す。

「此の阿魔、あんまり圖に乗ると承知しねえぞ」

突倒されたがんりきは起き上つて眼の色を變へると

「さあ、わたしに恥を掻かせたあの後家さんの尻を追つて行きたいんだらう、何處へでもおいで、グルになつてわたしを出し抜かうとしたつて、わたしの眼の黑いうちは……」

お角はまた口惜しがつて武者振りつきました。

十一　駒井能登守の巻

一

甲府の神尾主膳の邸へ來客があつて或夜の話。

「神尾殿、江戸からお客が見えるさうだがまだ到着しませぬか」

「女連の事だから、まだ四五日はかかるだらう」

「何しろ有名な難路でござるから、上野原あたりまで迎への者をやつては如何でござるな」

「それには及ぶまい、關所の方へ會釋のあるやうに話をして置いたからまあ道中の心配はあるまいと思ふ」

「關所の役人が心得てゐる事なら大丈夫であらうが、貴殿御自身に迎へに行く心があつたら近い處まで行つて御覽になるも宜しからうと思ふ」

「然らば勝沼あたりまで行つて見ようか知らん」

「勝沼までと云はず、一層笹子を越えて猿橋あたりまで行つて見ては如何でござるな」

「笹子を越えるのはチト億劫だが併しまた天目山の古戰場を初め、あの邊には見て置きたいと思つて其の機會を得ない名所が幾らもある、さう云はれると此際行つて見たいやうな氣持がする」

「行つて見給へ、江戸からのお客といふのを途中で迎へて、それを案内してあの邊の名所を見物し、

その歸りに鹽山の湯にでも浸つて見るも一興であらう」

「左樣、それでは一つ氣休めをして來ようかな」

「それが宜からう」

と語り合つてゐる一人は神尾主膳で、一人は分部といふ組頭。この二人が別懇の間柄であることは此の會話でも知れます。この話をしてゐる處へ

「お客樣、山口四郎右衞門樣がお出になりました」

「ナニ、山口殿が見えたと、それは丁度よい、分部殿も居らるる、直ぐにこれへお通し申すがよい」

「畏まりました」

間もなく山口四郎右衞門といふのが入つて來ました。

「やあ、分部殿もお居でか、大分寒くなりましたな、山國である故寒さの來ることも早いのは是非もないが、それにしてもまだ此んな筈はあるまい」

「左樣、八ヶ岳にも雪が深いし、地藏岳も大分被りはじめたやうだから、それが風の加減で甲府の空を冷たくするのであらう、中々寒い」

「まあ、此處へ來て溫まり給へ。寒さ凌ぎに一献參らせる」

「催促をしたやうで恐れ入るな」

「拙者ひとり寒さ凌ぎをやらうと思うてゐた處、折よく分部殿がお見え、それにまた貴殿のお出で

で甚だ嬉しい、悠くりと寛いで行つて呉れ給へ」

三人は飲んで漸く興が加はる時分に、山口四郎右衞門が何をか不平面に

「御兩處、近いうちに新しい勤番支配が來ることをお聞きなされたか、その風聞が多分御兩處の耳にも入つた事と存ずる」

「ナニ、支配が來ると、然らば今まで缺けてゐた勤番支配の穴が埋まるのか、それは初耳ぢや、我我はトンと左樣な噂は聞かぬ、して如何なる人が何處から來るのぢや」

神尾と分部とは、自分達の上に立つべき勤番支配の一人が新しく任命されて來るといふ報告を山口の口から耳新しく聞いて意外に感じました。單に意外に感ずるばかりではなく、不安と妬心とがきらめいて見えるのです。

「左樣か、まだ御兩處には其の事をお聞き召されなんだか、然らばお話し申さう、此の度お役目を承はつて我々共の支配に來るのは表二番町の駒井ぢや」

「ナニ駒井、二番町の駒井能登が來るのか、あの駒井が」

神尾主膳は人事でないやうな思ひ入れで、急がはしく眼ばたきをしました。

「如何にも其の駒井能登守」

「左樣か、駒井が來るのか」

神尾は絶望して取つて投げるやうな返答ぶりでした。

「太田筑前殿は老巧者だ、我等が上に戴いても敢て不足はないが、駒井は何者だ、あれは我々よりズツト年下、然も知行高も格式も以前は我々に劣ること數等、若い時は眼中に置かなかつたものぢや、今となつてあれに先を越されて剰つさへ、我々が支配として頭に戴かねばならぬとは情ない、ああ、さう聞いては酒が旨くない、世の中が面白くないわい」

「それは我々も同じこと、成程、駒井は學問は多少有るには有るだらう、我々が道樂をして遊んでゐた時分に、彼奴は青い面をして書物と首つ引をしてゐたのだから、相當に理窟は云へるやうになつたらうけれど、それよりも彼奴の得手は上役に取り入ることだ、老中あたりに緣があつて胡麻を擦つた其の恩賞で引上げられたのだ、彼奴は頼もしさうな面をして老中あたりの頑固連を口說き落すには妙を得てゐる」

「駒井も駒井だが老中も老中だ、一體我々甲府勤番を何と心得てゐる、成程いづれも相當にしたい三昧を盡した報ひで、こんな狹い天地に逼塞はしてゐるけれど、以前を云へば駒井の上に出でるものは幾らもある、云はば甲府勤番は苦勞人の集まり、粹人の集と云ふべきだ、容易な人間で其の支配が勤まると思はれるのが大不足だ、相當の人を遣はすのが、我々へ對しての禮ぢや、然るに駒井如き若年者を寄越して我々の頭に置かうなぞとは、見縊られたも亦甚だしい哉、二百餘名の甲府勤番が其れで納まるか知らん、駒井を頭にいただいて唯々諾々と其の後塵を拜して納まつてゐるか知らん、若しそれで納まつてゐるやうなら世は末だ、德川の天下もいよいよ望みなしぢや」

「その通り、我々が不平なるが如く、二百餘名の勤番誰とて駒井を快く思ふものはあるまい、さりとて公儀からの御役目、それを反くといふわけにも行くまい、いよいよ駒井が來たら我々共の覺悟は如何ぢや、如何なる思案を以て駒井を迎へるか、豫め腹を定めて置かねばなるまい」

「拙者は病氣所勞と披露して當分は引籠る」

「病氣所勞も宜からうけれど、いつまでも左樣は云つて居られぬ、もつと男らしい手段はないか、甲府勤番の反の强さを見せつけて駒井の膽を奪うてやるやうな仕事はないか、駒井が着早々縮み上つて尾を捲いて向ふから逃げ出すやうな謀があらば、これ以て甚だ痛快なる儀ぢや」

「成程」

「機先を制して駒井能登を壓倒するのぢや、さうして甲府勤番には骨があつて彼等如き若年者で支配などとは以ての外といふ處を老中にまでも思ひ知らせてやるのぢや、それをせねば後來の爲もある」

「成程」

ここに三人の不平が火を發するほどに强くカチ合つて、さうして彼等の上に來るべき年の若い新しい支配といふのを呪ひ盡すの相談が持ち上つてしまひました。

甲府の勤番支配は三千石高の芙蓉間詰であります。その下には與力が十名と同心が五十人づつあつて、五百石以下の勤番が二百人は甲府の地に居住してゐます。支配は二人であることもあり一人は缺員のままであることもあります。御役知は千石で本邸は江戸にあつて住居は甲府へ置く。駒井能登守

が勤番支配に任命されたのは如何いふ意味だかよく判りません。或者はこれを榮轉だとして嫉みます、或者は左遷だとして悲しみます。兎にも角にも能登守がまだ三十に足らぬ若年者であつて此の地位に置かれたことは、ドチラにしても其の非凡である證據にはなります。その頃の幕議に長州出兵論といふのがある。薩州と長州との横着が餘りといへば目に餘る、如何しても先づ長州から征伐してかからねば幕府の威信が地に落つるといふのが長州出兵論の根據であります。この長州出兵論を唱へる者の中には、徳川譜代恩顧の者で徳川に取つては無二の精忠者があります。是等の人は本心から薩長あたりの暴慢を惡んで、徳川の爲に死なうといふ連中でありました。また夫等の熟心な長州出兵論を鼻先でセセラ笑つてゐる者もありました。これは徳川とは餘り緣の薄い方の平民側の中の薩口に多いのです。その言ひ草を聞けば

「ナーンだ、長州出兵なんて、餘計なことだ、お膝元を見るがいい、貧窮組がああして騷ぎ廻つてゐるぢやないか、貧窮組がああして騷ぎ廻つてゐる間に、賴まれもしない長州くんだりまで兵隊を出して如何する氣だ、そんな事をするよりは印旛沼の掘割でもした方が餘つぽど增しだ」

こんな事を言つて馬鹿々々しがつてゐる者もあります。

また一方には譜代以外の者で盛んに長州出兵に聲援を與へる者もありました。これは隨分變り者で元より徳川の爲に死なうといふほどの緣故もなければ熟心もないのだが、何か景氣をつけて自分達の仕事をこしらへたいといふ浪人者、或は自稱志士の連中が多かつたといふ事であります。口先ばかりでも景氣のいい事は雷同し易いから、精忠無二の長州出兵論よりも、景氣のよい人達の唱へる出兵論が、大分徳川に受がよくなりました。罷り間違つても其れに異議を唱へるやうな口ぶりをしようものなら、徳川に對して反逆者でもあるかのやうに見られたり、薩長の犬であるかのやうに疑ぐられたりしますから、出兵、出兵、出兵に限るといふやうな事に傾いて行きました。何でもドシドシ兵を繰り出して長州から薩摩の果、琉球まで踏みつぶしてやらねばならぬと意氣込を示した者も大分あつたやうです。

この出兵論が正しいか正しくないかは知れないが、いよいよ事實になつて見ると愚劣を極めたものでした。最初の長州征伐は如何にか斯うにかお茶を濁して幕府の面目をつないだけれども二度目となつてはカラキリお話になりませんでした。幕府の威信を張るどころではなく、却つてグニヤグニヤと腰が碎けて長州からあべこべに寄り出されて引込みが附かなくなつてしまひました。

長州征伐をやつても、やらなくても、もう大抵幕府の壽命は定まつてゐたのだから、それがいいでもなし惡いでもないけれど、兎に角長州征伐をやつた爲に、徳川幕府の壽命がまだ十年持つ處を九年早めてしまつたやうな形勢は爭ふべからざるものであります。

勝海舟のやうな目先の見えたものが——さういふ場合に出て來たからお互に幸でありました。けれども其の勝さんすら、いよいよ長州征伐が手に負へなくなつた時に引つぱり出されたので、それまで引籠を仰せつけられて幕府から勘當を受けてゐたやうな有樣でありました。

駒井能登守は此んな時節に甲州の山の中へ來るやうにさせられたといふ事も何かの廻合せでありませう。

駒井能登守が甲府へ入ることを悲しむ連中はこんな事を云ひます。

「あれは山の中へ送るべき人間ではない、海の外へ向はせなければならない人物だ、外國との折衝がこれほど面倒になつて行く世の中に彼の人物を山の中に送り込む當局者の氣が知れない、駒井を甲州へやるのは舟を山へ送るのと同じで、而も其の舟も、舊來の傳馬船や荷足ではなく新式の舶來の蒸汽船だ、蒸汽船を山へ積み込むとは成程此の頃の德川幕府のやりさうな事だ」

これは駒井最屓の方の言ひ分で、駒井が西洋の知識に暗からず、且外交官として相應しい器量のすべてを持つてゐるやうに信じてゐる者の口から出ました。

それと反對の方の言ひ分は斯んなものであります。

「あれは若い者共には人氣は相當にあるけれど、本人はただ西洋の知識を多少心得てゐるといふだけの事で、實務にかけては善い加減の無能者で、時々調子を外れた處で思ひ切つた事をするから、危なくて仕方がない。腫物に觸るやうな此の頃の外國向きの事に彼んな青二才を使へるものではない、甲州の山の中へ入つて、摺れからしの勤番の中で揉まれて來るのが身の爲だ」

これは駒井を多少煙たがつてゐる老成者の間から出る評判でありました。兎に角未知數の人間だけれども、ドの道、まだまだ叩き上げなければ物にならないといふ嫉視と輕侮とそれから幾分か敬畏の

念も入つてゐるのであります。

さうかと思ふとまたこんな一說もあります。幕府は駒井の人物を見拔いてワザと甲府へ納めるのだ、甲府は天險であつて、萬一德川幕府がグラつき出す時は、そこが唯一の根城となる、萬一の場合を慮かつて、駒井を遣はして地利や兵備を調べさせて置くのだ、これも亦駒井最屓の者の憶想でありました。

また其の他の一說は、駒井能登守が甲州入りをするやうになつたのは、高島四郎太夫に關係することである。駒井は早く四郎太夫に就て洋式の砲術を研究したり西洋の事情を調べたりしたから、高島と同じやうな嫌疑で此の左遷を蒙つたのだと。これも駒井崇拜の若い人々の口からは洩れて來るのでありました。

高島四郎太夫（秋帆）が幕府から怖れられたのは、他の勤王家の連中が幕府から怖れられたのとは全く違ひます。秋帆には大藩を動かして權力を爭つて見ようとか、砲術を研究して其れによつて虚名を博さうとか、そんな野心は少しも無かつたものであります。國内の事に空しく慷慨悲憤してゐる連中などの梯子をかけても及ばない處に其の着眼と規模とがあつて、長崎の微々たる小吏でありながら、諸侯の力を借りずに獨力でもつて大事を行ふほどの實力を持つてゐたから、其れで怖れられたのです。けれども其の秋帆とても、もう罪（？）を赦されて江川太郎左衞門を助けていろいろ熱心に其の研究をつづけてゐる時分の事であつたから、何も今更其の祟りが駒井能登守へ報つて來るといふ理由はな

い事なのであります。

兎にも角にも、こんな風評の間に送られて、行先でまた神尾あたりの、あんな惡感情に迎へられて甲府へ乘込む若い支配の前途も多事でない事はありません。

その行列は存外手輕で、僅に與力同心と小者の類と同勢十人足らずで、甲州街道を上つて行きました。

甲府の城内へも何時出かけて何時到着するといふ沙汰なしに出かけましたから、出迎への來るべき模樣もありません。

駒井能登守は若くてさうして美男でありました。大森か川崎あたりまで遠乘をする位の心持で、陣笠をかぶり馬乘袴を穿いて十人足らずの一行と共に駒木野の關所へかかつて來ました。

關所の役人も實は驚いた位で、今頃不意に勤番支配がお出にならうとは思ひませんでしたから、多少狼狽して之を迎へました。能登守は其の關所へ暫らく休息して、關所役人から附近の談などを聞いてゐました。

その時丁度駕籠で乘りつけて來た一人の女が駕籠から出て關所の前へ通りかかりました。

「これこれ、其方は何處へ行く」

關所役人が呼び止めますと、其の女は

「甲府の方へ參りまする、如何かお通し下さいまし」

「手形を持つて居るか」

「はい、持つて參りました」

女は鼻紙袋を出して其の中から一枚の厚い御手判紙の疊んだのを役人の前に捧げますと

「ええ、其の方は女輕業の藝人を引連れ……かくと申す女であるな」

「左樣でございまする」

「このお手形には廿餘人の一座と書いてあるが、其の者共は何處にゐる」

「それは後から參りまする」

「待て待て、このお手形の日附が違ふ、エーと、其の方は今より三月ほど前に此の關所を越えて甲府へ出た事があるやうに覺えてゐるが、此れは其の時の手形だな」

「ええ、その……」

「成らん、斯樣なものは用向の濟み次第お上へ御返濟申さねばならん、これを以てお關所を通ることは相成らん」

「では、そのお手形では通れないんでございますか」

「左樣」

「それではお書き換へを願ひたいものでございます、急に甲府まで參らねばならないんでございますから」

「馬鹿な事を言ふな、さう急に書き換へなどが出來るものではない、江戸へ立ち歸つて相當の手續を踏んでお願ひ申せ」

「其んな事をしては居られません、わたしの連合が甲府にゐて、急に病ひついて、大へん危ないのでございますから、何卒、お通しなすつて下さいまし、お手形は古うございますけれど、此の通り少しも怪しいものではございませぬ」

「怪しい者であらうとも無からうとも、拙者はお關所を預かる役目、手形のない者は通すことならぬ」

「それではわたしが困つてしまひます、若し連合にまでも亡くなられてしまつたら、わたしは死目に合へないぢやございませんか、助けると思つてお通し下さいまし」

「解らぬことを申すな、その方の事情が如何あらうともお上の御法を曲げるわけには相成らぬ」

「それでも折角お江戸から此處まで來たものが如何してまたお江戸へ歸られませう、ほんとに斯うしてゐる間も氣が焦くんでございますから、お通しなすつて下さいまし、女一人位通つたつていいぢやありませんか、お目こぼしといふ事もあるぢやございませんか、如何ぞお賴み申しますよ」

この女は女輕業の頭のお角でありました。お角は一生懸命に役人に賴み込んで見ましたが許さるべくもありません。

「諄い！　この上彼此申すと處分致すぞ」

役人は言葉を荒くして叱りつけます。

「おや、これほどにお願ひ申すのに判らないお役人だこと」

「何と申す」

お角が餘り强情だから役人は立つて抓み出さうとしました。

椽に腰をかけて見てゐた駒井能登守が

「これこれ松浦」

用人を呼びました。

「はい」

「あの女は血迷うてゐるやうぢや、其方が行つて元來た方へ追ひ返してやれ」

と云つて能登守は扇を持つて指圖をしました。能登守が元の方へ追返してやれと扇で差し示した方向は、女が元來た江戸の方ではなく、これから行かうといふ甲府の方でありました。

松浦は其れを心得たやうにヅカヅカと女の傍へ來て

「これ女、お關所の前で左樣な事を申してはならぬ、早く歸つて出直して參るがよい」

と云つて女の手を取つてグングンと引張り出しました。

「これほどにお願ひ申してお聞き入れがなければ其れまでございます、若し連合が甲府で亡くなるやうな事になれば、わたしは江戸へ歸つて親類の者や何かに面が會はされませんから、此處で死ん

でしまひます、お關所の前で死んでしまひます」

「さてさて、女といふ者は聞きわけのないものぢや、死にたくば他へ行つて勝手に死ね、お關所を汚すことは相成らぬ」

無理無體に引張り出されたから、女の力で爭ふことは出來ません。

「ほんとに口惜しい、わからないお役人だ、解らずや」

お角は引摺出されてしまひましたけれど、其の引摺出された處は意外にも甲州口でありました。

「愚者奴」

ポンと關所の外へ突き放されて腰が碎け、暫らく起き上られないでゐたが、起き上つた時分に氣がついてお角は喜びました。

「ああ、わかつた、あの若い殿様が粹を利かして下すつたのだ、元來た方へと云つて、ワザとわたしを甲州口の方へ突放すやうに御家來の方に指圖をなされたものを知らずにお怨み申したわたしは、やつぱり女だから馬鹿だね、殿様有難う存じます、あとでお禮を申し上げまする」

お角は起き上がつてお關所の方へ向いてお禮を云ひました。

それから大急ぎで甲州の方へ歩いて行きました。

がんりきに出し抜かれてしまつたお角は斯うして前後の考へもなく其のあとを追ひかけて來ました。お角に取つては、がんりきが其れほどに可愛ゆいわけではなく、お絹といふ女が憎らしくて堪まらないのです。あんな古證文を突きつけて人を馬鹿にした上に、がんりきと一緒になつて此れ見よがしの振舞でもされた日には、意地も我慢もあつたものではないのですから、お角は後を追つかけて來ました。

腕こそ一本落したけれど、足の方に變りのないがんりきの歩きぶりに、到底お角の足を以て如何ともする事は出來ません。ましてがんりきの方は變則な道を通り、裏道を行くのは慣れてゐるから、お角が追ひかけて見た處で到底ものにならないけれども、ドノ道行く道筋は甲州街道で、落ち着く所は甲府、先へ行つたのは女連、途中何處かで追ひつかなければ、甲府で落ち合ふ、その時は、がんりきとあの後家様をつかまへて、思ふ存分暴れてやらうと、例の如く懐中には剃刀なんぞを忍ばせて駕籠を飛ばせて來たわけです。

幸に旨くお關所が抜けられたけれど、これから先が本當の難所。女一人で通れる筈の道とも思はれません。

お角が一人で小佛の方へ行つてしまつてから、駒井能登守の一行が此の關所を立つて同じ方向に出かけました。

關所で駕籠乘物の用意をするといふのを謝絶つて、やはり馬で行きました。險岨な道へかかつたら馬から下りて歩くと云つて出て行きました。

小佛の宿から峠まで二十六丁。

「併しあの女は愚かな女ぢや、駒木野を越えたからとて、まだ此の先に上野原の關所もあれば、駒飼の關所もある、關所よりも尙ほ難澁な小佛峠といふものもあれば笹子峠といふものもある、それを知つてか知らずか、女一人で甲府まで乘り込まうといふのは、大膽と云はうか、愚かと云はうか」

これを話のはじめに、與力同心の中で色々の話が持ち上りました。

「いや、あれは眞實亭主の病氣を思うて出かけて來たのか如何か判らんが、兎に角思ひ込んで來たやうな女である、あんなのが何か思ひ込むと大膽な事をするものぢや」

「左樣、女輕業の元締とか云ひ居つたが、彫物の一つもありさうな女ぢや、併し惡黨では無いらしい」

「惡黨ではあるまいが、惡黨に變化しさうな女である、あれが惡黨になると鬼神お松といつた形でこの峠の上などに住みたがる」

「いや、さういふ事はあるまい、あんなのは罷り間違つて亭主を剃刀で切るとか、胸倉を掴んでギウと締めるといつた程度で、それ以上の大外れた事は出來まい、寧ろ平常は内氣で口も碌に利かないやうな女が、時とすると大膽な事をする」

「それは何方とも言ひ兼ねる、女はハズミ一つであるから、そのハズミの具合によつて如何な事をやり出すか豫じめ斷りは出來ない、女その者の性質といふよりも、時のハズミが女を賢婦人にしたり毒婦にしたりする例が多い」

「それも一理はあるやうぢや、併しそれではハズミと云ふものを餘り重く見過ぎた嫌ひがある、如何にハズミが附いたからとて政岡が鬼神お松になることは無からう」

「性質にもよりハズミにもよる、罪は其の兩方にあると見るのが穩當であらう、明智光秀の如きも信長公があれほどの短氣で無かつたならば、謀叛はしなかつたであらうが、たとへ信長公が短氣であつた處で、光秀其の者に謀叛氣が無ければ、あんな事にならぬ」

「要するに鐘と撞木との間の鳴るといふ處で我々共の役目に於ても其の通り、强く罪人を扱うて却つて罪を大きくしてやることになり、或は寛かに扱ひ過ぎて却て增長を來すやうな事もある」

「寛嚴宜しきを得たりといふことは政治の要術で、その術はまた治者の人格である、下らぬ人格の者が、みだりに寛嚴の術を弄すれば却て人の輕侮を招く」

「大阪の與力、大鹽平八郎の事件などがそれぢや、あれは跡部山城守殿が大鹽を見るの明が無いから起つた事である、奉行が大きければ大鹽は非常な用をする、奉行が小さくして大鹽が大きかつた故あんな事になつたといふ說がある」

「大鹽は兎に角近代での人物である、是非善惡は論ぜず貧民の爲にあれほどの事を爲し得る奴は他にはあるまいと思はれる、あの亂も亦大鹽自身の人物もあらうけれど、時のハズミといふものも無きにあらず」

「國民の富豪に對する怨恨が漸くに熟してゐたから火蓋が切れたのぢや、それに就けても思ふのは

此の頃江戸に起つた貧窮組、淺ましいやうでもあるし、可笑しいやうでもあるが、あれも亦時世を警しむる一つの徵候」

向井能登守の一行は時事を論じたり、風景を語つたりしながら、小佛峠の頂上まで登つてしまひました。

頂上に中の茶屋があつて其處に休んで見ると赤飯がありました。その赤飯を大番振舞にして與力同心、仲間馬方に至るまで食ひました。能登守も亦それを抓んで喜んで食ひました。なほお茶を飲むものもあれば水を飲む者もあります。頂上まで上つて見ればこれからは下りであります。下り道は上り道よりも樂であります。上野原泊りの豫定は遊びながらも着く事が出來るのであります。

能登守は柄に似合はない健脚でした。一番早く參るだらうと思はれた能登守が一番疲れないで歩いて來ましたから

「御支配は健脚だ、いや身體の華奢なものは其れだけ足の負擔が輕いからそれで疲れないので、我我は頑健肥滿に生れた罰で却て山路に難澁する」

と云つて與力の中で一番肥滿して一番よく話をした男が一番早く疲れて愚痴を云ひました。

「各々方は、餘り口を利きなさるから其れで疲れるのだらう、すべて險岨を通る時や遠路をする時は、あまり口を利かない方がよいさうぢや」

能登守は斯う云つた。成程、一番疲れない能登守が一番喋らなかつた。

「無言で氣息を調へて歩けば宜しからうけれど、そこが旅は道づれで、色々の話をして歩きたいのが凡夫の常だ、よしよし、今度は無言の業を續ける」

兎に角、中の茶屋で休んで、赤飯などを嚙つてゐると、誰も彼も疲れなんぞは一時に忘れてしまひました。その元氣で茶屋を下りにかかりましたが上りに懲りて無言の業を續けると云つた肥滿の與力は、澁面を作つて口を噤んで歩きましたが、それに引かへて能登守が今度は色々の話をやり出しました。街道筋の地勢や要害を指さしながら、土地案内の與力同心に聞いて見たり自分の意見を述べて見たりしました。時々諧謔を弄して一行を笑はせたりしました。それで話の花が咲いて、登りの時よりは一層賑やかになりました。強いて口を噤んでゐた與力の連中も亦談話中の人となつて疲れた足を引ずりながら、息を彈ませて氣焰を上げてゐました。

山腹の左の方から溪水が湧き出て瀧のやうに流れてゐます。それが深い谷に落ちて淵になつたり、また巖に激して流れ出したりする變化が面白い。其の溪水を幾十曲りもして見ると向ふに二軒の茅屋が見える。その前に板橋があつて、溪水が其處へ來て逆に流れてゐる景色が中々面白いから一行は其處で暫らく立つて景色を見てゐました。さうすると駒井能登守が

「あれ見よ、あの家の後を怪しげな男が通るわ」

と云ひました。一同は谷川の景色ばかり見てゐたのでしたが、能登守に斯う云はれて前の山の二軒の茅屋の處に眼をうつすと、其處を一人の旅人が急速力でサツサと歩いて行くのを認めます。菅笠を被

つて道中差を差して、足ごしらへをしてキリキリとした扮装で、向ふ岸の茅屋の後を飛ぶが如くに歩いて行きます。

「あれは何者だ、足の早い奴」

と驚いてゐると、能登守が

「如何にも怪し氣な奴ぢや、關所の裏を通つたものと見ゆる、誰ぞ行つて追蒐けて見られよ」

「心得ました」

同心が二人、板橋を渡つて向ふ岸へと飛んで行きます。

怪し氣な旅の男はそれを知つて山の中へ逃げ込んで片くれ姿を隱したから、追ひかけて行つた同心は空しく歸つて來ました。

「怪しい奴、足の迅い事無類でござりまする」

同心は先づ以て其の逃げ去つた奴の足の迅いのに舌を捲いて復命しますと

「年はまだ若いやうであつたな」

「年はまだ若いやうでございました、三十の上を幾つか越した位、遊び人風の男で、後ろ姿をチラリと見かけましたが、其の迅い事、迅い事」

「何しても怪しい奴ぢや、すべてあの通り足の迅い奴には惡い事をする者が多い、よく演劇や講談に現はれる雲霧仁左衛門といふ惡漢も足の迅い男であつたさうぢや」

「ああ、その雲霧仁左衛門といふ惡漢、それは此の上野原から出た奴にございます、この上野原の然るべき家に生れた惡漢でございました」

「足が迅いと高飛が自由に出來る、それで今日此處で惡事をしても明日は他國へ行つて知らぬ面してゐる、惡事千里を走るとは此の事ぢや」

「足が迅いから自然手が長くなるのでございませう、冗談はさて置き、あの怪しい奴、取り逃がしたは殘念、直に手配を致して取押へさせませう」

「それには及ばぬ」

「折角、御支配のお目に留まつたものを取り逃がして面目がござりませぬ」

「向ふの岸と此方では無理もない事ぢや、まして人間並を外れた足の迅い奴、逃げるのが當り前で、逃がした方に罪はない」

「それと知つたら聲を掛けずに何か手段が有つたらうものを」

「これから先の事、甲府へ入るまでに屹度、あの者が再び現はれる事があるに違ひない、その時は油斷せぬやうに」

「心得ました」

與力同心の面々が皆多少の好奇心に嗾られました。元より是等の人々がワザワザ手配をして騷ぎ立てるほどの代物ではないが、道中の腕比べといふやうな事になつて見ると、多少の張合が出て來るの

でありました。それ故、無駄な事と思つたものまでが、休み茶屋や、泊り泊りにも用心して見る氣になりました。併し乍ら別段に變つた事もなく與瀬の宿へ入つて、これこれの者の姿を見かけなかつたかと尋ねて見ても、誰も其んな者を見かけたといふ者は無く

「ただ、先ほど峠道で若いお神さんが惡者に苛められてゐる處を、鳥澤の親分が通りかかつて連れておいでになつたばかりでございます」

と土地の人が云ひます。

「若いお神さんが惡者に苛められてゐる處を鳥澤の親分が助けて連れて返つたと、して其の若いお神さんといふのは……また鳥澤の親分といふのは何者」

與力同心が土地の者の言葉尻を捉へて其れを訊ねて見ました。

よく聞いて見ると峠道で惡い胡麻の蠅にかかつて苦しめられてゐたといふ女は、駒木野の關を通してもらつた女であつて、それを助けた鳥澤の親分といふのは鳥澤の条といふ親分である事がわかりました。

鳥澤の条といふのは郡内切つての親分であつて、隨分惡辣な事もするし、また相應に義俠らしい事もする。この界隈では厄介物視してゐるものが半分と、畏服してゐるものが半分といふ勢力である事も直ぐにわかりました。

それを聞いただけで、駒井能登守の一行は例の通り上野原までやつて來ました。上野原の宿へ着いた時も先觸が無かつたから役員共を驚かしました。

「御支配のお着」といふ事は本陣を大へんに騷がせたけれども其の外には至つて無事で一泊して翌日未明に出立。

上野原を出て少しばかり坂を下ると、もう直ぐに川であります。川の兩岸には川越の小屋が立つてゐて、眞裸になつた川越人足が六七人ほど散らばつてゐるのが一目に見えました。

「これが鶴川の渡し場でございます」

「成程、先年諏訪因幡守殿が人足共に困らせられたといふ渡しはこれか」

「あれ以來、人足共も大分大人しくなりましたが、やつぱり氣の荒い郡内の溢れ者でござるから、折々旅人が難儀する由でござりまする」

「行々は何とか取締りをしたいものぢや、何處へ行つても、この裸蟲には弱らせられる」

一行は川越の小屋の處まで來ると宿役人から先に出向いてゐて、頻りに人足を指圖してゐました。

「おいおい、御支配のお通りだ、他の旅人は控へてゐるが宜しい、御支配のお通りが濟んでから通らつしやい」

と云つて、川の兩岸の通行を暫らくさし押へました。それが爲に兩岸に多くの通行人が溜つて駒井能登守の渡つてしまふのを待つてゐました。

「如何したのか、兩岸に人が集つてゐる」

能登守は不審に思ひました。

「御支配様、如何ぞこれへお召しなすつて下さいまし」

蓮臺を持つて來ました、屈竟な男が二十人ほどで其の蓮臺を擔ぐのであります。

「お役人様方は、どうか野郎共の肩にお召し下さいまし」

與力同心の面々は肩車で越えるといふ事であります。其の他、中間、槍持、鋏箱擔ぎ、馬方に至るまで人足の肩を借りたり手を借りたりして中々大業な事でありました。駒井能登守はそれと氣がついて

「宿役人、こんな大業な事をしないが宜かつた」

能登守は仕方が無しに其の蓮臺に乘りました。二十人の人足が曳々聲を出して其れを擔ぎ上げました。甲州に入つての勤番支配の權威は絶大といふべきものです。此の街道を通る參覲交代の大名は餘り數が多くは無いが、それ等の大名が通る時よりも勤番支配の通る時の方が鄭重でありました。

能登守は、それが爲に數多の通行の人を留めてしまつた事を氣の毒に思つて早く手輕に通つてしまひたいのだが、鄭重にする爲に宿役人は川人足の勢揃ひや人數配りに手數をかけて中々に時間を取るのであります。能登守の蓮臺がやつと擔ぎ出されて與力同心の面々の肩車が、それにつづかうとした時に上野原の方から慌しく此の場へ飛んで來たのは誰あらう、宇治山田の米友でありました。

二

米友は例の通り跛を引いて杖をついて横つ飛びに此の河原まで駈けて來て

「通して呉れ、通して呉れ、俺らが悪いんぢや無え、まだ出かけねえと云ふから、それで安心して待つてたんだ、處が出し抜かれたんだ、彼奴の口前に引かかつて、無駄話をしてゐる間に出かけられちやつたんだ、愚圖々々してゐると俺らが申譯の無え事になつちまふんだ、どうか通して呉れ」

米友は眼の色を變へて川を渡らうとしますから、宿役人や人足までが驚きました。米友の事ですから、あんまり周圍の事情に見境がなく、笠と首根ッ子へ結ひつけた風呂敷包みが上になつたり下になつたりするのを構はず、無論勤番支配であらうが、與力同心であらうが眼中に無く、暗雲に川へ飛び込んで押渡らうとするから、忽ちドッコイと押へられてしまひました。

「やい、手前は何だ」

「通して呉れ、通して呉れ、無駄話をしてゐるうちに出し抜かれちやつたんだ、斯うしちや居られねえ」

「馬鹿野郎」

「何だい、何をしやがる」

「よく眼を開いて見やあがれ、川の向ふも此方も通行止なんだ、皆んなああして御遠慮をしてゐるのが分らねえか」

「遠慮なんぞをしちやあゐられねえ、人から頼まれて乗物の目付をして來たんだ、それが先へ出ちまつたんだ、俺らは其のつもりぢや無かつたんだ、まだ出かけねえと云ふから、それで安心して待つてたんだ、悪い奴の計略に引つかかつたんだ」

「何を云つてやがるんだい、この馬鹿野郎、引込んでゐやがれ」

人足は拳を固めて米友を殴りつけてしまはふとすると、米友は其の手の下を潜つて飛び出し

「お前達の手は借りねえんだ、一人で越すからいいよ」

尻を引絡げて川へ入り込まうとするから人足共がバラバラと駈けて來て米友を圍んでしまひ、その手を持つてギウギウ引き立て

「方圖の無え馬鹿野郎だ」

ポカポカと二つ三つ食はせてしまひました。

「おやおや、打つたね」

「まだ、あんな事を云つてやがる、叩きのめして簀巻にしてやれ」

「ナゼ打つんだい、ええ、ナゼ俺らを打つたんだ」

「この野郎、小の癖に口の減らねえ野郎だ」

「まあ、をぢさん待つて呉れ、打つんならお打ち、打たれてもいいから其の代り、をぢさん此處を通してお呉れ、ね」

米友は、それでも人足と爭ふことの不利なるを覺つてか、一ばしの智慧を出して妥協を試みようとしたが、どうして此の場合、川越人足が米友の口前位で承知するものではありません。

「面倒臭いから、叩きのめしてしまへ」

爭はずしてゐる米友を、又も拳を上げてガンと食はせました。

「あ、痛え！」

米友も、さすがに面をしかめて痛みを怺へねばならぬ位に手強く打たれて、思はず片手で頭を押へた時に續けざまにポカポカと拳の雨が來ましたから、米友の癇癪が一時に破裂しました。

「もう勘辨が出來ねえ、此奴等、甲州街道の川越の人足共、あんまり人を馬鹿にしやがるない、こは手前達の川ぢやあるめえ、甲州街道の鶴川だらう、手前達が此の川を持つてるわけぢや有るめえ、天下樣の往來だい、俺らが通つてナゼ悪いんだ、渡し賃が要るなら呉れてやらあ、手前達は渡し賃を貰つて人を渡しさへすりや宜いんだらう、通すの通さねえの安宅の關の辨慶見たいな御大層な事を云ふない、富樫にしちや出來過ぎてらあ、第一手前達は富樫といふ面ぢやねえ」

さあ可けない、米友はまた啖呵を切つてしまつた。

米友流の啖呵を切つて開き直ると、手に持つてゐた杖を眼にも止まらない迅さで取り直して、今自

分を撲つた人足の眼と鼻の間に一刺を加へました。

「あッ！」

その人足は引繰返る、餘の人足は殺氣が立つ、人足を一人突倒して、しばらく彼等を呆氣に取らした米友は二三間河原の向ふへツツと飛越して岩の上へ跳ねあがり

「俺らは伊勢國から東海道を旅をして江戸の水を呑んで來た宇治山田の米友だ、東海道には天龍川だの大井川だのといふ大きな川があるんだ、こんな山ん中の些ぽけな川とは違つて水もモツトうんと有らあ、そこには川越の人足も幾百人とゐるけれど手前達のやうな譯のわからねえ人足は一人も居なかつたんだ、をぢさん、俺らは此の通り足が惡いんだから大事にして通してお呉れと頼めば、ウン兄い氣をつけて歩きねえ、轉ぶとお前は脊が低いから淺い處でもブクブクウをするよなんて云やがるから、馬鹿にするない、脊は低くつても泳ぎが出來るんだいと威張つてやると、あははと笑つて通すんだ、手前達は山ん中の猿だから世間を知らねえや、だから教へてやるんだ、東海道の川越人足は左樣したものなんだ、同じ人足でも人足ぶりが違はあ、第一面からして違つてらあ、俺らが急ぎだから通して呉れと頼むのを事情も聞かねえで、無闇に撲ちやがる、撲たれていいものなら撲たしてやらあ、此方に惡い尻があるんなら、幾らでも撲たれてやらあ、此處まで來て撲つて見やがれ、米友が持つておいでなさる此の杖は杖と見えても杖ぢや無えんだ、罷り間違つたら槍に化るやうに仕掛がしてあるとはお釋迦でも氣がつくめえ、やい山猿人足、手前達は世間を見た事が無えから此の米友がドノ位槍

が遣へるんだか其の見當がつくめえ、山猿と云はれたのが口惜しけれや此處まで來て見やがれ、米友の槍が怖いと思つたら、早く川を通せろやい」

斯う云ひながら米友は持つてゐた杖を片手に取つてブンブンと振り廻し、猿のやうな面をして白い齒を剝いて罵ると、只さへ氣の荒い郡内の川越人足が、こんな事を云はれて納まる筈がありません。

「巫山戯た野郎だ、叩き殺せ」

この騒ぎで、駒井能登守の連衆を擔ぎかけた人足も與力同心の股倉へ頭を突つ込んだ人足も皆んな其れをやめてしまつて、米友の方へバラバラと飛んで行きました。宿役人は青くなつて其の騒ぎを抑へにかかります。

意外の騒動が起つたので駒井能登守は已むなく其の騒ぎを見てゐました。與力同心の連中もそれを見てゐました。いづれも人足共の騒ぎ、宿役の連中が取り鎭めるであらうから自分達が手を下すまでもあるまい、それで騒ぎの濟むのを待つてゐるうちにも、岩の上へ跳り上つた米友の露骨無遠慮な罵倒を聞いてハラハラしました。

人足共も無暗に撲る事は亂暴だが川越人足は川越人足である。これで通つたものを、東海道の人足とは人足振が違ふとか、面まで違ふとか、山猿がどうしたとか、言はんでもよい惡口を言つてゐるのは隨分向ふ見ずの無茶な奴だと思つて、その鎭まるのを待つてゐるが鎭まりません。

「矢でも鐵砲でも持つて來やがれ」

岩の上に立つた米友を下から渦を巻いて押し寄せた川越人足、何程の事もない、取捉まへて一捻りと素手で登つて來るのを曳と突く、突かれて筋斗打つて河原へ落ちる。つづいて

「この野郎」

手捕にしようとして我勝にのぼつて來るのを上で米友が手練の槍、と云つてもまだ穂は着けてないから棒も同じ事。

これだから米友は困りものです。呉々もその短氣を起すことを戒められてゐるに拘はらず短氣を起してしまひます。無暗に喧嘩を買つてしまひます。槍が出來るといふ自信がある爲に人を怖れないし、それに、どうしても曲つた事が嫌ひだから、ポンポン理窟を云つてしまひます。

不幸にしてただ腦味噌に少しく足りない處があるらしく、それが爲に時の場合と相手の利害を見ることが出來ません。役人であらうとも雲助であらうとも更に頓着がないから困りものです。

お君でも傍にゐて和めたり諫めたりするから江戸へ來て以來はあんまり大きな騒ぎを持ち上げませんでした。大きな騒ぎを持ち上げない事もない、見世物小屋の失敗などは可なり大きな失敗でしたけれども、それが爲に古市に於ける場合のやうに槍を振り廻すことの無かつたのはまだしもの幸でしたが、今はたうとう本式の喧嘩を持ち上げてしまひました。然も其の相手が最も悪い、雲助の中でも最も性質の悪い郡内の雲助ですから、米友も實に飛んでもない相手を引受けたものです。

市川流老藏は甲府へ乘り込む時に此處の川越に百兩の金を強請られた爲に怖毛を振つて、後には此本街道を避けて大菩薩越えをしたといふ事。性質の悪い事に於ての甲州街道の雲助は定評がある。その雲助を、あんな事を云つて罵しつてしまつたから、その怒り出すことは火を見る樣なものです。何の爲か、ここの人足は長い竹竿を横にして其れに十數人の人足がつかまつて乘物の先に立つて川を渡す、今其の竹の竿を擔ぎ出して米友を引拂つてしまはうとしました。

駒井能登守の一行は不意の出來事に驚いて暫らく立つて見てゐると、巖の上に立つて杖を遣ふ米友の敏捷な事。

蟻のやうに上りかける人足を片端しから突いて突き落す。寄手がいよいよ多ければ、いよいよ突き落す。裸體の雲助が岩の上からバタバタと突き落される處は、丁度千破劍の城を攻めた北條勢が楠の爲に切岸の上から追ひ落されるやうな有樣ですから、目をすまして見物してゐると

「此奴等、俺らの懐中にまだ槍の穂が藏つてあることを知らねえか、今斯うして手前達を突き落してゐるのは此の棒だけれど、いよいよといふ場合には穂をつけて、本當に突き殺すから左樣思へ、今は怪我をしねえやうに密と突いてゐてやるんだ、穂をつけてから、米友が本當に暴れ出したら一々突き殺して、この河原を裸虫で埋めるやうな事になるから左樣思へ、何だい、そんな長い竿なんぞを持つて來やがつて、俺らを叩き落さうと云ふんだな、よしよし、そんなら本當に棒の天邊へ双物を食付けるぞ、さあ此れだ、これをちやあんと棒の先きへつけて槍に組み立てるやうに仕掛けが出來てるんだ、此れで突いたら命は無えんだから左樣思へ、面の眞中でも咽喉佛でもお望み通りの處を突いてや

る、些とやソツと危ねえんぢやねえや」

米友が懐中から取り出した笹穂は先生自身の工夫で、忽ちそれを杖の先に取り着けて、其の穂を左の掌で握つて下へさげ、石突をグツと上げて逆七三の構、丁度岩の上に立つて水を潜る魚を覘ふやうな姿勢を取ると、足を拂ひに來た竹の竿、それを身を跳らして避けると今上りかけた人足の面の眞中から血汐が流れ出して

「呀ツ」仰向けに河原へ落ちる。

「野郎、仲間を突きやがつたな、さあ承知が出來ねえ」

血を見ると人足が狂ふ。

事態いよいよ危險と見たから、駒井能登守の手にゐた與力同心が出動せねばならなくなりました。

與力同心の出動によつて此の騒ぎは鎭まりました。併し納まらないのは雲助共、あんな惡口を云はれ且面の眞中を突かれた負傷者をさへ一人出してゐる、五分々々の仲裁では納まりやう筈がないから與力同心は兩方を押へた後に米友を番小屋の方へつれて來ました。さてその後の裁判が振つてゐます。

米友に槍で突かれた人足は一人、それは面を突き破られただけで、可なり重い傷には違ひないけれど生命に別條はない。だから其れを償ふ爲に米友を片輪にしたら承知が出來るだらう。併し米友は跛足であつてもう片輪になつてゐる。この上に片輪にしてしまつては命を縮める事になるから、その代

りに頭を坊主にして其れで許してやれといふ駒井能登守の裁判でした。

能登守も笑ひながら裁判しました。與力同心も笑ひながら

「それは御名案、どうぢや川越共、それで許してやれ、許してやれ、相手は此の通り正直者だから」

與力同心が斯ういふと、ハラハラしてゐる宿役人共も亦笑ひ出して

「御支配樣のお裁判だ、この男を坊主にして笑つてやれ、若い衆、それで我慢して呉れ、我慢して呉れ」

八方から斯う云はれて、さすがの川越人足も納まりかけました。

「あはははは、この野郎を坊主にしたらドンナ坊主が出來上るだ、見た處餓鬼のやうでもあるし、馬鹿に年寄り染みた處もあるし、何だか得體のわからねえ野郎とつちやあ、いいから坊主にして笑つてやれ」

「坊主、坊主」

早くも番小屋から怪しげな剃刀だの鏡臺だのが擔ぎ出されます。

米友は詰まらない面をしてゐます。俺を坊主にするなどとは以ての外だといふやうな面をしてゐたが、トテも坊主になるものなら大人しく坊主になつてやらうといふやうな得心をしたやうにも見られます。

物好きな宿役人が米友の後へ廻つて剃刀を取つたが其の剃刀が餘り切れないせゐか、山葵卸で擦る

やうでありました。痛さを怺へて凝として剃られてゐる米友、その面も可笑しいが、いよいよ剃上がつた坊主も可成りをかしいと見えて、一同でやんやと囃して笑つたけれど米友は笑はなかつた。

「これで宜いのか」

坊主頭を振つて見て、それから例の風呂敷包みを首根つ子へ結ひつけて、笠を被ると

「俺らは急ぎなんだ」

斯う云つて横つ飛びに川の中へ飛び込んでしまひました。その擧動が、あんまり無邪氣で輕快でしたから、人足共も笑つて、米友がひとりでズンズン川を越して行くのを敢て止めませんでした。この一場の小喜劇がこれで濟んで、川彼方を跛足を引き引き駈けて行く米友の形を散々に笑ひながら漸く能登守一行の川渡りが濟みました。しばらく遠慮をしてゐた兩岸の旅客も漸く渡ることが出來ました。

「いや旅をすると樣々の面白いものを見るわい、駒木野の關所で見た女、次に小佛を下りて見かけた足の早い男、今またあの奇妙な小男、さて此の次には何を見るか、それにしてもあの小男が槍を使ふのは至極の精妙、見た處、武家奉公をしてゐる容子もなし、出し拔かれた、出し拔かれたと云つて駈けて行くが、あの調子ではまた何かに打かつて大事を惹き起さねばよいが」

駒井能登守は斯う云つて米友の身の上を心配しながら、やはり悠々として甲州入りの旅をつづけましたが、程なく鳥澤の宿へ着いて此處の本陣で一休み。

三

鳥澤で休んでゐるうちに、また樣々の雜談がありました。この附近で香魚が捕れて其の味が至極よろしい事、また山葵も取れる事、矢壺坂の古戰場といふのがある事、太鼓岩、鸞岩、白糸瀧、長瀧などの名所があるといふ事、それから矢坪坂の座頭轉がしの難所の事になつて

「房州の小湊へ行く道にお仙轉がしといふのがあるが、此處には座頭轉がしといふのがある。座頭轉がしとは何か由緒がありさうな名ぢや、如何いふわけで、そんな名前がついたのだ」

本陣の主人が答へて

「ただ山の中腹に開いてをりまする路が羊の腸みたやうにうねつて居りますから、煙草の火の借り合が出來るほどの處へ行くにも廻り廻つて行かねばなりません、或時、二人の座頭が此の道を通りまする時お互ひに言葉をかけ合つて參りましたが、途中で後の者が〈オーイ〉と申します、前のものが〈オーイ〉と返事をします、近い處に聞えたものですから、眞直に行くと谷へ落ちて死んでしまひました、それで座頭轉がしといふのださうでございます」

「この街道は道が嶮しいばかりでなく、人氣なども中々荒いやうぢや」

「人氣は中々荒いさうでございます、どうも郡内者といつて旅の者が怖れておいでなさるさうでど

さいますが、住んで居ますれば、やつぱり同じ人間でございますから、そんなに荒つぽいとも存じません、頼むと後へ引かないと云つたやうな片意地の處もございまして、附き合ひやう一つでございます」

「この鳥澤に条といふ者があるか、鳥澤の条といつてこの界隈に知られた男があるさうな」

「へえ、鳥澤の条、そんな者があるにはあるでございますが、お話を申上げるやうな人體ではございません」

と云つて、主人は鳥澤の条の事をあんまり話したがらない。風景があつたり名物が出たりすることは多少にも自慢にもなるけれど、あんな人間の存在することはあまり名譽とも思はないらしくて、条の事は問はれても語らずに

「何しても、此の通りの山の中でございますから、景色と申しても名物と申しても知れたものでございますが、そのうちでも甲斐絹と猿橋、これがまあ可成り日本中へ知れ渡つたものでございまする」

「さうだ、猿橋と甲斐絹の名は知らぬ者はあるまい、その猿橋ももう近くなつた筈」

「これから、ほんの僅かでございます、そんなに大きな橋ではございませんが組立が變つて居りますから、日本の三奇橋の一つだなんぞと云はれて居りまする、猿橋から大月、大月には岩殿山の城あとがございまして、富士へおいでになるには其處から別れる道がございます、それから初狩、黒野田を通つて笹子峠」

本陣の主人は一通りの道案内を申しました。一行のうちには此處を屢々通つたものもあるのだから、そんなに委しく云ふ必要はないと思つて手短かに案内をしたが、大部分は初めての甲州入りだから、珍らしがつて名所の話をします。殊に日本三奇橋の一と稱せらるる猿橋に近くなつたといふ事が好奇心を嗾つて

「一體、その日本の三奇橋といふのはドレとドレだ」

「周防の錦帶橋、木曾の棧橋、それに此の甲斐の猿橋」

一行のうちの物識が答へます。やがて此の本陣を出て右の猿橋へかかつた時分に、そこで一行は、橋以外にまた奇體なものに打着かる事になりました。

鳥澤で休んで、駒井能登守の一行がまたも悠々と甲州街道を上つて行くと、程なく猿橋まで來かかりました。

猿橋は有名な橋。その橋の處へ來ると往來の人が怖々と橋の左側の方ばかりを小さくなつて駈けるやうにして通るから、與力同心の面々が不思議に思つて

「ナゼ眞中を通らぬ、橋がこはれてゐるならナゼ普請をせぬ」

と云つて咎めると、通りかかつた男が

「あ、あの通りでございます」

青くなつて指さしをしたから、其の指さしをした處を見ると、欄干に細引が結へつけてあつて其れ

から釣荵を吊したやうに何か吊してあるやうです。何が吊してあるのかとよく見定めると人間が一人、四ツ手に絡んで高さ十七間の猿橋の眞中から吊り下げてありました。

「こりや怪しからん、誰が此んな事をした」

「鳥澤の親分が斯ういふ事をやりました」

「鳥澤の親分とは何者だ」

「鳥澤の条といふ、このあたりに聞えた親分でございます」

「何者であらうとも、斯様な殘酷な事をするのを見逃して置くのは何事ぢや、ナゼ助けてやらぬ」

「条が申します、これを解いてやつた者があれば生かしちや置かねえと斯う申しますから、正直な土地の人は慄へ上つてまだ手をつける人はございません」

「憎い奴ぢや、上を怖れぬ仕方、早く引き上げてやれ」

與力同心は仲間小者と力を合せて此の細引にかけて吊してあつた人間を引き上げてやりました。引き上げて見ると、もう眞蒼になつて息が絶えてゐる模様でしたから、藥を呉れたり水をやつたりして介抱すると幸に息を吹き返しました。

「これ、氣を確かに持て」

「有難うございます」

「其方は何者だ、どうして斯様な目に遭つたのだ」

「如何も濟みません、なあに、些とばかり此方の惡戯が過ぎたから、其れで此んな目に遭つたんでございます、打捨つて置いて下さいまし」

「斯様な殘酷な事を致すものを打ち捨てては置けぬ、聞けば鳥澤の条とやらいふ惡者の仕業ぢやさうな、うむ、その条といふ者は何處にゐる」

「なあに、鳥澤の親分がやつたんぢやあございません、俺が慰みにやつて見たんでございます」

「扨々、貴様はわからぬ奴ぢや、包まず申せ、貴様の爲に仇を取つてやる」

「なあに、仇なんぞは取つて戴かなくつても宜しうございます、お蔭様で地獄から呼び戻されたのが何よりで、それでもう充分でございます」

「貴様は其の条とやら云ふ惡漢を怖れて包み隠すと見えるな、我々が聞いた以上は如何なる惡漢なりとても、後の祟りは少しも心配はないのぢや」

「如何致しまして、たとへ条であらうとも、鬼であらうとも、後の祟りを怖がつて其れで包み隠すといふやうなわけぢやございません、どうか打捨つてお置きなすつて下さいまし」

「貴様が白狀しなければ、別に調べる道もある、兎も角我々と一緒に本陣まで同道せい」

「如何か、此のままお免しなつて下さいまし、歩けません」

こんな酷い目に遭はされながら何とも訴へないのは其處に何か仔細が無ければならぬと思つて與力同心の面々は、この男を引き立てようとした時に氣がついたのは此の男に片腕の無いことでした。

これより先、猿橋の西の詰の茶屋の二階で郡内織の褞袍を着て長脇差を傍に引きつけて酒を飲んでゐた一人の男がありました。年は五十に近いのだが、でつぷりと太つて額際に向ふ傷があつて人相が険しい、これは前に屢々名前の出た鳥澤の粂といふ男であります。

粂は二階から障子を開け拂つて猿橋を一目にながめながら

「如何だい、野郎をあんなにしてやつた、いい心持だらう、あんなのを眺めて酒を飲むと餘つぽど旨え」

粂は、猿橋の眞中から龜の子のやうに、がんりきの身體を吊下げて其れを見ながら酒を飲んでゐるのでありました。

「親分、如何か許して上げて下さい、あの人も惡い事があるんでせうけれど、あんなにまでなさらなくつても宜しうございます、如何か助けてやつて下さい」

「いいや、可けねえ、あの野郎には、あれでもまだ身に沁みたといふ處までは行かねえんだ、もう些と窮命ざしてやる、お前もよく眼を明いて見て置きねえ、何で下を向くんだ、よ、高さは僅三十三尋と些とばかり、下はたんとも深くねえが、やつぱり三十と三尋、甲州名代の猿橋の眞中にブラ下つて桂川見物をさせて貰ふなんぞは野郎も冥利だ、お前も可愛がつたり可愛がられたりした野郎だ、よく見て置きねえ、何も其んな處女見たやうに恥かしがつて下を向くことは無えぢやねえか」

鳥澤の粂の傍にゐる女、それは女輕業の頭領のお角でありました。

「親分さん、如何か助けて上げて下さいよう、死んでしまひます、惡い人は惡い人でも、あれでは餘り酷うございますから、早く解いてやつて下さいよう」

「いいや、可けねえ、お前も隨分、女子供を買つて來て危ねえ藝當をさせて錢を儲ける商賣に似合はねえ、あの位の仕置が見てゐられねえで如何する、野郎に輕業をさせて今日はお前と俺がお客になつて見物するんだ、此の棧敷は買ひ切りだから誰に遠慮も要らねえ、首尾よく野郎の藝當が勤まれば、二人の手から祝儀を呉れてやらあ」

「親分、どうしても解いて上げる事が出來なければ一層殺してしまつて下さい、あんな目に合はされてゐるより一思ひに殺されてしまつた方が宜いでせうから、わたしも見てゐられないから、早く殺してやつて下さい」

「殺しちまつちやあ、身も蓋も無えや、ああいふ野郎には色々の藝當をさせて見て、死にかかつたらまた水を吹掛けて生き返らして、またやらせるんだ、まあ、お角、一杯飲みな、俺があの野郎をあんな目に遭はせるから、俺は鬼か魔物見たやうにお前の目に見えるか知れねえが、隨分ああしてやつていい筋があるんだ、あの野郎の生立から國を出るまでの事を殘らず知つてるのが俺だ、俺にああされてあの野郎には文句が云へねえ筋があるんだ、俺にああされたから野郎は本望位えに心得てゐやがるだらう、これから悠くり其の話の筋を語つて聞かせてやるから、落着いて聞いて居ねえ、それを聞いてゐるうちには成程と思ふ事もあるだらう、俺が醉興であんな輕業をさせるんぢやねえと思ふ節も

あるだらう……おやおや、役人が大勢來やがつたな、あ、百の野郎を引き上げたな、うむ、土地の奴等あ俺を憚かつて手が着けられねえのを、木葉役人奴、出しやばりやがつたな、面白え、如何するか見てゐてやれ、百の野郎が何と吐かすか聞きものだ」

駒井能登守の一行は其の晩、猿橋驛の新井といふのへ泊りました。がんりきの百は一間へ引き据ゑて置いたが、息の絶えるほど弱つてゐるのだから、繩をかけるまでもあるまいと、與力同心は油斷をして其の儘で置きました。

「鳥澤の衆といふ者を呼んで兎も角も此の男と突き合せて見給へ」

能登守は命令の形式でなく、如何でも宜い事のやうに斯う云つて引込んでしまひました。

與力同心の連中は、丁度慈惠學校の生徒が解剖の屍體を當がはれたやうな心持で、がんりきの再調べに着手すると共に所謂鳥澤の衆なる者を引き出さうとしました。

處が衆は只今外出して行方が知れないといふ返事であつたから、更に其の行方を嚴しく詮索させる事にして、一方にはがんりきの百を三度目に引き出して調べて見ました。色々にして泥を吐かせて見ようとしたけれども、前と同じやうに百は一向口を開きません。あんな目に遭はされて、相手の罪を訴へない事が第一不思議であります。

「なあに、俺が惡かつたんでございますから、殺されたつて仕方が無えんでございますから」

と云つたきり。

「貴樣は、大層足の早い奴だな」

「へえ、歩くのは達者でございます」

「貴樣は片腕が無い、それは如何したのだ」

「これは怪我をしたから、お醫者さんに切つて貰つたんでございます」

「貴樣は髮結渡世だと云つたが、その片腕で髮結が出來るのか」

「へえ、兩腕の揃つてゐた時分に叩き込んでありましたから、まだそれが片一方の方へいくらか殘つてゐるのでございます、けれども碌な仕事は出來ませんから此の頃は職人任せでございます」

「貴樣は身延へ參詣に行くのだと申したが其の通りか」

「左樣でございます。お祖師樣を信心致しますから、それで身延山へ參りてえと思つて出かけて參りましたんで」

「身延の道者ならば講中とか連とかいふものが有りさうなもの、一人で出て歩くといふは怪からん」

「それが何でございます、俺共は何の因果か人並より足が早いんでございますから、講中の衆やなんかと一緒に歩いてゐた日には間緩るくて堪りません、それでございますから何處へ行くにも一人でトツト出て行くんでございます」

「貴樣が手形を持つて居らんといふのが如何しても怪しい、處、名前をもう一度其處で申して見ろ」

「先にも申上げた通り、手形を持つてゐたんでございますが、あの橋の眞中へ吊される時に下へ落こつてしまつたんでございます、桂川の水の中へ落してしまつたんでございます、處、名前は山下の銀床の銀といつて……」

「よし、では鳥澤の叅を呼び出してからまた吟味をする。下がれ」

一通りの調べを受けて、がんりきの百は次の間へ下げられて燈火もない眞暗な處へ拋り込まれてしまひました。

「何だ詰らねえ、猿橋を裏から見物させて貰ふなんぞは、有難い位なものだが、斯う身體が弱つてしまつたんぢや如何にもやり切れねえ、今までのお調べは通り一遍だが、これから洗ひ立てられりやドの道、銀流しが剝げるに定まつてる、いつものがんりきなら此處らで逃げ出すんだが、身體の節々が痛んで歩けねえ」と獨り言を云つてがんりきはゴロリと横になりました。

夜中になるとがんりきの耳の傍で囁やく聲がしたから、がんりきはうとうとしてゐた眼を覺ますと、

「百、確りしろ」

「兄貴か」

「野郎、また遣り損なつたな、いいから俺と一緒に逃げろ」

「兄貴、動けねえ」

「意氣地のねえ野郎だ、さあ俺の肩につかまれ」

「俺を荷物にしちや、兄貴、お前も動きがつくめえ、打捨つといて呉れ」

「手前を打捨つて置きやあ、俺の首も危ねえんだ、早くしろ」

「それぢや折角だから、お言葉に甘へて御厄介になるべえ」

「人に世話を燒かせずに自分から動き出す氣にならなくちや可けねえ」

斯うしてがんりきを助けに來た奴と、助け出されて行くがんりきは窓から逃げて行きました。窓を上手に切つて、身體の自由になるやうにして細引で縄梯子がかけてあつたのを、上手に脱け出したから、旅に疲れた與力同心の面々も更に氣が附きませんでした。

「兄貴、よく來てくれた」

「ほんたうに世話の燒けた野郎とつちやあ」

「どうも濟まねえ」

「ははあ、今度といふ今度は幾らか身に沁みたと見えて弱い音を吐き出したな」

「如何にも斯うにも身體が痛んでやり切りねえ、そりやさうと、兄貴、俺が此處へ捕まつてる事が如何してわかつたんだい」

「初狩まで行つた處が、通りかかる馬方の口から變な事を聞いたもんだから、それで若しやと引返して見たんだ」

「さうか、兄貴の前だが、猿橋を裏から見せられたのは今度が初めてよ」

「鳥澤の糸の野郎がさうしたんだといふぢやねえか、野郎、あんまり巫山戯た事をすると思つたから、わざわざ引返して來て見ると糸の野郎も居なけりやあ、手前の姿も橋のまはりには見えねえから聞いて見ると、これこれのわけで、役人につかまつて吟味最中といふことだから、暫らく三島明神の裏に隠れて夜の更けるのを待つてそれから忍んで行つて見たんだ」

「お蔭様で命拾ひをしたやうなもんだが、何分こんなに身體が弱つてゐた日にや所詮遠道は利かねえ、あの役人といふのが、勤番支配なんだから、一度は斯うして助けて貰つても、彼奴等に睨まれた上は、どうも此の道中は危ねえな」

「成程、この容子ぢやあ、何處かで二三日保養をしなくちやあトテも物にはならねえやうだ、と云つて、勤番支配を向ふに廻したんぢやあ、滅多な家へ駈込むわけにも行かず、さうだ、いい事がある。これから糸の野郎の處へ押しかけて行かう、あの野郎、この界隈の親分面をして納まつてゐるのが癪だ、これから二人で押しかけて行つて、手前を預けて來る事にしようぢやねえか」

「糸の親分の處へ出直しに行くんだな、兄貴が一緒に行つて呉れたら向ふもマンザラな挨拶はすめえから、それぢや、さういふ事にして貰ひませう、それから兄貴、お前が俺を出し抜いて甲府へ立たせたあの御新造と娘は、ありあ今何處にゐる」

「ははは、まだ其んな事を云つてるのか、ありや今晩下初狩へ泊つてゐるから明日は笹子峠へかかるんだ、あの峠が危ねえと思つたから、俺が附いて行くつもりであつたが、手前がこんな容子ぢやあ二三日は安心が出來る、二三日安心してゐる間には甲府の城下へ一足お先に着いてゐるから、甲府まで送り込んでしまへば、俺の肩が休まるんだ、百、お氣の毒だけれど、たうとう物にならねえらしいぜ」

「ふふん、まださう見縊つたものでも無え」

四

與力同心の面々は其の翌朝になつて仰天しました。

逃げられてしまつた。多寡を括つてゐた爲に逃げられてしまつた。逃げられたのよりも逃げたのが不思議であると思ひました。あんな死にかけた身體で、どうして逃げ出したか。

旅の一興で練習問題として扱はれた代物ではあるけれども、逃げられたのは不面目である。役人の名折れにもなるから默つてゐるわけには行かないとあつて、與力同心の面々は駒井能登守に此の事を申出でて恐縮すると

「この度の甲州入りは、何もあの者共を追ひ廻す爲に來たのではない、歩いてゐる間に打突かつて來たら、捉まへて見るがよし、逃げて行つたら逃がして置くがよし」

そこで、今までの引かかりは一切斷ち切つてしまつて、翌朝駒井能登守の一行は猿橋驛を立ち出で

て、またも悠々として甲州道中をつづけました。

猿橋から殿上、横尾、駒橋を通つて大月へ出た時分に

「この大きな一枚岩のやうな山、これが武田の武將小山田備中守が居城岩殿山、要害としても面白いが景色としても面白い、備中守信茂は確かこの城で二度の勇氣を現はしてゐるやうだ、一度は村上義清の手から逆襲された時、五十餘人でこれを守つて守り通して其の間に信玄の援兵が來た、二度は武田の末路の時、織田の兵をここで引受けて備中守が斬死した、武田家にはさすがに勇士がある、天險がある、この天險あり勇士あつて遂に亡びたのは天運是非もなし」

「いかにも、武田家の武略には東照權現も心から敬服して居られた、德川家の世になつて甲州の仕法は一切信玄の爲し置かれたままを襲用して差しつかへ無しといふ事であつたが、ただ一つ甲州の軍勢が用ひた毒矢だけは使用相成らずと東照權現のお聲がかりであつた。信玄は毒矢を平氣で用ひて居られたが東照公はそれをお嫌ひなされた。そこに兩將の器量の相違がある」

「信玄公は、智略に於て第一、惜しい事に人情に乏しい、民を治める事は上手であつたに拘はらず其の德が二代に及ばず、其の術が甲斐信濃以上に出づる事が出來なかつた、越後の上杉謙信は其れに比べると勇氣第一、それとても北國を切り從へたのみで上洛の望みは遂げず、次に織田右大臣、よく大業を爲し得たけれど、其の身は非業の死、豐臣太閤に至つて前代未聞の盛事、それもはや浪花の夢と消えて、世は德川に至りて流れも長く治まる、强剛必らず死して仁義王たりといふ本文を目のあたりに見るやうぢや」

例によつて官用だか名所見物だかわからないやうな調子で歩いて行きました。

駒井能登守のつれて來た與力同心は、大抵若い連中でありました。中に老巧者もゐない事はないが、話の中心になるのは若い連中であつたから、ややもすれば批評が出たり、議論が出たりします。

「何といつても信玄と謙信の食ひ合ひが戰國時代では一番力の入つた相撲だ、すべて相撲は段違ひでは面白くないし、さうかといつて同じ型の相撲が力づくで揉み合ふのも面白くない、そこへ行くと謙信の勇に信玄の智、義を重んずる謙信と、老獪な信玄と型が違つて互角なのが虚々實々と火花を散らして戰ふ處は古今の觀物だ、まああんな相撲は恐らく日本の戰爭に二つとはあるまいな、戰國の時代では正にあれが兩大關だ」

「それは左樣に違ひない、川中島の掛引は軍記で讀んでも人を唸らせる、實際に見て置いたら、ドノ位學問になつたか知れぬ、我々は不幸にして其時代に遭はなかつた事を憾む位のものだが、併しなほ遺憾な事は、あの兩大關を空しく甲斐と越後の片隅に取組ましてしまつて、本場所へ出して後から出た横綱と噛み合はせて見なかつた事が殘念だな」

「それは誰でも左樣思ふ、信玄と謙信が、もう少し長生をしてゐたらトテも信長公が天下を取るわけに行かぬ、信長公が世に出なければ太閤といふものも世に出るわけには行かぬ、太閤が出なければ日本の歴史がまた如何な風になつてゐたか見當がつかぬ、それを考へると信玄、謙信といふ人達の日

本の歴史上の潜勢力も亦大きなものと云はねばならぬ」

「併し、實際の力は如何であつたらう、信玄や謙信が果して信長や太閤や東照公と戰つて、それを倒し得たであらうか、それ等の人達も、小競合はしたけれども、本場所で晴の勝負をしたことはないから、ほんたうの處は何れが勝り何れが劣ると判斷は附けられまい」

「そりや判りきつた問題だ、謙信に對する信長は、いつも勝身がなかつた、謙信は信長を呑みきつてゐた、信長は斷えず威壓されて怖れてゐた、謙信が、いで北國人の手並を見せて呉れんと、將に兵を率ゐて京都へ來らんとする時、信長は蒼くなつて慄へ上つた、丁度その京都へ出ようとする途端に謙信が病氣で死んだ時は、信長はホツと息を吐いて手に持つてゐた箸を抛り出したといふではないか」

「それは左樣であつたかも知れぬ、それを事實とすれば信長といふものが餘りに弱い、少くとも木下藤吉郎を家來に持つてゐた信長、味方の全軍が覆滅しても驚かず、桶狹間で泰然としてゐた信長、たとへ一目なり二目なり置いてゐた謙信とはいへ、さう無殘な敗れを取るやうな事も無かつたらうと思ふ」

「如何して、今川義元や齋藤道三、或ひは淺井朝倉あたりとは相手が違ふ、謙信があの勢でもつて北國から雪崩の如く一瀉千里で下つて來て見給へ、木下藤吉郎なんぞも、まだ芽生のうちに押しつぶされて安土の城が粉のやうになつて飛ぶ、謙信をもう少し生かして置いて、あの勝負だけはやらせて見たかつた」

「處で、さうなると、武田信玄が默つて見てはゐない、信玄と謙信とは、今いふ通り型が違つて力は互角であつたけれども、氣位の上では信玄は謙信を白い眼で見てゐたやうな處があるわい、謙信を都へ上せて織田と嚙み合はせた其のあとで、ねちりねちりと道草を食つて腹を太らせながら乘込んで行くといふ滑太い藝當をやるのが此の入道だ、不幸にして其の時は、あんまり坊主の當り年で無かつたと見え、武田入道が亡くなる、間もなく上杉入道も亡くなつた」

「謙信が死んで悅んだのは織田公だが、信玄が亡くなつて運が開けたのは家康公だ、謙信あるうちは信長公の志は遂げられなかつたやうに、信玄存する間、家康公も實際手も足も出せなかつた御容子だ」

「併し、信長公も家康公も、信玄、謙信とは兎も角も手合せをして居られるけれど、太閤だけは、ついぞ張り合つて見た事がないやうでござるが、あの太閤の軍ぶりと、信玄、謙信あたりと掛け合はせて見たら如何なものであつたらう、信玄、謙信に向つては織田公も家康公も二目も三目も置いた樣な軍ぶりをして居られたが、太閤ならばどんなもので有つたらうか知ら」

「それは手合せが無かつただけに面白い見立にはなる、後に太閤の世になつてから、太閤が此の闘東へ來て、信玄、謙信も早く死んで仕合せな坊さんだ、今生きてゐたならばおれの馬の先に立つて、下座觸をするやうな事になるのだと云つて笑つたさうだが、太閤の眼から見ると、そんなものであつたかも知れない」

「いや、太閤といふ人は、派手師で人氣を取るのが上手、何時もそんな事を云つては人をオドカスのだが、信玄とても、其れほど易くはない、現に太閤なども家康公の弓矢には閉口して居られた、その家康公を苦しめたほどの信玄だから、太閤のやうな派手師に取つては、謙信よりも信玄の方が苦手だらう」

こんな話をして小山田備中の城、岩殿山の前をめぐりながら進んで行く。

「この城によつて反いたものがあるから勝頼が天目山にちぢまつて最期を遂げる事になつてしまつたといふ事ぢや、小山田備中は果して忠臣であり、勇士であつたらうか知らん、兎にも角にも要害は要害ぢや」

大月を過ぎて初狩、立川原、白野から阿彌陀街道を練つて行く。

「山國とはいひながら何方を見ても山ばかり、よく斯う山があつたものぢや、岩殿山が要害なばかりではない、甲州全體が一つの要害ぢや、小佛なり、笹子なりに兵を置けば、如何なる大軍も攻め入る手段が無からう、一夫之を守れば萬卒も越え難しといふのは當にこれぢや、東の方はこれで、南はまた富士川口があるばかり、西と北とは山又山、信玄も豪かつたには相違ないが、この要害で守るに易く攻めるに難い、地の理が宜しい、凡そ四海に事を爲す能はざる時に、この山國に立籠つて天下の勢を引受けて見るも一興ではないか」

「左樣な要害なればこそ、この國が天領であつて、柳澤甲斐守以外には封を受けたものが一人も無い、萬一江戸城に事起つた時は、この城が如何なるお役に立つやも計り難し、さうなると我々の勤めも亦重い」

阿彌陀街道を過ぎると黑野田の宿、ここは笹子峠の東の麓で本陣があります。日脚はまだ高いけれど、明日は笹子峠の難所を越えるのだから、今夜は此處へ泊ることになりました。

この黑野田へ泊つたものは駒井能登守の一行ばかりではありませんでした。本陣へは先觸があつて能登守の一行が占領してしまつたけれど、林屋慶藏といふのと、殿村茂助といふ二軒の宿屋にも少からぬ客が泊つてゐました。

笹子峠を下つて來た客も此の黑野田で宿を取る、笹子峠へ上らうとする旅人も此處で泊つて翌日立たうとするのだから、自然に足を留める、それに今日は勤番支配の一行が入り込んだから此の小さな山間の小驛が人を以て溢れるといふ景氣になつてしまひました。

駒井能登守の一行が本陣へ着いてしまつてから、少しばかり經つて此の宿へ入り込んで來た二挺の駕籠がありました。駕籠の中は何者だか知れないが、その傍に附いてゐるのが例の米友であることによつて大抵は想像されませう。幸にして米友は託された人の乘物に追ひつく事が出來たらしい。

五

二つの駕籠が宿の休所へ駕籠を下して本陣へ掛合ひにやると

「今晩は御支配様のお泊りでございますから」

と云つて、餘儀なく謝絶られてしまひました。林屋といふのと殿村といふのと、そのいづれも滿員です。滿員でないまでも其の空間といふのは到底この乘物の客を滿足させる事が出來ないものばかりでしたから、さて此處へ來て途方に暮れ

「弱つたな」

米友が弱音を吹きました。

「兄さん」

駕籠の中から垂を上げて米友を呼びかけたのはお絹でありました。

「何だ」

「その本陣に泊つてゐる御支配様といふのは、何といふお方だか聞いて見て下さい」

「おい、茶店のをぢさん、本陣に泊つてゐる御支配といふのは何といふお方だか知つてゐるかい」

「へえ、それはこの度、甲府の勤番御支配で御入國になりまする駒井能登守様と申しまするお方でございます」

「御新造さん、お聞きなさる通り駒井能登守といふお方ださうでございますよ」

「駒井能登守、その方ならば、わたしが少し知つてゐる」

とお絹が云ひました。

「兄さん、お前御苦勞だが其の駒井の殿様へ掛け合ひに行つて呉れないか」

「俺らが掛け合に行つた處で……」

米友はさすがに躊躇します。米友もさういふ掛け合ひに適任でないことを自覺してゐるのです。槍を取つてこそ宇治山田の米友だけれども、大名旗本を相手に掛け合ひをする柄でないことを知つてゐるから、其れで尻込みをしたがると

「もと四ツ谷の傳馬町にゐた神尾主膳からの使でございますと云つてごらん、さうして主人の勤め先の甲府へ參る途中でございますが女ばかりで泊る處に困つて居りますからと、事情を話して賴んでごらん、いいかえ、いつものやうにボンボン云つてしまつては可けませんよ、丁寧に云つて賴まなけりや可けませんよ、と云つてもお前さんの事だから何を云ひ出すかわからない、それではわたしが手紙を書きませう、手紙を書いて駒井様宛にお賴み申して見ませう、お前さんは其の手紙だけ持つて行つてお返事を伺がつて來れば宜い事にしませう」

と云つてお絹は駕籠から出て、休み茶屋で手紙を書いて封をしました。

駒井能登守は黒野田の本陣へ着いて休息してゐると
「申上げます、只今四ッ谷傳馬町の神尾主膳様のお使と申しまして、この手紙を持參致しました」
「ナニ、神尾の手紙」
能登守は、少々意外に思つて取次の手から其の手紙を受取つて見ると女文字でありました。
「甲府詰の主人神尾方へ參る途中の者、女連にて宿に困る……はあ、成程」
能登守は早速その手紙を捲き納めながら
「主人を呼ぶやうに」
本陣の主人が急いで出向いて來て、遠くの方から頭を下げました。
「お召しでございましたか」
「當家には我々の他にも客があるであらうな」
と能登守が尋ねました。
「如何致しまして、御支配様の御着きと承はり、他のお客は皆んなお斷り申上げて、近所の宿屋へ頼みましてございます、御支配様のお連の外には決して誰様もお泊め申しは致しません」
「それは困る、我々が通るのに其んな事をして貰つては人も迷惑する、自分も迷惑する、泊りたい者には部屋の空いてゐる限り泊めてやらなくてはならぬ」
「恐れ入りまする」

「今、斯様な手紙を持たせて寄越した者がある、女連で宿が無くて困却すると書いてある、急いで泊めるやうにして貰ひたい」
「恐れ入りました、お言葉に甘えましてその様に取計らひを致します」
主人は畏まつて出て行きました。
間もなく本陣の主人が迎へに行つて、さうしてお絹の一行を案内して來ました。米友も亦お絹一行について案内されて來ました。お絹の一行といつても、それは米友の外にはお松があるばかりでした。お絹は例の通り町家の奥様のやうな容貌をしてゐました。お松は御守殿風をしてゐました。
この二人が駕籠から出た時にはさすがに泊つてゐる人の目を驚かせました。與力同心の面々なども、この思ひがけない合宿の客の奥へ通るのを目を澄まして、色々に噂の種が蒔かれました。あれは能登守殿の親戚の者だらうと云ふ者もありました。いや御支配の夫人……にしては少し老けてゐる——といふものもありました。江戸から連れて來たのでは人目もうるさいし人の口もあるから、わざと道中を別にして此の邊で落ち合ふ手筈で來たのだらうと考へるものもありました。そんな筈はないといふものもありました。能登守はさういふ性質の人ではないと辯護するものもありました。
甲州道中で、山を見たり雲助を見たりしてゐた眼で、二人の女を見たから、目を驚かせる事が餘計に大きかつたと見えて、暫らくは其の噂で持ち切りでした。さうして結局は其の何者であるかを突き留めなければならない義務があるやうに力瘤を入れたものもありました。けれども此の水々しい年増

と美しい娘とが奥へ通つたあとで、一同は吹き出さなければならない事に出つ會してしまひました。

其は二人につづいて米友がのこのこと入つて來たからであります。笠を取るまでは其んなに眼につかなかつたけれど、笠を取つて見ると米友の剃り立ての頭が異彩を放つてゐる事がよくわかるのであります。剃り立てといへば、青々としてツルツルしたやうに考へられるけれど、米友のはよく切れない剃刀で削つたのだから、なかなかテラテラ光るといふわけには行かないのです。處々に削り殘された鉋屑が殘つてゐるのであります。けれども當人は、已むを得ないやうな面をして二人につづいて上り込んで來たから、誰も其れを見て吹き出さないわけには行きませんでした。

「兄さん、お前の頭を見て皆さんが笑つてゐますよ」

お絹は、振り返つて米友の頭を見て、自分も可笑しくなつて口を袖で隠しました。

「でも家ん中で笠を被る譯には行かねえ」といつて米友が不平な面をしましたから、お松は其れがまた可笑しくつて笑ひました。

能登守の一行は「成程、此奴だな」と思ひました。昨日鶴川での出來事を知つてゐるだけに餘計に可笑しくなります。

「生え揃ふまで頭巾でも被つて居たらいいでせう」

「鶴川の雲助の野郎が、こんなにしやがつた、ほんとに憎らしい野郎共だ」

米友は、口の中でブツブツ云つて自分の頭をこんなにした雲助共を呪ひます。

米友は、お絹とお松とがゐる次の部屋へ陣取り、お絹お松の部屋と中庭を隔てた處が即ち駒井能登守の部屋であります。

お絹は取り敢へず御都合を伺つた上で能登守の處へお禮を申上げに行つて來ました。

能登守は快くお絹と對談して女連の道中を慰めたりなどしました。駒井の許を辭して歸つてから、お絹の胸には駒井能登守を對象としての一つの心持が浮びました。

甲府へ行けば此の人は自分の元の主人の神尾主膳の上へ立つ人だと思ひました。同じ旗本でありながら、一方は支配する人、一方は支配される人とお絹は思ひました。

さうして自分よりも年が若いし、神尾より亦若い駒井能登守の幅が利くのかと思ふと憎らしくなりました。何とかしてやりたいといふ氣になりました。

お絹の思ふには結局男は脆いものであるといふ事でした。まだ三十前後の能登守、たとへ相當の學問や才氣があつた處で知れたものである。固いといふことは、女に接する機會が無い間に限つた事で、相當の手練を以てすれば、男は必ず色に落ちて來るものである。固いやうなものほど落ち初めたら速度が強いといふことが、お絹の日頃から持つてゐる信念でありました。だから駒井能登守が、今甲州道中を飛ぶ鳥を落す勢で練つて行く時に、これを如何にかしてやりたいといふ事は結局、お絹が持つてゐる唯一の信念から出立するといふ事に歸着しますのでせう。大へんやかましい事です。

駒井能登守に會つてお禮を云つてから、そんな心持を起してお絹は自分の部屋へ歸つて來て

「お松や」
「はい」
お松は靜肅に返事をしました。
「お前は後程お茶を立てて駒井の殿様に差上げておいでなさい、それから、まだお風呂がお濟みにならぬ御容子だから、お前は殿様のお伴を申上げてお風呂のお世話を申上げねばなりませぬ、こんな山家の事で、氣の利いた女中は居ないし、ああして殿方が女氣なしの旅をしておいでなさるのは、何かにつけて御不自由でいらつしやるし、斯うして今夜も私達が安心して宿へ着く事の出來たのは、皆んなあの殿様のお蔭、それにあのお方は甲府の勤番支配といつて内の殿様よりはズツト上席のお方、神尾の殿様はあれだけのお方だけれど、この駒井の殿様はこれからお大名になるか御老中になるか、出世の知れないお方」
お絹は、斯う云つてお松を說きました。お松は一々それを聞いてゐましたけれど、本意でない事が幾らもあります。自分の甲府へ行かうといふのは、神尾の殿様だとか、駒井の御支配様だとかいふお方のお氣に入られようと思つて來た筈ではないけれど、兎も角も此の場合一通りの御用と御挨拶はつとめねばなるまいと思ひました。好意を持つて呉れた目上の人に對する禮儀といふ心から、さうせねばならないものかと思ひました。

六

駒井能登守は斯うしてゐても、毎日宿へ着くと、書類を調べたり手紙を認めたりすることで殆ど暇がありません。
書類の多くは公用のもの、手紙は公用と私用とが相半する位でありました。それ等を一通り處理してしまつたあとで、能登守が興味を以て書く手紙が一つありました。
「今日は笹子峠の麓なる黑野田といふ處に泊り申候、明日笹子峠へ掛る都合に御座候、これより峠を越えて峠向ふの駒飼といふ處まで二里八丁の道に候、小佛峠と共に此の街道中での難所に候、笹子を越え候はば程なく勝沼にて、それより甲府迄は一足に候、さすがに峽と申すだけの事はありて中々難澁な山道に候へ共一同皆々元氣にて、名所古蹟などを訪らひつつ物見遊散のやうな心持ちにて旅をつづけ居り候、また人事にも面白き事多く、土地の名物や風俗などにも少しく變つた事有之候、言葉もまた江戸より入候へば甲州特有の言葉ありて面白く覺え候、昨日はまた甲州名代の猿橋といふのを通り申候、これは名所繪などにて御身も御承知の事と存じ候へ共、猿が雙方より手を延ばしたるやうの形にて土地の人は橋より水際まで三十三尋、水際より水底まで三十三尋も有之候やうに申し居り候處、その間に一本の柱も無く組立候事が奇妙に御座候、甲州は評判の如く人氣荒き處あり、途中も心

して見聞致し居り候

さて御身の御病氣は如何に候や、われ等斯くの如き愉快なる旅をつづけ居り候うちにも常に心にかかり候はこの事のみに候、追々寒さにも向ひ候べく、一しほお厭ひなさるべく候、昨日受取り申候たよりに依れば少しく快方との事、やや安心は致し候へども、甲府入を致したしとは以ての外に候、少少快方に向ひたればとて心に弛みを生じてはならず候、再三申し候通り此の道は男子も憚かる險道、それを女の身にて、殊に病中の身にて旅立んなどとは想ひも及ばぬ事に候、左樣の心を起さず當分は御靜養專一に可被成候、冬を越して來春身體と共に陽氣の回復する頃を待ちて御入國成され候へ

今日も女連の二人の者同じく江戸より出でて甲府へ赴く由にて此の宿へ着き申候、御身が甲府入りを致したしとの書狀と思ひ合せてをかしく存じ候、右の婦人達も斷えず駕籠乘物に搖られ、人氣の險しさに膽を冷し隨分難澁のやうに見受けられ笑止に存候」

駒井能登守には奥方があるのでした。それは此の手紙によつても察することが出來るやうに可なり重い病氣、可なり永い患ひにかかつて江戸に殘されて居るのです。その奥方に宛てて能登守が毎日のやうに手紙を書いては送り、奥方からも亦此の道中の都度々々に音信のある事がわかります。能登守も若いから奥方も若いに違ひない。能登守も綺麗な人だから奥方も美しい人に相違ない。若くて美しい二人は結婚して、そんなに長い間でない事もわかつてゐます。新婚の若い男と女、たとへお役目柄の嚴めしい能登守にも情愛が無ければならぬ筈であります。況してや奥方にはそれに一層の深い情愛

が無ければならぬ筈であります。重い病氣と、永い患ひとが二人の中を隔てました。その隔ては斯うして毎日のやうに書いてゐるお互の消息によつて美しく結ばれてゐるといふことが想像されるのであります。

駒井能登守が手紙を書き終つた處へ、お絹から言ひつけられた通りにお松がお茶を捧げて入つて來ました。

「御免遊ばしませ」

「これはこれは」

と能登守は云ひました。

能登守は風呂に入る前に、書類や手紙の用を濟ましてしまふのが例であります。お松がお茶を捧げて來たのは丁度よい折でありました。

能登守は、お茶を捧げて來たお松の容子を見ると、どうも此の宿あたりにゐる女中とは思はれないから、

「和女は、この家の娘御か」

と云つて尋ねて見ました。

「先程は伯母が上りましてお目通りを致しました」

「あ、左樣であつたか」

宿を周旋してやつた爲にお禮に來た先程の女、この娘は其の連か、さうして先程の女が氣を利かして此の娘にお茶を持たして寄越したのだらうと思ひ當りました。

「何ぞ、御用がござりましたなら、仰せつけ下さるやうにとの伯母の申付でござりまする」と云つてお松は能登守の前に指を突きました。

「それは御親切有難いが、別に用事と云つて……」

能登守は丁度眼を落したのが、今書いてゐた手紙であります。折角の事に

「大儀ながら此の手紙を、明朝の飛脚で江戸へ屆けて貰ふやうに此の宿の主人へ手渡し下されたい」と云つて其の手紙を拾つてお松に渡しました。

「畏まりました」

「あの先刻の婦人は、そなたの伯母でありましたか」

「はい」

「宜しく申して下されよ」

お松は斯うしてお茶を捧げて來て、手紙を持つて能登守の許を下る時に、まことに好い殿樣だと思ひました。怖いお役人樣のお頭であらうと思うて來たのに、打つて變つて優しく思ひやりがありさうで、左樣かと云つてニヤけた御人體は少しもなく、氣品の勝れてゐる事を何となく奥床しく感じてしまひました。

お絹はお松が能登守から頼まれたといふ手紙を自分が受取つて、お松に向つては

「今、殿樣がお風呂にお出で遊ばしたやうだから、お前は行つてお世話を申上げて下さい、失禮のないやうに」と言ひつけました。

お松は、其の言ひつけをも溫和しく聞いて風呂場の方へ行きました。そのあとでお絹は能登守の手紙を手に取つてつくづくと眺めてゐました。表には「江戸麹町二番町、駒井能登守内へ」と立派な手蹟で認めてあります。

それを見ると、お絹はまたむらむらと變な心が起りました。この手紙は能登守から其の可愛い奥方に送る手紙だと感づいて見るとお絹の心が穩やかでありません。能登守の奥方にはまだお目にかかつた事はないけれど、能登守があの通り若くて綺麗な人だから奥方も亦若くて美しい人に相違ないとは、誰でも想像されることであります。さういふ事には殊に敏感な此の女は、あんまり人を馬鹿にしてゐると斯う思ひました。お安くない夫婦の間の音信を此妾達に見せつける能登守の仕打を憎いと思ひました。能登守のやうな若い殿樣に可愛がられる奥方は、どんな人か面が見てやりたいやうに思ひました。自分たちにさういふ心を起させようが爲に、お松に頼まないでも宜い手紙をワザと持たして寄越して、これ見よがしに見せびらかすのではないか。

これは能登守に取つては非常に迷惑な邪推であります。

「よしよし、さういふわけならば此の手紙の中を見てやりませう、どんな憎らしい事が書いてある

か見てやりませう、ほんとに癪に觸るから見てやりませう」

お絹もそれほど惡い女ではないけれど、情事にかけると、いつも好奇心がいたづらをします。そのいたづらが暗い中で、うごめき出すのを抑へきれないといふ惡い癖がありました。

それでも女の事で、荒らかに封を切るといふ事はなく楊枝の先で克明に封じ目をほどいて、手紙の中の文言を讀んで見ると、それがいよいよ忌な感じを起さしてしまひました。

この手紙の中は夫婦間の美しい消息を以て滿たされてゐる。遠く旅に行く夫の心と、病んで家に殘る妻の心との床しい思ひやりが溢れてゐます。その美しい消息と床しい思ひやりとが、お絹の心持を散々に惡くしてしまひました。

人の手紙といふものは見るべきものでも、見せるべきものでもないのに、それを盜んで見るといふことは此の上もない卑劣な事で、お絹も其處まで墮落した女ではなかつたのだけれど、好奇から出立して我を失ふやうになるのは淺ましいことであります。

その手紙を讀んでしまつたあとでお絹は遂に其の筆蹟をうつすといふ處まで進んで來ました。駒井能登守の筆蹟を透きうつしにして取つてしまひました。これは如何いふつもりか知らん。さすがに其れからあとを破りもしなければ裂きもしないで、もとのやうに丁寧に封をします。

好奇の隣りにはいつでも罪惡が住んでゐる、物を弄ばうと思へば必ず己れが弄ばれる。お絹は惡い計畫をする女ではないに拘らず、男を見ると斯ういふいたづら心が起つて、兵馬を口說いて見たり、

龍之助の時の留女に出て見たり、がんりきを調戯つたりしてゐたのが、ここへ來ると駒井能登守をまた相手にする氣になつてしまひました。

能登守の手紙を見てしまつた事が何か能登守の弱點を押へたやうに思はれて、その取つて置いた筆蹟から、或は能登守を困らせてやるやうな、いたづらが出來まいものでもあるまいと思つてゐました。

「友さん、友さん」

お絹は次の間に控へてゐる米友を呼びましたけれども返事がありませんから

「如何したんだらう、疲れて寢込んでしまつたのかしら」

と、獨言を云つてゐる時に、與力同心の部屋に宛てられた處で哄と人の笑ふ聲がしました。それと共に

「笑つちや可けねえ」

といふ聲は米友の聲であります。

「もうお役人衆の傍へ行つて話し込んでゐると見える、罪のない人だけれど、また間違ひを起さなければ好いが」

大勢を相手に頻りに話し込んでゐる米友を呼び出すも氣の毒だと思つて、お絹は自分で其の手紙を主人の處へ持つて行かうとして廊下へ出ました。

お絹が廊下へ出て見るとあの部屋の障子には幾多の侍の頭と米友の頭がうつつて見えます。障子に

映つてさへ米友の頭は可笑しい頭でありました。よくあの頭で人中へ出られるものだ、せめて頭巾でも被つて出るか、さうでなければ、可なり頭の毛が生え揃ふまで人中へ出ないやうにしてゐたら宜からうにと思ひました。處が米友は一向平氣で

「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺らなんぞは木下流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも云へば淡路流とも云ふんだ、三日稽古をして其の祕傳をすつかり呑込んでしまつたんだ」

何を云つてるのかと思へば、槍の自慢でありました。與力同心の連中へ、坊主頭を振り立て、槍の自慢をしてゐることが歴々とわかります。

與力同心の連中は一人の米友を眞中へ取りまいて、いづれも面白半分な面をして其の話を聞いてゐる處であります。

面白半分な面をして聞いてゐるのはまだ眞面目な方で、米友が此の部屋へ入つて來る早々から笑ひ顚けて、今だにゲラゲラ笑つてゐるものもあります。もう腹の皮を痛くしてしまつて、此の上笑へないで苦しがつてゐるやうなのもあります。

これは米友が好んで此處へ押しかけて來たのではありません。彼等は早くも此の宿へ米友が來たといふ事を知つて、相當の禮を以て招いたから米友は此處へ來たのでありました。

與力同心は米友の頭を見て笑つてやらうといふやうな心で米友を招いたのではなく、此の不思議な人物の持つてゐる不思議な能力を解決して見たいからでありました。

併し乍ら招かれて來た米友の頭を見た時は哄と笑つてしまひました。人を招いて置きながら其の人の入つて來るのを見て聲を合せて笑ひ出すといふ事は禮儀ではありませんけれども、つい笑つてしまひました。併し笑はれても米友は必ずしも腹を立てません。

「笑つちや可けねえ」

と云つて座に着いてから、やがて話が槍の事まで及んで來て

「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺らなんぞは木下流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも云へば淡路流とも云うんだ、三日稽古をして此の祕傳をすつかり呑込んでしまつたんだ」

と云ふ氣焰を上げてゐます。

七

お絹が手紙を持ち扱ひ、米友が與力同心の中で氣焰を吐いてゐる間に、お松は風呂場で駒井能登守の世話をして居りました。

お松は次の間に控へて能登守の風呂から上るのを待つてゐます。

その間に兵馬の事を考へてゐます。今甲府の牢内に囚はれてゐるといふ兵馬を助けんが爲には、神尾主膳に頼ることが最良の道であることに七兵衛もお絹も一致してゐるが、お松には神尾の殿様といふ人が、それほど頼みになる人とは思はれません。ここにおいでなさる駒井能登守といふ殿様は、神尾の殿様よりも一層頼みになりさうな殿様であると斯う思はないわけには行きません。

甲府勤番支配は、或意味に於て甲州の國主大名と同じことだと云つてお絹から聞かされました。神尾の殿様に比べて強大な權力を持つてゐる人だといふ事もお絹から聞かされました。その上に、ちよつとお目にかかつただけでも大層お優しい方だとお松は頼もしく思ひました。神尾の殿様とは、以前の知行高は同じ位であつたさうだけれども、其の人品は大へんな相違があると思ひました。

それですから、若し神尾の殿様に願つて通らなかつた時は、この殿様に願へば必ず叶へて下さるだらうと思はれてなりませんでした。或は神尾の殿様に願はない前に、この殿様にお願ひした方が、事が、すんなりと運ぶだらうとお松は其處まで考へて來ました。それで此の殿様に、この意味で取入つて置くことが幸であると氣が着きました。お絹がお松をして能登守に取り入らせようといふ心とお松自身で能登守を頼らうとする心とは全く別なのであります。

さう考へて來ると、お松は此の時が好い機會であると思はないわけにも行きませんでした。同じ甲府へ行く旅にしても身分も違へば目的も違ふ、この後、こんなに親しくお目にかかれる機會があるか如何かわからぬとお松は其處へ氣が着いたから、如何しても今宵を過ごさず能登守に向つて、兵馬の身の上のお願ひをして見る外はないと心が少し焦つやうになりました。

こんな事を考へてゐる時に、能登守は風呂から上つた容子でありましたから、お松は立つて行きました。さうしてお松は能登守の着物を着替へる世話をしてやりました。能登守はお松の親切を喜んで、打ち解けて見えます。

お松は言ひ出さう言ひ出さうとしましたけれども、つい言ひ出し悪くなつて、お願ひがございます、と咽喉まで出て其れが言へないで自分ながら氣が焦つのみであります。

お松が能登守の爲に雪燈を捧げて長い廊下を渡つて行く時に、笹子峠の上へ鎌のやうな月がかかつてゐるのが見えました。

能登守は靜かに廊下を歩きながら其の月をふり仰いで見ました。

「和女は、江戸から此んな所へ來て淋しいとは思はないか」

と能登守はお松を顧みて、斯う云つて呉れました。その言葉があつた爲めに、さつきから一生懸命で、言ひ出さう言ひ出さうとしてゐたお松は一時に力を得て

「否え、淋しいとは思ひませぬ、少しも」と言葉にも力を入れて返事をしました。

「それは豪い」

と云つて、能登守は賞めたけれど、お松の言葉よりは鎌のやうな月の方に見恍れてゐるのでありました。

「殿様」
お松は此處で精一杯に殿様といつて能登守を呼びかけましたけれど、自分ながら其の言葉の顫へてゐる事に驚いた位でありました。
「何」
能登守は、お松の改まつた容子を少しく氣に留めた容子です。
「あのお願ひでございまする」
とお松はいよいよ改まつた言葉でありました。
「願ひとは」
能登守は鎌のやうな月を見てゐた眼を、お松の方へ向けました。さうして雪燈の光に照されたお松の面に一生懸命の色が映つてゐることを認めて、これには仔細が有るだらうと感じました。
「あの、わたくし共が甲府へ參りまするのは寃の罪で牢屋につながれてゐる人を助けに參るのでございます」
「人を助けに」
「それ故、殿様のお力添へをお願ひ致したいのでございまする」
お松は夢中になつて此處まで云つてしまひました。此處まで云つてしまへば兎も角も安心と、ホッと息を吐きますと

「果して寃の罪であるものならば、わしの力を借りるまでもなく罪は赦される、若し、まことに罪があるものならば、わしが力添へをしたとて如何にもなるものではない」
と能登守はお松の願ひの筋には深く觸れないで、やや慰さめ面に斯う云つただけでした。併し、お松はもう一旦切り出して勇氣がついたから、その頼みの綱を外すやうな事はしません。
「否え、確に寃の罪なのでございまする、その方は決して盗みなどをなさる方ではないのでございまする、公儀様の御金藏を破るなどといふ大外れた事をなさるお方でないことは、わたしが命にかけてもお請合を致しまする、それが有らぬお疑ひの爲に只今御牢内に繋がれておいで遊ばす故、わたくしは心配で心配でなりませぬ、何卒して其のお方をお助け申上げたいと、それでわたくし共は甲府へ參りますのでございまする、甲府へ參りまして、神尾主膳様からそのお願ひを致すつもりでございますが……」
お松は一息にこれだけを云つてしまひました。能登守は、お松の願ふほど熱心に其れを聞いたのか聞かないのか知らないけれど、笹子峠の上にかかつた鎌のやうな月にばかり見恍れてゐるのであります。
そのうちに廊下を渡り了つて能登守の居間の近くまで來ました。

八

お松が歸つて來た時分に、お絹の居なかつた事は別に怪しい事ではありません。

お絹は風呂から出ると浴衣を引つかけたままで暫らく溪流に臨んで湯上りの肌を山嶽の空氣に打たせてゐました。

前にいふ通り、すぐ眼の上なる笹子峠には鎌のやうな月がかかつてゐる。四方の山は桶を立てたやうで、桂川へ落ちる笹川の溪流が淙々として椽の下を流れてゐます。

自分に言ひ寄つて來る男を物の數とも思はないやうな氣位が、年と共に薄らいで行くことが自分ながらよくよくわかります。それ故にがんりきとお角とが仲よく歩く處を見ると嫉けて仕方がありませんでした。

有體に云へば、今のお絹は男が欲しくて欲しくて堪まらないのであります。男でさへあれば、どんな男でも相手にするといふほどに荒んで來る事が此の頃でも斷えず起つて來るやうです。

「あの、がんりきの百藏といふ男、御苦勞樣にわたし達を附け覗つて此の甲州へ追つ蒐けて來たが、あの猿橋で土地の親分とやらに捉まつて酷い目にあつたさうな、ほんとにお氣の毒な話」

と、お絹はがんりきの事と、それが猿橋へ吊されたといふ話を思ひ出して、ほほ笑み

「七兵衛が助けると云つて出かけたが、ほんとに助かつたか知ら、醉興とは云ひながら可哀想のやうな心持がする、何のつもりか知らないけれど、わたしを追つ蒐けて來たと思へば、あんな男でも滿更憎くはない、命がけで、わたしの後を追つ蒐けて來る心持が可愛いい」

今となつては、たとへ無賴漢であらうとも何であらうとも自分に調戯つて呉れる男のないことが淋しい位です。

こんな事を何時まで考へてゐても際限がないと、お絹は浴衣の襟をつくろつて其處を立たうとした時に、椽の下の笹藪がガサと動いて幽靈のやうなものが谷川の中から、煙のやうに舞ひ出した。あれと驚く間もなくお絹の首筋をすーつと一卷捲いてしまひました。

「何を……何をなさるの……」

その幽靈のやうなものは、お絹の首筋をすーッと捲いて、その面を自分の胸のあたりへ嚴しく締めつけたものだから、それでお絹は言葉を出すことが出來なくなつてしまひました。

「御新造、がんりきだ、百だよ」

と云つて有無を云はさず、椽の下へ引下してしまひました。

河童に浚はれるといふのは丁度斯んなのだらうと思はれます。お絹は一言も物を云ふ隙さへ無く欄の上から川の岸の笹藪の中へ、何者とも知れないものに抱込まれてしまひました。何者とも知れないのではない、その者はお絹の首を抱いて其の面をしつかりと胸に當て、口の利けない樣にして置いて

から

「おれは、がんりきだ、百藏だ」

と名乘つた筈です。

本陣の方では、こんな事を氣の付いたものが一人もありませんでした。

能登守は事務に精勵であつたし、米友は與力同心を相手に氣焰を吐いてゐるし、その他の連中とてもそれぞれの仕事をしてゐたり世間話をしてゐたりしてゐたものだから、一向此の方面の事は閑却されてゐました。ただ一人お松だけが、お絹の湯上りがあんまり悠長なのを氣にして、二度までも湯殿へ來て見ましたけれど其處にも姿を見ることが出來ませんでしたから、漸く氣が揉め出して米友を呼んで見ようと思ひましたけれども、その米友は、相變らず與力同心を相手に槍の氣焰を吐いて夢中になつてゐるやうですから、氣の毒のやうな心持がして、それで、また三度まで廊下の方へ行つて見ました。

お松が廊下を通つた時に、廊下の椽の闇の中から

「お松」・

「はい」

自分を呼んだのは、たしかに七兵衛の聲です。

「お師匠さんはゐるか」

「今、お風呂に」

「風呂ではあるまい、風呂にはゐない筈だ」

「ええ、今ちよつと何處へか」

「それ見ろ」

七兵衛から、それ見ろと云はれてお松はギョッとしました。

「友さんを呼びませう、御支配のお役人樣もおいでなさいますからお頼み申しませうか」

斯ういつて、あわてると七兵衛はそれを押へて

「米友にも役人にも知らせない方がいい、ナニ百の野郎は痛み所で身動きも碌に出來ねえのだから、大した事になりはしめえ、俺がこれから一人で行つて捉まへて來る、お前は此のまま座敷へ歸つて靜かにしてゐるがいい、米友にも矢張り默つてゐた方がいいよ、彼奴が下手に騷ぎ出すとまた事壞しだ」

七兵衛は、これだけの事を言ひ殘して、闇の中へ消えて行きました。鎌のやうな月が相變らず笹子峠の七曲りのあたりにかかつてゐる時に、黑野田の笹川の谷間から道のない處を無理に分け登つて行くものがあります。

肩に引つかけられた女は少しも抵抗する模樣もなく、背中へグッタリと垂れた面へ折々木の繁みを洩れた月の光が觸ると蠟のやうに蒼白く、死んだものとしか見えません。

それを背中へ載せて路のない處を登つて行くがんきりの百藏。これも亦面の色が眞蒼で、ほとんど

生ける色はありません。木の根に助けられたり、岩の角に支へられたりして上るには上るが、その息の切り方が今にも絶え入りさうで、やつと一丁も登つたかと思ふ時分に力にした草の根が拔けると一堪りもなく轉々と下へ落ちました。

「ああ、苦しい」

二三間も下へ落ちて岩の出た處で支へられた時に、がんりきは、もう苦しくて苦しくて堪らなく見えましたけれど、その肩へ引つかけてゐたお絹の手首は決して放すことではありません。

はッ、はッと吐く息は唐箕の風のやうであります。何しても、がんりきは腕が一本しか無いのです。その一本しか無い腕で、お絹を肩に擔いで、足と身體で調子を取つて上らうとする心だけが逸つて、岩に足を踏み掛けると足がツルリと辷りました。

「あつ、苦しい」

またも二間ばかり下へ辷り落ちたがんりきは、お絹と共に折り重なつて、暫らくは起き上れません。

「あつ、苦しくて堪らねえ」

やつと起き直つて見ると、向ふ脛からダラダラと血が流れてゐました。

「畜生、こんなに向ふ脛を摺り剝いてしまつた」

そのままにしてお絹を引つかけて、また上りはじめてまた辷りました。

「此奴は可けねえ、いくら力を入れて辷つても上れねえ、はッ、はッ」

やつと一間も登ると、ズルズルと七尺も辷つては落ちる。

「こんな事をしてゐたんぢや初まらねえ、帶は無えか、帶は」

ここに至つてがんりきは、とても手首を掴まへて肩にかけて上ることの覺束ないのを悟つたから、帶を求めて背中へ括りつけて登りにかからうと氣がついて、はじめて手首を放して大事さうにお絹の身體を岩蔭に置きました。

「死んでゐるんぢや無え、殺したと思ふと違ふんだよ、もう少し辛抱すりや活して上げますぜ、御新造、はッ、はッ」

例の錄のやうな月が、微ながら其の光を差して、眞白なお絹の面と肌とが活きて動くやうに見え出した時、がんりきは何處かで大木の唸るやうな音を聞きました。

猫が鼠を捕つた時は、暫らくそれをおもちやにしてゐるやうに、自分で其處へ拋り出したお絹の面を見ると、がんりきは物狂はしい心持で

「斯うしちやあ居られねえんだ」

再びお絹を背負ひ上げて登りはじめようとしたが、この時はがんりきの身體もほとんど疲勞困憊の極に達して自分一人でさへ自分の身が持ち切れなくなつてしまひました。この女を荷つてこの崖路を登ることは愚か、立つて見つめてゐるうちに、眼がクラクラとして足がフラフラとして、どうにも持ち切れなくなつたから、がんりきはお絹の傍へ打倒れるやうにして、烈しい吐息をはつはつとつきな

がら、峠の上を仰いで

「矢立の杉が唸つてゐやがる、矢立の杉が唸ると山に碌な事は無えんだ、せめてあの杉の處まで行きたかつたんだが、この分ぢやあ最う一足も歩けねえ、といつて此れから下へも降りられねえ、自分ながら自分の身體が仕末に行けねえんだから自烈てえな、旨くせしめるにはせしめたけれど、これだけぢやあ何にもならねえや、俺の腕は此んなもんだといふ事を七の兄貴にも見せてやりてえし、条の親分にも見せてやりてえんだ、それからまた勤番の御支配とやらが泊つてゐる本陣から盗み出したといへば隨分幅が利かねえものでもねえ、これから此の女を連れて一足先に駒飼まで行つて、其處で、どんなものだと皆んなの面を見てやりやあ、後は如何なつたつて蟲が居らあ、峠を越してしまはねえうちは此方のもんで此方のもので無えやうなものだから、何とかして漕ぎつけてえんだが、身體が利かねえから仕方がねえ、ああ、ほんとに弱つた、死んでしめえさうだわい」

がんりきは遂に其處へへたばつて動けなくなりました。がんりきが動けなくなつた時分に、お絹が少しく動き出して來ました。お絹が少し動き出した時分に、下の方で喧ましい人の聲。上の方でも亦人の聲。

昏倒しかけたがんりきは、お絹の動いたことにはまだ氣が着かなかつたけれど、上下で起るその人の聲は早くも耳に入ると、必死の力でむつくり起き直つて見ると提灯の光が、いくつもいくつも黒野田の方から、谷川と崖路を傳うて此方を差して來るのがわかります。

上の方、矢立の杉のあたりからも亦火影がチラチラ。して見ると自分はもう取り捲かれてゐるのだ。がんりきは遽に立ち上つてよろめきながら

「トテも逃げられなけりやあ、ここで心中だ、生きて峠が越えられねえのだから、死んで三途の川を渡るのも、乙な因縁だらうぢやねえか、道行の相手に、まあ此の位の女なら俺の身上では大した不足もあるめえ、猿橋の裏を中ぶらりんで見せられたり、笹子峠から一足飛びに地獄の道行なんぞは、あんまり洒落過ぎて感心もしねえのだが、どうも斯うなつちや仕方がねえ」

がんりきがお絹の傍へ寄つた時

「何、何をするの」

お絹は生きてゐました。自分の咽喉へ掛けようとしたがんりきの手を、夢中で振り拂ふと

「おや」

がんりきも驚いたが、其の途端にフラフラと又しても岩を辷ると、あわてて其の片手にお絹の着物の裾を摑む。裾を摑んだけれども辷る勢ひが強くてお絹諸共に釣瓶落しに谷底へ落つこちます。

九

その翌朝、駒井能登守の一行は例によつて此の本陣を出立しました。お絹、お松、米友の一行はそ

れに從つて行く容子がありません。

昨夜、七兵衛はお松にことわつて誰にも云ふなと云つたに拘はらず、お松は其れを默つてゐるわけには行かないから、與力同心を相手に氣焰を揚げてゐた米友を呼んで話しました。それから騷ぎが大きくなつて、居合すもの總出の勢で山狩をして峠の方へ狩り立てて行くうちに、尋ねるお絹が半死半生の體で谷間から這ひ出して來ました。

兎も角も、お絹が逃げて來たことによつて一同も安心して宿へ引き取つたが、お絹は一切の事を語りません。それ故に誰も其の事情を知るものが無く、或は山の天狗に浚はれたのではないかと思つてゐます。

無事で逃げて歸ることの出來たお絹は、實は能登守の一行について行きたかつたのだけれども、身體が弱つてゐるから、心ならずも此處に留まる事になりました。

斯くて駒井能登守の一行が黑野田を出ると、幾ケ所の橋を渡り、追分を通つて、いよいよ笹子峠へ掛りました。

「これが笹子峠の矢立の杉」

中の茶屋を通つて矢立の杉の下で一行が立ち止まつて其の杉を見上げる。

「ははあ、矢立の杉といふのは此れか」

と云つて、杉の廻りを廻り歩いてゐる連中が手を合せて其の杉の大きさを抱へて見ました。

「丁度七抱へ半ある」

「昔の歌に、武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと、とあるのは此の杉だ」

「ナニ、何と云はれる、其の歌をもう一度」

と云つて寫生帖を持つてゐたのが念を押しました。

「武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと」

「成程」

寫生帖へ其の歌を書き込んで

「讀人は」

「讀人知らず」

「年代は何時頃」

「それも知らぬ」

「ははは、よく歌だけを記憶して居られた、感心な事」

と云つて寫生帖が感心をすると、古歌の通が笑つて

「此處の石に刻んであるから其れで知つたのだ」

「ははあ、石碑の受賣か、その石碑も亦相當に古色があつて面白い、年代は何時頃だらうかしら」

「よく年代を知りたがる人ぢや」

「ええ、明暦とある、肝腎の年號の數字の處が缺けてゐて見えない、明暦も元年から初まつて三年まである、嚴有院様の時代であつて、左様、今から考へるとさつと二百年の星霜を經てゐる」

「して見ると其の歌も其の時代に詠まれたものであらう」

「いや、もつと調子が古いわい、江戸時代の産物ではない、一體この笹子山は一名坂東山といつて古來關東で名ある山、日本武尊以來の歴史がある」

「成程、して見ると其の歌は日本武尊がお詠みなされたお歌ではないか」

「違ふ、日本武尊時代には此んな和歌は流行らなかつた」

杉の根本で勝手な考證を試みてゐます。

「古來、この道を軍勢が通る時は必ず此の杉に矢を射立てて、山の神に手向けをして通るならはしになつてゐた」

「我々も其の古例を追うて、弓矢の手向をして行かうではないか」

「我々のは、甲州を治めに行くので、征伐に行くのとは違ふ、それ故、弓矢の手向けをするにも及ぶまい」

「天文十六年の事、原美濃守が此處の關所を千貫に積つて知行してゐる、若し武田勝頼が天目山で討死をせずに東へ下つたものとすれば、この峠が第一の要害になつたのであらうけれど、その事無くして止んだから、この峠に軍勢を上せた事は、先づ近代には無いやうである、小田原北條の一族、左衛門太夫氏勝が八千餘騎で此處に陣取つて足輕を駒飼まで進めたこと、これが近ごろの記錄であるやうぢや」

「よく、お調べでござるな」

「それから昨夜、土地の人に就いて聞けば山に何か異變が起る時は此の杉が唸るといふ事ぢや」

「杉が唸るといふのも、をかしな事であるけれど、風でも吹けば此れほどの大木故、凝として默つてゐまい」

「それから時々、此の杉の頂邊へ天狗が來て巣を食ひ、折々下界から人を浚つて來て此の杉の枝に突つ掛けて置くといふ事ぢや」

「ははあ、天狗が留るか、成程、木も此の位大きくなれば、いかさま天狗が住めさうぢや、それといへば、昨夜のあの婦人、あれが若しや其の天狗に浚はれたのではないか」

「成程、よい處へこじつけたものだ、或は其の天狗がまだ一人二人の婦人を浚つて此の杉の枝へ掛けて置くやも知れぬ、よく調べて見るがよい」

「併し……またあの婦人の擧動もあれは考へものだな」

杉の考證と傳說は轉じて、昨夜のお絹の擧動及び其の行方の事になりました。

お絹が一切を語らなかつたから、これ等の人々も何と判斷のつけやうがなく、結局此の矢立の杉あたりに棲む天狗の仕業といふ里人の迷信を打ち消しもせずに出て來たものでありました。けれども、

ここで考へ直して見れば如何しても解せぬ事であります。

「さて此の道中は、色々な珍らしい事に出會す、顧みて數べると、まづ駒木野の關所であの女、次に小佛峠で足の早い奴、それから鶴川では槍をよく使ふ小兵の男、それから猿橋へ來て橋へ吊されたものが前の足の早い奴で、また片手のない奴、それを捉まへて見ると其の夜のうちに消えて亡くなる」

「其れ等と考へ合せると、昨夜の婦人の擧動、それから前の色々の珍事に一々絲が引いてあるやうにも思はれる、若しあの片手のない奴が、昨夜の婦人を浚つて逃げたのではないかとも思はれる、さうだとすれば婦人が一人で歸つたのがヲカしいけれど、あの片手の無い奴は此のあたりの山に隱れてゐるかも知れぬ」

猿橋の問屋で逃げられたがんりきの事、若しや此の道中の何れかにと、雜談に耽りながら左右に眼を配りつつ進んで行つたが笹子峠の七曲りといふのへ來た時分に

「あれあれ、あの谷川で水を飲んでゐる者があるぞ」

駒井能登守が谷底を望んで斯う云ひましたから一同は皆んな谷底をのぞいて見ました。

駒井能登守が、水を飲んでゐたものを見かけたのは、峠が下りになつてから五六丁の處で、其處は俗に坊主澤といつて橋の棧道がいくつもかかつてゐて下には清流が滾々と流れてゐる處です。

能登守が、其處で水を飲んでゐる何者かを見かけて聲をかけた時は、その者は鼬のやうに山の中へ駈込んでしまひました。その駈込んだ處を誰もチラと見たものですから、それと云つてバラバラと追

ひかけます。

それからの一行は、寫生帳も史蹟の話もなくて、其の怪しい者を捕へるべく前後左右から遠網にかけるやうにして、峠を下りついた處が駒飼の宿であります。

駒井能登守の一行が此の怪しの者を駒飼の宿に近い處まで追ひ卸した時分に、それとは逆に甲州街道を鶴瀬から本陣の土屋清左衞門の許を立つてお關所を越えて駒飼の方へ行く一行がありました。これも槍を立て數人の供を引きつれて東に下るものと見えました。それは供揃ひはさほどでなかつたけれど乘物を三つも並べた處が物々しい。その三つの乘物のうちの一つには人がゐたけれど、あとの二つは空でありました。その一つに乘つてゐる人といふのは神尾主膳でありました。して見れば、明いてゐる二つの乘物の用向も大抵わかる。主膳は遊散がてらにお絹お松の一行を迎へに來たものと見て宜しい。實は笹子峠の此方まで迎へるつもりであつたのを、如何しても此の峠を越し大庭まで行かなければならなくなつた事情が出來たものでありませう。

「殿樣」

「何だ」

「彼れが天目山の道でござりまするな」

「左樣」

「必ず天目山へ上つて見ると仰せでございましたが、如何してまた急に御模樣替なのでござります

る」
「昨夜、急用が出來た故、山上りなどをしては居れぬ」
「急用と申しますのは」
「黒野田の宿で何か變事が出來たといふ事ぢや」
「へえ、あのお絹樣と、それからお松どのとが何か難儀にお遭ひなされましたか」
「左樣」
「それは大變でござりまする、して其の難儀と申しまするのは」
「委しい事は分らぬ、盜賊か胡麻の蠅に過ぎまいと思ふ」
「それは誠に心がかりでござりまする」
「兎に角、黒野田へ行つて見ての上でないと拙者にも分らぬ、それから瀧田、この道中、事による
と駒井能登守といふ旗本と出逢ふかも知れぬ、それは此の度甲府へお役になつた拙者の知合だ、多分
我々が峠へ登る時分に、駒井は下りて來るだらうから、やがて行き逢つた時は乘物を下りて名乘り合
ふのは面倒だから、知らぬ面をして通れ」
「畏まりました」
「成るべくならば神尾主膳と名乘りたくない、尋ねたらば諏訪の家中で江戸へ下るとでも申して置
いたが宜しからう」

「畏まりました」
斯うして神尾主膳の一行が關所を出て橋を渡つて、休所の、すしや重兵衛の前を通つて駒飼へと進
んで行きます。
その時は、まだ早朝の事でありました。神尾主膳の一行が駒飼の宿から出て、いよいよ笹子峠の上
りにかからうとする時分に不意に傍へなる林の中から人が飛び出して主膳の駕籠わきに轉がつてしま
ひました。
「何者だ」
といつて家來の連中が立ち塞がると
「如何かお助けなすつてお呉んなさいまし、何方樣かは存じませぬが、九死一生の場合でございま
す、お見かけ申してお願ひ申すんでございます、如何かお助けなすつて下さいまし」
駕籠の傍へ手をついたのは、成程、九死一生と見えて髪は亂れ、白い着物は裂け、身體ぢゆう突き
傷だの擦傷だので慘憺たるもので、その上に右の片腕が一本無い男であります。
「次第によつては助けてやるまいものでもないが、其の方は何者だ、如何して斯樣なことになつた」
「身延山へ參詣する者でございます、途中で惡い奴に遭つて此んな目に逢はされてしまひました、
お話し申せば長いことでございます、ここではお話しが申上げられません、あれ今追手がかかります、
追手といふのはお役人でございます、お役人が間違へて、私を惡者だと思つて捉まへに來るんでござ

います、今お役人につかまつては、私も言ひ解くことが出來ませんから、どうか暫らくお隱まひなすつて下さいまし、そのうちにキツと私の罪のない事がわかるんでございます、同じ事ならあのお役人に捉まりたく無いんでございます」

「はて、其方を追ひかける役人といふのは」

「今、向ふからやつて參ります、今度、江戸表からお越しになつた駒井能登守樣といふお役人の御人數でございます、あのお方に捉まると私は是が非でも惡者にされてしまひますから如何かお助けなすつてお呉んなさいまし、もう此の通り身體が弱つてゐますから一足も動けませんでございます」

「成程、其の方を追ひかけて來たのは駒井能登守の人數であると申すな」

「左樣でございます、あれもう、ああやつて追ひかけて參ります」

「殿樣、お聞きの通りの次第、如何取計らつたものでございませう」

「よし、助けてやれ」

「では能登守樣から故障がありました節は如何取計らひませう」

「拙者が引受けるから宜しい」

神尾主膳は一諾してしまひました。怪しい奴は弱りきつてゐたに拘らず、この一諾を聞いて躍り上るほどに喜んで

「有難うございまする、この御恩は死んでも忘れは致しませぬ」

神尾の駕籠を片手で拜みます。神尾はそれを見て

「何處の何者か知らんが、危急と見受ける故、兎も角も一應助けて取らせる、瀧田、幸ひ駕籠が二つ空いてゐる、それへ此の者を乘せてやれ」

「畏まりました、これ、殿樣がお助け下された上に、この乘物をお貸し下さる、有難く心得て此の中へ入れ」

「何から何まで有難うございます、それでは御遠慮なしに、お言葉に甘えまして、どうか御免下さいまし」

お絹を乘せて伴れて歸るべき乘物へ怪しい奴を乘せてやりました。怪しい奴は即ちがんりきの百藏であります。

さうして置いて神尾は

「若し能登守の手の者が、何とか尋ねても知らぬ存ぜぬと云つてしまへ、六づかしくなれば拙者が應對に出る、其方達は取り合はずに乘物を進めろ」

果して幾ばくもなく、神尾主膳の一行の前にバラバラと駈けて來たのは駒井能登守の手の與力同心と手先の者共でありました。

「卒爾ながら、そのお乘物暫らくお待ち下されたい」

「何の御用でござる」

「只今、一人の怪しき者を追ひ込んで參りし處、この邊にて姿を見失ひ申した、若しやお見かけはござらぬか」

「頓とお見受け申さぬ」

「はて」

と云つて能登守の手の者は、挨拶に出た主膳の家來共を怪訝な眼でながめ

「只今、この處で慥に其の者の姿を見かけたものがござるが」

「我々の方に於ては左樣な者を一向に見かけ申さぬ」

「年の頃は卅前後、色が白く小作り、もとは江戸の髮結職であつた者、それに誰が眼にも著しいのは右の片腕が無い事」

「ははあ」

「怪しい廉が多い故、一應取押へて置きたい」

「それは御苦勞千萬、して各々方は」

「我々は、この度甲府勤番支配を承はつた駒井能登守の手の者、甲府へ赴任の道すがらでござるが」

「然らば、これより峠を登り行くうち、萬一左樣なものに出逢ひ申さぬとも限らぬ、その折は取押へてお引渡しを致すでござらう、これにて御免」

これには拘はずに、乘物を進めようとするから、能登守の手の同心と手先はあわてて其の前に立ち

塞がるやうにして

「あいや、お暇は取らせぬ、暫時、お待ち下されたい、して御貴殿方は誰方でござるか、お名乘を承はりたい」

斯う云つて能登守の手の者が、神尾の駕籠先を押へるやうにしました。ここに至つてドチラにも多少の意地づくが見えました。

「各々方にお名乘申す由はない、絶つて承はりたくば能登守殿直々にお出であるが宜しい」

と神尾の者が斯う云ひました。

この時に、駒井能登守と渡邊といふ與力が峠を下りて近い處までやつて來ました。

それと聞いて渡邊は神尾の駕籠近く寄つて來て

「お乘物の中へ物申す、拙者は甲府勤番支配の與力渡邊三次郎、失禮ながらお名乘を承はりたい」

この時に神尾主膳が駕籠の垂を上げて外を見ると、折柄來かかつた駒井能登守と面を合はせたが、さあらぬ體で

「拙者事は、同じく甲府勤番の組頭神尾主膳でござる、今日は私用にて此の處を通行致す故、公用向の禮儀は後日に讓る、お尋ねの怪しい者とやら一向に我等は存知致さぬ、前路にちと急の用事あるにより、これにて御免」

斯う云つたままで、垂を下させてさつさと駕籠を進ませました。だから能登守の左右の者が其の無

禮を憤つて眼と眼を見合はせると、能登守は何氣なき風情で取り合ひません。

十

斯うして神尾主膳の一行は笹子峠を向ふへ越えて黒野田の本陣へ着きました。

黒野田の本陣へ、神尾の一行が着いた分には仔細がないけれど、その一つの駕籠の中に隠して來た、がんりきを此の宿へ連れ込むとすれば無事ではない筈だが、一行が此の本陣の前へ着いた時に、がんりきの駕籠だけは此處へ留めないで

「鳥澤まで送つてやれ」

といふことになつたのは、思ふに又しても其の鳥澤の条といふ親分の處まで送り返されるものであらうと思はれる。

がんりきだけを鳥澤へ送りとどけて、神尾の一行が、此の本陣へ着いた時に、本陣では前の晩に能登守を泊めたのと同じ位の持てなしをせねばなりません。

さうして夫々、失禮のないやうにお迎へ申したけれど、ここに奇怪なのはお絹の素振りでありました。

此の時、お絹はもう昨夜の災難の事などはケロリと忘れてしまつてゐるやうでした。朝寝を少し永くした位の處で、主膳を迎ふべく薄化粧などをして、主膳が着くと、眞先に立つて、下へも置かぬ持てなしが何も知らぬ本陣の人々には別段をかしくも無かつたらうけれど、前後を知つてゐるお松には、あんまり空々しいやうに思はれてなりませんでした。

何故ならば、駒井能登守を持てなす時は、神尾の殿様などは有つても無くつてもいいやうな口振をして見せたのに、其の能登守が去つて神尾主膳が來て見ると、能登守なんぞは何處を通つたかといふやうにして、もう一も二も神尾でなければならないやうに、そはそはしてゐるからであります。よくも斯うまで手のうらを返すやうになれるものかと、お松がそれを餘りに空々しく淺ましく思つたのも無理はありません。それのみならず、神尾が此處へ着くと共に、早速に酒宴が初まつて、お絹が先立ちで其の周旋をするといふ體たらくになつてしまひ、お松が座を外して隠れるやうにしてゐると、神尾主膳は、お絹を相手にして盛んに飲みながら、お前も一人で貞女暮しは淋しい事だらうとか、殿様も甲府ではまた罪をお作りになつた事でございませうとか、お松か、あれも年頃になつたな、お前の仕込だから抜かりもあるまいとかいふやうな言葉を洩れ聞いたお松は、面から火が出るやうでありました。

ここに憐れむべき宇治山田の米友は已れの間に閉ぢ籠つたまま、沈痛な色を漲らせて腕を組んで物思ひに耽つてゐます。

米友は、此處までの道中で二度失敗つた事を其の良心に責められてゐます。

米友が失敗つた其の一度は、上野原の宿で一行に出し抜かれて、無理な鶴川渡りをしてやつと追ひついた事、その二度目は昨夜の騒動であります。

彼は、この道中が終るまでは、寸分の隙もなくお絹とお松とを守つて居らねばならぬ使命がある、彼自身も亦其の使命を粗末にしようとは思つてゐなかつたのに、昨夜といふ昨夜、與力同心に招かれて槍の話になつて有頂天に氣焔を吐いてしまひました。

その際にお絹が天狗に浚はれたのだから、幸にしてお絹は歸つて來たからいいやうなものの、若し歸らなければ、所詮自分の腹切勝負だと思ひました。トテも此處に斯うしてはゐられぬ、面目のない事だと思ひました。米友は、それ故に良心の呵責を受けてゐます。併し、米友の單純な心でも、如何もあれからのお絹の擧動が解せない。他の人が騒ぐほどに騒がないお絹の心持がわかりません。髮容や着物の散々になつて歸つて來た處を見れば、可なりヒドイ目に遭つて來たのだらうと思はれるにも拘はらず、そのヒドイ目に遭はした奴に仕返しをやらうといふ氣が更に見えない、仕返しをして見ようといふ氣が無いばかりではなく、其の爲に山狩をして惡い奴を捉まへようとするのを餘計なことのやうに見てゐます。

それよりも尙ほわからないのは昨夜あれほどに人騒がせをやつた當人であるに拘はらず、今日はもうケロリとしてしまつて、甲府から迎へに來たといふお武士を引張り上げて、あの通り御機嫌よく持

てなして、ゐるといふ事が正直な米友に取つては忌々しいことです。

あんな取り止まりのない人間に、槍を持つて番人に廻つてゐるのが馬鹿々々しいと考へてゐる時に、障子が不意に開きました。見ればやや酒氣を帶びたお絹が其處に立つて

「友さん」

「うむ」

「昨夕はどうもお騒がせをしました、あの甲府から神尾主膳樣がお迎へにお出で下すつて、お供の衆も澤山ついてゐますから、もうこれからは安心、今までお前さんにも色々お世話になりましたけれど、これからはもうお前さんの勝手に旅をして宜うございますよ」

「ええ」

「お前さんは、これから江戸の方へ歸りなさるとも、また甲府の方へ行つて見ようとも、もうわたし達に拘はないで、自分の氣儘にしてお出でなさい」

「うむ」

「これは少しだけれど、ほんの、わたし達の志、どうぞ納めて置いて下さい、それから若しお前さんが甲府へ行つても、今までの調子で心安立に殿樣のお邸なんぞへ無暗にやつて來られては困ることもあるから其處は遠慮をして置いてお呉れ、そのうち御緣があればまた何とかして上げないものでもありませんからね」

金一封を包んで其處に置いたまま、眼をパチパチさせて口を吃らせてゐる米友を見返りもしないで、お絹はさつさと此の場を立つて行きます。

お絹の置いて行つた金一封を前にして米友は暫らく呆然としてゐたが、やがて冷笑に變つてしまひました。

「馬鹿にしてやがら」

その一封を横の方から突いて見ました。突いて見たのは、何もその中にドノ位入つてゐるかといふのを試したわけではありません。あんまり馬鹿々々しいから、小突廻して見たのであります。米友はこれ等の連中の譜代の家來でもなければ臨時の雇人でもない。甲州へ行かうといふのは、必ずしも此の人の附添が目的なのではないのです。これは行きがけの駄賃のやうなもので、米友はお君に會ひたくて堪らないから其れで甲州へ行く氣になつたものであります。

この附添は頼んだものでなくて頼まれたものである。何時斷られた處で敢て痛痒を感ずるわけではないけれど、此處で斷るといふのは、あまり人を馬鹿にした仕打であると思ひました。それだから米友は

「勝手にしやがれ」

と云つて、また其の金一封を小突廻しました。金一封を小突廻した處で初まらないのであるが、この場合米友の癇癪のやり場としてはどうしても眼の前の金一封が的になります。

「馬鹿にしてやがら、こんな金なんぞ要らねえ」

米友は、一旦左の方から小突廻した金一封を今度は右の方から小突廻しました。その有樣は摑んで拋り出すのも汚らはしいと云つた手つきであります。

よしよし、これからは一本立で甲府へ行つて見せるとも、峠を越せば甲府まで一日で行けるといふ事だ、小遣だつて何もその位の事に困りはしない、こんな金なんぞ要るものか、突返しに行くのも、あの女の面を見るのが癪だから、と云つて置き放しにして行けば誰か取つてしまつた時に米友が持つて出たと思はれるのが業腹だと米友は、眼の前の金一封を睨めながら、腹を立てたり始末に困つたりしてゐましたが、結局庭へ拋り出してしまふのが一番宜しいと考へました。庭へ拋り出して撒き散らかして置けば、人の目に觸れて自分が持つて出なかつた證據が立つと思ひました。

米友は其の金一封を摑んで、ゲヂゲヂでも取つて捨てるやうな手つきで持ち出して、障子を明けてポンと庭の方へ、それもお絹の部屋の方へ近く、成るたけ人の眼に觸れるやうな處へと思つて投げ出しました。

米友に投げられた金一封は、庭の松の木の幹に當つてコツンと音がしましたけれど、可成り固く封がしてあつたと見えて、そのまま轉がつてしまつたから、到底、梅忠がやつたやうな花々しい光景にはなりません。

「ちえツ」

米友は舌打をして其の拋り出した金一封を尻目にかけながら、自分は手荷物と例の手槍と脚袢なんぞを掻き集めて旅の仕度に取りかかります。

旅の支度が出來上つて、いざ米友は椽へ出ましたけれど、今投げ出した金一封が封のままでゴロリと其處に轉がつてゐるのが眼ざはりで堪りません。

米友の氣性として、決して其の金一封に未練があるの何のといふのではないけれど、ああして置いて、誰にも見られないで他の人に拾はれてしまつては、結局やはり、自分が持つて逃げたやうに思はれてしまふのが心外であるから、松の根方に轉がつてゐる金一封を暫らくながめてゐましたが、そのうち

「左樣だ左樣だ、お暇乞の印に彼奴の座敷へ此れを拋り込んでやれ」

何か思案がついたと見えて、庭へ飛び下りて、その金一封を拾ひ取るや米友は覘ひを定めて、それをお絹の座敷へ障子越しに投げ込みました。

その時に、お絹の座敷にはお絹がゐませんでした。お松がひとりで机によりかかつて本陣で貸して呉れた本を讀んでゐました。

そこへ怖ろしい音がして、障子を突き破つて丁度自分の讀んでゐた繪本の上へ重い物が落ちて來たからお松は吃驚しました。もう少しで自分の眉間へ當る處であつた、誰が此んな悪戯をしたのであらうと、お松は急いで其の破れた障子を開けて見ました。

障子を開けて見ると、米友が今丸くなつて植込の中を向ふへ逃げて行く姿が見えましたから、お松は何の事だか譯がわからずに

「友さん、友さん、今ここへ石を投げたのはお前かえ」

と云つて廊下を追ひかけるやうにして見ましたけれど、米友は返事もしなければ、振り返りもしないで、例の足どりで逃げて行つてしまひます。お松はいよいよ事情がわからないけれど、米友はすつかり旅の裝ひをして逃げて行くから、兎も角もつかまへて、容子を聞いて見なければならないと思ひました。米友は氣が短くつて怒りつぽいし、それに時々感違ひをして怒り出す癖があるから、これも何か氣に入らない事があつて逃げ出すのだらうと思つたから、呼び留めて事情を聞いた上で、理解してやりさへすれば直に納まるものと、大急ぎで廊下を駈けて有り合せの草履を突つかけて米友を追ひかけました。

「友さん、どうしたのです、さう無暗に逃げてしまつては事情がわからないぢやありませんか、少し待つて下さい、事情を話して下さい、わたし達を置いてけ放りにして逃げてしまふのは酷いぢやありませんか、少し待つて下さいよ、ね、友さん」

お松が斯う云つて呼びかけた聲の聞えない筈はありませんのに、米友は後をも振り返らず、いよいよ一生懸命で逃げて行きました。

「友さん、事情がわかりさへすれば、お前の出て行くのを留めはしませんから、ちよつと待つて話

をして行つて下さい、ね、友さん、何が氣に入らないの、わたしは此んなに疲れてしまつた、これほどにしてお前を追ひかけて來たのにお前が聞かない振りをして行つてしまへば、若し甲府へ着いた時に君ちやんの在所がわかつても、お前には知らせて上げないよ」

お松は駈けながら息を切つて、斯う云ふと、この遠矢が幾分か米友に利いたと見えて米友は急に立ち止まり

「お松さん、お松さん、俺らは此れから一人で甲府へ行くんだ、俺らが如何いふわけで一人で甲府へ行くやうになつたのか、今投げてやつた包み物に聞いて見るがいいや、お前さんには何も恨みは無えんだ、甲府へ行つたらお目にかかりませうよ」

米友は後を振り返つて、お松に向つて大きな聲で返事をしました。

「そんな事を云はないで」

お松が押し返して云ふと

「今まではお前さん達と仲よくして來たけれど、これからは他人なんだ」

米友は頑として首を振ると共にクルリと脊を向けてしまひました。米友は遂に留まりませんでした。

お松は再び追ひかける餘力が無いので、米友の姿が山の中へ隱れてしまつた時分に本陣へ歸つて來ました。

お松は元の座敷へ歸つて來て、米友の言ひ殘して行つた言葉、今投げてやつた包に物を聞いてみるがいいと云つたことを思ひ出したから、机の上に置いてあつたあの紙包みを取つて見ると、それは若干かの金の包みであります。

聰明なお松は、早くもそれと合點をしました。お師匠樣のお絹が、この金を米友に與へて暇を出してしまつたものだらうと感づいた事であります。役に立つても立たなくても一緒に此處まで來たものをもう目的地まで一息といふ處で暇を出すのは、人情に叶つた仕打ではないとお松は恥しい思ひをしました。師匠樣のお絹といふ人は其の位の事を仕兼ねない人、成程、神尾の殿樣や其の家來衆が迎へに來て呉れて見れば米友に附添を頼む必要は無くなつてしまつたかも知れないけれど、此處でもう用は無いからと云つて金包を出されたら大抵の人は氣を悪くするに違ひないと思ひました。

況してや、あの氣の短い米友が怒り出してこの金包を叩きつけて逃げるといふ事に、お松は却て氣の毒に堪へないのであります。

そこへ、お絹が見えたから、お松は米友が投げて行つた金包を出して事情を話して見るとお絹は

「それほど粗末になるお金なら返して貰ひませう、わたしに遣はせれば幾らでも遣ひ道があるから」

と云つて、恬として其の金包を再び自分の手に納めた上に

「ほんとに、素直に出て行つて呉れて宜かつた、何かの力になるかと思つて頼んで見たら、力になる處か、却て世話ばかり燒かせてしまつて、この後、どんな間違ひを起すか知れたものではない、今のうちに出て行つて呉れたから助かつたやうなものさ」

お絹は斯う云つて、その金を懐中へ入れてまた神尾主膳の居間の方へと出て行きました。

それと同時に、お松は犇と我身に頼りなさの心が湧いて來るのを禁めることが出來ません。

十二　伯耆の安綱の巻

一

これより先き、龍王の鼻から宇津木兵馬に助けられたお君は兵馬戀しさの思ひで物に魅かれたやうに病み上りの身をさへ忘れて、兵馬の後を追うて行きました。

よし、その言ひ置いた通り白根の山ふところに入つたにしろ、其處でお君が兵馬に會へようとは思はれず、況んや、其の道は、險山峨々として鳥も通はぬ處がある。何の用意も計畫も無くて分け入らうとするお君は無分別であります。

ムク犬は悄々として跟いて行きました。其の様、恰も主人の、物狂はしい擧動を歎くかのやうであります。

丸山の難所にかかつた時分に日が暮れると共に、張りつめたお君の氣がドツと折れました。

「ムクや、もう疲れてしまつて歩けない」

杉の木の下へ倒れると、ムクも其の傍に足を折つて身を横たへました。

ムク犬が烈しく吠え出したのは其の曉方の事でありました。お君は其のムク犬の烈しい吠え聲にさへ破られないほどに昏睡狀態の夢を結んでゐたのであります。

ムクの吠える聲は、快く眠つてゐるお君の耳には入りませんでしたけれど、幸に其處を通り合せ

た馬商人の耳に入りました。

まだ若い丈夫さうな馬商人は小馬を三頭引つぱつて奈良田の方から此處へ來かかりましたが、此の曉方、この人足の絶えた處で、犬の連りに吠えるのが氣になります。

「おやおや、この娘さんが危ない、こりや病氣上りで無理な旅をしたものだ」

この若い馬商人は心得てお君の身體を揉み、懷中から藥などを出してお君に含ませ

「おい姉さん、確かりしなさいよ、眠ると可かんよ、眠らんで眼を大きく明て居らなくては可かんよ、わしは此れから有野村の馬大盡へ行くのだが……」

程なくお君は此の馬商人に助けられ馬に乘せられて有野村の馬大盡といふの迄連れて來られました。

馬大盡の家の前まで來て見るとお君は其の家屋敷の宏大なのに驚かないわけには行きません。

甲州一番の百姓は米村八右衞門といふので、それが四千五百石持といふことであります。和泉作といふのは東郡内で千石の田畑を持つてゐるといふ事であります。この馬大盡はもつと昔からの大盡でありました。

甲州の上古は馬の名産地であります。聖德太子の愛馬が出たといふ處から黑駒の名がある。その他鳳凰山駒ケ嶽あたりも馬の産地から起つた名であります。御勅使川の北の方には駒場村といふのがあります。この有野村は、元「馬相野」と云つたものださうです。お君が來て見た時、屋敷の近い處にある廣い原ツぱや、眼に觸れた處の厩を見てもちよつとには數へきれないほどの馬がゐました。成程

これは馬大盡に違ひないと思ひました。

それのみか、門を入つてから丸で森の中へ入つて行くやうに何千年何百年といふやうな立木であります。

「一品式部卿葛原親王樣の時分からの馬大盡だ」

と馬商人がお君に云つて聞かせただけのものはあります。

屋敷の中を流れる小流に架けた橋を渡つてしまつた時分に木の蔭から現はれた女の人が

「幸內、幸內」

と呼びました。若い馬商人は

「はい」

と云つて女の人を見て、あわてたやうでありました。

馬上のお君も亦其の聲を聞いて其の人を一眼見るとゾッとしてしまひました。妙齡の面といふ面は殘らず燒け爛れてゐるのに、白い眼がピンと上へ引釣つて口は裂いたやうに强く結ばせてゐるから世の常の醜女に見るやうな間の抜けた醜さではなくて、絶えず一種の怒氣を含んでゐる物凄い形相です。一層殘酷なのは此の妙齡の女の呪はれたのが、ただ其の顏面だけにとどまるといふ事です。着けてゐる衣裳は大名の姫君にも似るべきほどの結構なものでありました。罪の深い惡病のいたづらか、その髮の毛だけを天性のままに殘して置いて漆の垂れるやうに黑く、それを美事な高島田に結上げてあり

ました。姿、形、作り、氣品、その顏だけを除いて、若し後向きにしてこれをながめた時には、誰でも恍とりとしてながめるほどの美人です。

馬に乘つてゐたお君は其れを突然に前から見てしまひましたから、ゾッとして慄へ上がりました。

「幸內、お前、今、山から歸つたの」

その呪はれた妙齡の人は椿の花の一枝を手に持つてゐました。さうして若い馬商人を幸內、幸內と呼びかけては此方へ靜かに近寄つて來るのであります。

「これはお孃樣、お早うございまする」

幸內と呼ばれた若い馬商人は小腰を屈めました。

「幸內、それは何處のお方」

と云つて呪はれた女の人は、其の引釣れた眼を銀の針のやうに光らせて馬上のお君を見ました。その時に、お君は身の毛が立つて馬の上にも居堪らないやうな氣がしました。

無論、この時までもムク犬は默々として馬と人とに從つて跟いて來てゐたものですが、此處に至つてその鷹揚な頭を振上げて呪はれた妙齡の女の人の面を凝と見つめました。

「これは、丸山の下で難儀をしておいでなさる處を助けて上げたのでございます、まだ身體が弱つておいでなさるやうでございますから、女中部屋まで連れて行つて休ませて上げたいと思ひます」

「さう、早くさうしておやり、お藥が要るならわたしの處まで取りにおいで」

「はい、有難うございます」

お君は馬上で聞いて此のお孃樣と呼ばれる人が面付の怖ろしさに似もやらず、情深い人のやうに思はれたのでホッと一安心です。

「それから幸內や、その馬を厩へ廻してしまつたら、父樣の處へ行く前に、わたしの處へ、ちよつとお出で」

「はい」

「嘘を云つてはなりませんよ」

お孃樣は斯う云つて椿の花の枝を持つたままで彼方へ行つてしまひました。嘘を云つてはなりませんよ、の一言に針が含まれてゐるやうに、お君の耳には聞きなされます、併し乍ら、お君の胸は

「お可哀想に……」

といふ同情が無暗に湧いて來て、その呪はれたお孃樣の爲に、殆ど泣きたくなつてしまひました。

二

お君は若い馬商人の幸內に引合はされて、女中の取締りをしてゐるお婆さんに會ひました。このお婆さんは幸內から委細の物語を聞いた上で

「まづい物を食べて皆んなの女中と同じやうに働いてもらひさへすれば、何時までゐても悪いとは申しません」

差しあたり、斯う云はれた事はお君に取つて仕合せでありました。女中は皆んなで十五人ほどゐました。その女中のうちにも自から甲乙があつて、本人の柄によつて奥向きのと下働きのと二つに分れて居ます。

「わたしは骨の折れるやうな力業は出來ませんけれど、どうかお臺所の方へ廻していただきたうございます」

とお君は却て下働きを志願しました。

お君が好んで下働きを志願したのはムクが居るからであります。若し奥向を働くやうになつて、ムクと離れる機會が多くなると、ムクの世話を人手にかけるのが氣にかかる。少しは骨が折れても、朝夕ムクと同じ處に居る事がドノ位力になるか知れません。お君の仕事と云つては、普通の臺所の仕事の外には馬にやる豆を煮たり鶏の餌をこしらへてやつたりする手つだひで大して骨の折れるやうな事はありません。初めのうちは自分が厄介になる上に犬まで伴れてと氣兼をしてゐましたけれど、これほどの大家で犬一匹が問題にもならず、心安く思つてゐるうちに、ムクは早くも他の女中達に可愛がられてしまひました。女中取締りのお婆あさんも亦ムクを男らしい犬だと云つて大變可愛がるやうになりました。

從來此の家にゐた幾多の犬も、ムクの姿を見た最初は吠えたり睨んだりして見ましたけれど二三日經つうちに不思議に懐いてしまひ、ムクが立つと、群犬が其の周圍に自から列を作るやうになりました。ムクが牧場を目がけて歩を運び出すと、群犬が其れに從つて足並を揃へて繰出すやうになりました。

廣々とした牧場、その中に逞しい馬や、愛らしい小馬の臥たり起きたり鬣を振つたりしてゐる中をムクが群犬の一隊を引きつれて一周する光景は勇ましいものでありました。お君は手拭をかぶつて小流れの岸で、他の女中達と一緒に野菜を洗ひながら、ムクの勇ましいのを見て自分ながら嬉しくて堪まりません。

「こんな威勢のいい處を友さんに見せてやれば、ドノ位喜ぶか知れない、友さんもあんな處に燻つてゐるよりは、こんな家へ奉公してお馬の番人にでもなればいいに」

とお君はムクの勇ましさから、米友の身の上を考へました。

それを考へ出すと、一體此處の旦那様といふ方が、どんなお方であらうかといふ事をも考へ及ぼさないわけには行きません、朋輩の女中に向つて

「お藤さん、御當家の旦那様は何方に居らつしやるのでございます」

「旦那様御夫婦のおいでなさる處は向ふの屋根の大きなお家さ、その向ふに破風の處だけ見えるのが三郎様のおいでなさる處で、ここでは見えないけれど、あの欅の木のこんもりとした中にお嬢様の

お家があるのですよ」
「お嬢様の……」
お君にはここで前の日に小橋のほとりで會つた彼の呪はれた妙齢の女の姿が一圖に迫つて來ました。
「お君さん、お前はお嬢様に會ひましたか、まだですか」
「いいえ……」
とお君は首を横に振つてしまひました。
「さうですか」
と云つたきりで、お藤は氣の抜けたやうな面をしてお君を見ました。お君はこの場合、お嬢様の身の上の事を尋ねるのだが、何だか共れは忍びない心持がしたから、取つて附けたやうに
「まだ、私は旦那様にもお目にかかりませんの」
「旦那様は、滅多に外へおいでになりませんけれど、どうかすると此の牧場へお伴を連れて出ておいでなさることがありますよ」
「お年はお幾つ位でございます」
「もう、いいお年でせうよ、あの三郎様や、お嬢様の親御さんですから」
「三郎様と仰有るのは」
「こちらの總領のお方、この馬大盡のお後を取る方なのよ」

「それから奥様は」
「奥様には、わたしまだお目にかかつた事がありません」
と女中のお藤が云ひました。
その家の女中でゐて奥様を知らないといふ事はお君の耳には奇異に聞えました。
「わたしが奥様のお面を知らないばかりでなく、家の女中で、誰でもまだ奥様にお目にかかつた者は無いのですよ、取締りのお婆さんだつて奥様を知つてゐるか知つてゐないか、あのお婆さんだけは知つてゐるには知つてゐるでせうけれど、それも知らないやうな面をしてゐますよ」
「それは如何いふわけなのでございます、奥様は御別宅の方にでもいらつしやるのですか」
「如何いふわけだか、ほんとに、さう申しては何ですけれど變なお屋敷でございますよ、奥様は此方においでなさるともいひ、また御別宅の方においでなさるともいふのですが、その邊が永年御奉公してゐて、わたし達には、さつぱり解りませんの、けれども今の奥様が二度目の奥様で、旦那様よりズットお若い方だなんて、女中達の中では噂をしてゐるものもあります、何でも二度目か三度目の奥様に違ひないので、あの三郎様やお嬢様の產のお母さんではないのですね、何だか變に、こんがらがつてゐて、到底、こんな大家の財產と内幕は、わたし達の頭では見當が附きません、ただ可哀相なのはお嬢様でございますね、あのお方は本當に可哀想なお方でございますよ」
「お嬢様が……」

どうしても話は例のお嬢様の處へ落ちて行かねばならなくなりました。

お君が知らないと思つて、此の女中はお嬢様の事に就ては可なり委しくお君に話して聞かせました。お嬢様の名はお銀様といふ事。それはそれは怖ろしいお面、といふ時にお藤自身もゾッとして四邊を見廻し、お君もあの時の面が眼の前に現はれて身の毛が竦ちました。なほ此の女の語る處によれば、お嬢様のあんなお面になつたのは、ただに疱瘡の爲ばかりではない、それより前に大きな火傷をしたのがああなつたのだといふ事でありました。誰かお嬢様にあんな火傷をさせた者があるのだといふやうな口ぶりでありました。

して見れば天然の病氣と人間の手と二箇がかりで、あのお嬢様といふ人の面を蹂躙してしまつた事になる。何といふ惨たらしい報いであらうと、お君は、どうしても其のお嬢様の爲に心から同情しないわけには行きませんでした。

「これほどのお大壺でも、あればかりは如何することも出來ませんね、それだからお君さんのやうな容貌よしに生れついた者はお金で買へない幸福を持つてゐるわけですから、大切にしなくては可けませんよ」

とお藤はお君に向つて斯う云ひました。野菜類を洗つてしまつてからお君はムクに食物をやらうとしました。

處が、何時も其の時刻には來てゐるムクが見えませんから、お君は牧場へ出て遠く眼の屆く限りを

見渡しました。併しそこにもムクの姿が見られません。思ふに群犬を率ゐて興に乘じて、あの山の後の方まで遠征して行つたものだらうと、お君は強ひては心配しません。

此の機會に少し牧場の狀態でも見て置かうかと、お君はムクを尋ねながらに牧場の方へと歩んで行きました。

今、お君の頭の中では、ムクの事よりも一層あのお嬢様の事が考へられて堪りません。

お君は自分ほど不幸なものは此世に無いと思つてゐた一人でした。ほとんど幸福といふものを持たずに生れて、不幸といふ浪の中にのみ揉まれて來たのが自分の此れまでの生涯だと思ひました、それを今、あのお嬢様と比べて見れば、自分の方が確かに幸福者であると云はれて、成程さうかと思はねばならない事ほど無殘に感じたのであります。

病氣をした事の無い者には壯健で無事でゐる事の有難味がわからない。兎も角も、人並に生れついたといふ事の有難味が、この時お君にわかつて來て、自分ほど不幸な者は此の世にないと思つてゐた心は、僻みであつたり我儘であつたりしたのではないかとさへ思はれました。百萬長者の娘に生れたことが、この時にはお君に取つて少しも羨望ではありませんでした。さうして此の氣の毒なお嬢様の身の上に心の中で同情をしながら牧場を歩いて行くうちに、ついついお嬢様のお家のある處だといふ欅の林に近い處迄來て了ひました。もう冬と云つても宜い位ですから、欅の紅葉はほとんど八ケ岳颪で吹き拂はれてゐました。木の下には黒くなつた落葉が堆く落ちてゐました。そこへ來てお君は、

ここがあのお嬢様のお家であると思つて、そつと大きな榛の蔭から垣根の中をのぞいて見ました。

そこにまた庭があつて、池や泉水や築山があるのが見えました。さうして椽の處に一人の男の人が腰をかけてゐる容子であります。

「幸内、幸内」

と座敷で呼ぶのは、あのお嬢様の聲、呼ばれて、縁に腰をかけてゐるのは、自分を助けて來て呉れた若い馬商人、お嬢様の方の姿は座敷の中にゐて見えませんけれど、幸内の姿は垣根越によく見ることが出來ました。

「幸内や、お前に貸して上げるには上げるけれど、お父様に話しては可けません」

「如何致しまして、旦那様のお耳に入りますれば、お嬢様よりは、わたしが如何に叱られるか知れません」

「では大事に持つてお出で、さうして三日經つたらきつと返して呉れるだらうね」

「それは最早間違ひはございません」

「刀や脇差は幾本も幾本もあるのだけれど、此の一腰はお父様がわけても大事にしておいでのなのだから」

「それは、もう宜く存じて居りまする、三日經てば間違ひなくお返し申しまする」

幸内の前へお銀様は手づから長い桐の箱をさし置きました。

「これは如何も有難う存じます、お嬢様のお蔭で日頃の望みが叶ひまして、此んな嬉しいことはございませぬ」

幸内は箱の上へお辭儀をしました。

「幸内」

「はい」

「お前が此の間連れて來た、あの娘は如何してゐます」

「へい、あれはをばさんに願つてお屋敷へ御奉公を致すやうになりました」

「あれはお前、お前が前から知つてゐた子ではないの」

「いいえ、そんな事はございませぬ」

「では、あの山で初めて會つたのかい」

「左様でございます」

「その後、お前はあの娘と口を利きましたか」

「いいえ、あれからまだ會ひませんでございます」

「あの娘は容貌が美い子でしたね」

「如何でございましたか」

「あんな事を言つてゐる、あの娘は綺麗な子であつたわいな」

「面つきは、そんなでございましたか知ら、何しろ行き倒れのやうな姿でございましたから見る影はありませんでした」

「姿はやつれてゐたけれど、ほんとに容貌美し、よく作つてやりたい」

「一寸見は美く見えても作つて見ると駄目なんでございませう」

「いいえ、拘はないで置いてあの位ゐだから、お作りをしたらどの位美くなるか知れない、わたしは着物も持つてゐる、髪の飾りも持つてゐる、貸してやりたい」

「お嬢様のそのお言葉をお聞かせ申したら定めて有難く思ふことでございませう、あの娘はほんの着の身、着のままで道に倒れてゐたのでございますから」

「わたしの物を、そつくり遣つてしまひたい、わたしなんぞこそ着の身、着のままでいいのだから」

「お嬢様、何を仰有います」

「ほほほ、わたしとした事が、また我儘な事を云つてしまひました、幸内や、それで宜いからお前は早く其れを持つてお出で、誰かに見られると悪いから、見られても構はないけれど」

「それではお嬢様、お借り申して参りまする、二日目には必ず持つて参りますでございます」

幸内は頭を下げて其の長い桐の箱を風呂敷に包んで暇乞をしました。

「お前、歸りがけにあの娘の處へ行つて、あの娘に、わたしの處へ遊びに來るやうに、と云つておヨれ」

「はい、畏まりました」

さう云つて幸内は長い桐の箱を小脇にして椽側を離れました。その桐の箱の中には此のお嬢様の父なる人の祕藏の刀が入つてゐるといふ事が話の模様で推察されます。

お君が女中部屋へ歸つて針仕事をしてゐる時分に、ポツリポツリと雨が降り出して來ました。

「今日は」

内にゐたお君は其れが幸内の聲であることを直に覺りました。實はもう少し早く幸内がお嬢様の言傳を持つて來るだらうと、心待ちにしてゐないわけでもありませんでした。

「誰方」

それと知りつつもお君は障子を明けると

「私」

「これは幸内さん、よくお出でなさいました」

見ると幸内は小蔭張りした袷に小紋の羽織を引つかけて傘をさして、小脇には例の風呂敷包みの長い箱をかかへて、他行きのなりをしてゐました。

「さあ、どうぞお入りなさいまし」

お君は愛想よく迎へました。

「わしはこれから、ちと他へ行かねばなりませぬ、あのお君さん、お嬢様がお前さんに會ひたいか

ら、手が隙いたら遊びに來るやうにとお言傳でございますよ」
「お嬢様から」
「あい」
「畏まりました、有難うございます」
お君は幸内のお使御苦勞にお禮を云ひましたが、幸内は其れだけの言傳をして置いて此處を出かけて行きました。
お君は暫らく幸内の行くあとを見送つてゐますと
「お君さん」
朋輩女中のお藤が後から呼びかけました。
「お藤さん」
お君はそれを振り返るとお藤は
「まあ宜かつた事ね、お君さん、お嬢様から招ばれて宜かつた事ね」
「でも、わたし何かお叱りを受けるのぢやないか知ら」
「そんな事がありますものか、お嬢様はよくよくのお氣に入りでないと此方から何か申上げてもお返事もなさらないの、それをお嬢様の方から招び出しがあるのだから、お君さん、お前はきつとお嬢様のお氣に召した事があるんだよ」

「さうだと宜いけれど、わたしは何かお叱りを受けるんぢやないかと思つて」
「そんな事はありませんよ、わたし達は斯うして永いこと御奉公をしてゐるけれど、まだお嬢様から遊びにお出でとお迎へを受けた者は一人もありませんよ、それだのにお前さんばかり、そんなお沙汰があつたのだから、ほんたうに羨ましい事」
「あの、お嬢様はお氣むづかしい方ではありませんか」
「いいえ、あれで中々察しがあつて、よく行き屆くお方ですけれど好きと嫌ひが大變お強くていらつしやる、このお屋敷でも幸内さんの外にはお嬢様のお氣に入りといつてはないのですよ」
「幸内さんは、そんなにお嬢様のお氣に入りなんですか」
「ええ、幸内さんの言ふ事ならお嬢様は大抵の事はお聞きなさいます、だから人が幸内さんとお嬢様とをかしいなんぞと蔭口を利きますけれど、まさか其んな事は有りやしませんよ」
まだ明けてゐた障子の間から外を見ると、傘をさして包をかかへた幸内が、丁度いつぞや入つて來た時お嬢様と會つた小橋の上を渡つて行く後影が見えました。

三

お君はお銀様の居間へ上りました。

「お前のお國は何處」
「伊勢國でございます」
「伊勢國は何處」
「古市でございます」
「古市と云やるは、あの太神宮のお在りなさる處」
「左樣でございます、太神宮樣のお膝元でございます」
「其處で何をしてゐました」
「あの……」
お君が一寸返事に困つた處へ不意に庭先へ眞黑な動物が現れました。それはムクでありました。
「ムクや、こんな處へ來ては可けません、ここはお前の來る處ではありません」
と云つてお君は、お銀樣の手前、ムクの無躾なのを叱りますと
「これはお前の犬なの」
「はい、わたくしの犬なのございます」
「まあ大きい犬」
「わたしの後を少しも離れないので力になる事もありますが、困つてしまふ事もあるのでございます、さあ、早く彼方へ行つておいで」

「其んなに云はなくても宜い、主人のあとを追ふのは當り前だからさうしてお置き」
「それでも、此んな處へ、失禮でございます」
「さうしてお置き」
ムクは許されたともないのに庭先へ坐つてしまひました。
「溫和しくしてお居で」
お君も是非なく、その上追ひ立てることをしませんでした。
「このお菓子を食させてお遣り」
「こんな結構なお菓子を、勿體なうございます」
お君は其れを辭退しました。お銀樣は別段に强ひるでもありません。
「今日は雨が降つて淋しいから、お前、その伊勢國の話をして御覽、わたしは何處へも出ることが嫌だから、他の國の事は少しも知らない」
「お孃樣などは、お出ましになつて御覽遊ばさずとも御本や何かで御承知でございませうから」
「名所圖繪や何かで、わたしも御參宮の事を知らないではないけれど」
「太神宮樣あつての伊勢でございますから、あの通りは大そう賑やかでございます、その賑やかな處で、わたしは暮らして居りました」
「其處で何を商賣に」

「それはあの……」

可哀さうにお君はまた行き詰つてしまひました。

その時温和しく軒下に坐つてゐたムクは何に氣がついたのか頭を上げて外を見ました。築山の向ふの方を暫らく見込んでゐたのが、やがて立ち上がつてのそのそと雨の中を歩いて行きました。それが容子ありげでしたから、お君もお銀様も共に犬の行く方をながめました。その時に

「姉様」

と云つて庭の方から此の場を覗いたものがあります。

「三郎さん、此處に來ては可けません」

とお銀様は叱るやうに云ひました。

「それでも」

「お歸りなさい、それにまあ雨の中を傘もささないで」

お銀様は呆れて見てゐました。お君はやはり呆れたけれど、これはただ見てゐるわけには行きません。其處へ來たのは十歳ばかりの男の子であります。中剃を入れないで髪をかつそうにしてゐました。和かい着物に和かい袖無羽織を着て、さきに姉様と呼んだ事から見ても、またお銀様が三郎さんと呼んだ事から見ても、これはお銀様の弟の三郎様に違ひないと思ひました。それであるのに誰も附人なしに一人で雨の中を傘もささないで大人の下駄を穿いて其處へ

「姉様」

と云つて入つて來たから、お君は呆れながらも默つて見て居られませんから

「坊様」

と立つて抱いてお上げ申さうとするのをお銀様が抑へて

「いいえ、さうしてお置きなさい、三郎さん、お前は此處へ來ては可けないといふのに、ナゼ歸りません」

「だつて」

三郎さんは、やはり雨の中に立つてお銀様の面を凝と見てゐました。お君は如何していいのかわかりませんでした。雨の中に傘なしで立つた三郎さんの面を見ると、色の白い品の良いお子さんで、この大家の血統として申分のないお子さんに見えましたが、ただ其の頰のあたりが子供にしては肉が落ち過ぎて、それが爲に、もともと人並より大きい眼が、なほ一倍大きく見えるのであります。大きいけれども強い光は無く懶いやうな色で滿ちてゐるから、品はよいけれども、どうも賢い子には見えません。

「此處へ來るとお母様に叱られますよ」

「でも」

三郎さんは大きな眼をキョロリとしてお銀様の方を見てゐて立つて動かうともしません。雨が降り

かかつて頭から面に雫がたらたらと流れ、和かい着物がビツショリと濡れてしまつても少しも氣にかけないのであります。それをまたお銀様は見てゐながら、ただお歸りお歸りと云ふだけで立つて世話をしてやるでもなければ、お君が立ちかけたのをさへ抑へてしまつた心持が如何してもお君にはわかりません。

「早くお歸りといふに」

お銀様の劍幕は凄くなりました。その釣り上がつた眼の中から憎悪の光が迸しるやうに見えました。ただ姉が弟を叱るだけの態度ではなくて、眼の前にあることを一刻も許すまじき嫌悪の念から來るもののやうでしたから、お君はいよいよ解らなくなつて、ほとほと立場に苦しむのでありました。

「お姉様、お菓子頂戴」

それでも三郎さんは歸らうとしないで斯う云ひました。その癖、姉の傍へは寄つて來ないで遠くから、いちけるやうに姉の氣色を伺つて矢張り雨の中に立つてゐるのでありました。キョロリとした大きな眼の瞳孔が明けつぱなしになつてしまつてゐるのを見るにつけ、此のお子さんは人並のお子さんではないと云ふ事を思うて、お君はお氣の毒の感に堪へられません。

「可けません」

お銀様はキツパりと斷つてしまひました。

見るに見兼ねたから、お君はお銀様の抑へるのも聞かずに立つて下へ降りて來て、三郎さんの傍へ

寄り

「坊様、雨がこんなに降つて居りますから歸りませう、お召物が此んなに濡れてしまひました」

「打捨つてお置きなさい」

お銀様は相變らず怖い面をしてゐます。

「ね、わたしに背負をなさいまし、彼方のお家へ歸りませう」

お君は自分のさして來た傘を廻して、それを片手に持ち三郎様へ背を向けました。

お君が折角親切に背を向けたに拘はらず、三郎様は其の時クルリと向き返つてスタスタと元來た方へ歩き出しました。お君は其のあとから傘を差しかけて送つて行かうとするのをお銀様が

「其方へ行つてはなりません、其方のお邸へ行つてはなりません」

命令するやうな強い聲で呼び止めましたから、お君は立ち竦みました。

三郎様は大きな下駄を引きずつて雨の中をヅブ濡れで悠々と彼方へ行つてしまひます。

「お前は、まだ知るまいけれど、此家ではお互の屋敷へは滅多に往來をしないやうになつてゐます、あの子は其れを申し聞かされてゐる筈なのに、こんな處へ來たから其れで叱りました」

「はい」

「さあ、お前はお上り、あの犬は如何しました、犬が母屋の方へ行つて惡戯をするやうな事はあるまいね」

「あの犬は惡い事は致しませぬ」

お君は再び元の座に歸りましたけれど、この事から何となく其あたりが白け渡つたやうであります。

お銀樣は折角お君を相手に名所の話などをして興を催されようとしてゐた時に、三郎樣が來て其の御機嫌を、すつかり損ねてしまつたやうであります。いかに大家とは云ひながら一つ屋敷のうちに親子兄弟別々に家を持つてゐるさへあるに、弟は姉の住居へ行つては惡い、姉は弟を送つて行くことを止めるとは何といふ事だらうとお君は何事もわからないで、ただ悲しい心になつて氣が深々と滅入るやうでしたから、此れではならないと思ひました。

さうして何とかして不快になつたお銀樣の心を慰めて上げたいものだと思ひました。けれども何と云つて慰めて宜いか取り附き場に苦しんでゐましたが、そのうちにお君は床の間に飾つてあつた琴を見て、音曲の話を引き出しました。それは此の場合、お君に取つてもお銀樣に取つてもよい見つけものでありました。

「まあ、お前、三味線がやれるの、それは宜かつた、わたしがお琴を調べるから其れをお前、三味線で合せて御覽」

お銀樣は大へん喜びました。それで今の不快な感じが消えてしまつた容子をお君は初めて嬉しく思ひます。

その雨の日は、夜になつても二人の合奏の興が續きます。

四

神尾主膳は其の後しばらく病氣と稱して引き籠つて居りました。引籠つてゐる間も分部とか山口とかいふ其の懇意な組頭や勤番が始終出入してゐました。今日は兼ねて前から企てをして置いた處によつて多くの人が朝から神尾の屋敷へ集まつて來ました。

これは神尾の邸の裏の廣場で、「樣物」がある約束でありました。「樣切」は卽ち試し斬であります。朝から神尾邸へ詰めかけて來た連中は、いづれも祕藏の刀や自慢の脇差を持つて集まりました。あらかじめ罪人の屍骸を貰つて來てあつて、斬手の役は小林といふ劍道の師範役、それに勤番のうちの志願者も手を下ろして利鈍を試むるといふ事であります。

たとへ罪人の屍骸とは云ひながら、人間の身體を試し物に使用するといふことは餘程變つたことであります。併し、この變つた事を日本の古來に於ては立派なる一つの儀式としてありました。江戸の幕府では腰物奉行から町奉行の手を經て例の山田朝右衞門がやる事、その時は物々しい檢視場、そこへ腰物奉行だの本阿彌だの徒目付だの、石出帶刀だのといふ連中が來てズラリと並び、斬手の朝右衞門は手代り弟子等と共に麻上下でやつて來て土壇の上や試しの方式には中々の故實を踏んでやる事を、ここに集まつた勤番連中は、或者は小林に試して貰つたり、或物は自分で試したりして見る事になり、

見事に斬つたのもありました。斬り損じて笑ひ物になるのもありました。その度毎に刀の利鈍の評判が出ました。腕の巧拙の評判も出ました。或は刀は良いけれども腕が怪しいと云はれて悄げるものもあり、刀はさほどでないが腕のゴえが天晴と云つて賞められるものもありました。

その中でも師範役の小林は、さすがに劍道の達者だけあつて斬方が一番上手でありました。今までに様物を幾度びもやつた經驗や盜賊を斬つて捨てた經驗を話して一座を賑はせましたが、一通り様物も済んでの上、弟子を連れて辭して歸らうとする時分に神尾主膳がそれを呼び留めました。

「小林氏、お待ち下さい、今日は貴殿に見て頂きたいものがある、貴殿の鑑定並びに各々方の御意見を聞いて置きたい物がある、お暇は取らせぬによつて暫時お待ち下されたい」

「して其の拜見を仰付けられる品は」

「只今持參致させる、いや、もう來さうなものぢや、兼ねて約束じて置いた事故、間違ひは無いけれどまだ見えぬ、追つ付け見えるでござらう、今暫らく」

と云つて神尾は人待顔に見えます。小林師範も神尾が何物を見せて呉れるだらうと坐り込んで待つことになりました。その他一座の連中も多少の好奇心に誘はれます。

「神尾殿、我々に見せたい品と仰有る其品は」

「先づ、お待ち下され、到着しての上で御披露する」

神尾の言ひぶりが事實を明かさないで置いて、あつと云はせようといふ趣向のやうにも見えます。

其處へ用人が出て來て

「幸内が參りました、有野村の幸内が推參致しました」

「あ、幸内が來たか、待ち兼ねてゐた、急いでこれへ」

其席へ呼ばれて來たのは有野の馬大盡の雇人の幸内であります。

幸内は前にお君の處へお銀様の言傳を云つた足で此方へ來たものと見えます。さうして昨晩は何處か此の甲府の城下へ宿を取つてゐたものでせう。

「これは皆様」

と云つて幸内は遙かの下座から平伏しました。ここに集まつてゐる連中は皆んな兩刀の者であるのに、幸内ばかりが無腰の平民、然も雇人の身分でありましたから、遠慮に遠慮をして暫らく頭を上げません。幸内の平伏してゐる傍には其の持つて來た長い箱が萠黄の風呂敷に包んで置かれてありました。

「おお、幸内、よく見えた、御列席の方々も皆其の方の來るのをお待兼ねぢや」

「遲れまして何とも申譯がござりませぬ」

「遠慮致さず此れへ出るが宜い」

「左様ならば御免下されませ」

幸内は恐る恐る出て來ました。

「各々方」

と云つて神尾主膳は一同の方に向き直りながら

「ここに見えたのは、これは各々方も御存知の事と思はるるが有野村の伊太夫の家の雇人ぢや、あの馬大盡の雇人であるが、民家の雇人に似合ず感心なもので、剣術が中々達者である、村方でも稽古をし、この城下の町道場へも折々通ふ、至つて手筋が宜しい、お見知り置き下されたい」

と云つて紹介しました。幸内は、こんなお歴々の方の中へ剣術が達者だの手筋が宜いのと吹聴されたから、さすがに面を赧くしてしまつて

「恐れ入りましてござりまする」

平伏して、やつぱり頭が上がりません。

「其のやうに恐れ入らんでも宜い、實は今日は其の方を上客にしたい位、いつもは伊太夫の雇人であるが、今日は位がついて來たのぢや、例の品は持つて參つたことであらうな」

「へへ、恐れ入りまする、折角の殿様のお言葉でござりまする故、主人から借受けて參りましてござりまする」

「それは大儀々々、よく借受けて來た、伊太夫は變人の事でもあり殊にあの品は滅多に人に見せぬ品であるさうな、其の方の働きで、ここまで持參して來たのは何よりのこと」

「これが其の品でござりまする」

幸内は、やはり恐る恐る萠黄包みの長い箱を差し出しました。

この箱は、前の日、幸内がお銀様から三日の約束で借受けて來た箱であります。この席へ持つて出る爲に幸内は此の箱をお孃様から借受けたのだといふ事がわかります。

「おお、それそれ」

と云つて神尾主膳は其箱を受取りながら

「各々方にこの品をお目にかけたい、その前に申上げて置きたい事は、この品はあの有野の馬大盡の家に先祖より傳はる祕寶、御列席のうちにも名のみ聞いて實を見んと思はるる向が少からぬ事と推察致す、門外不出とも云ふべき此品を、この席に限りて一見致すことは仕合せ、充分の御鑑定を承はりたいものでござる」

神尾主膳は風呂敷の結び目を解きかけて斯う云ひましたから、列席の者が成程と感心しました。葛原親王以來と云はれる有野の馬大盡の家には無數の祕寶があるといふ事だが、そのうちにも一本の名刀がある、それは非常な名刀であるといふ評判だけを聞いてゐたがまだ見た者がありません。見ようとしても主人の伊太夫が頑固で容易に見せないとの事でありました。その名刀を今此の席で一見する事が出來るといふのは、一座の好奇心の期待にそむかない事であります。

「それはそれは」

と云つて列席が動揺み渡りました。さすがに神尾殿は苦勞人だけあつて、人を待たして置いて、アツと云はせる趣向が旨いと感じたものもありました。

何か趣向をして置いて、アッと云はせるといふ事は似非茶人や似非通人のよくやりたがることであります。神尾は人を招いた時は、いつでも何かこんな事をしたがるのでありました。さうして、さすがの御趣向だと云はれることを以て大得意になる癖がありましたのです。

併し乍ら、列席の者のうちにはアッと云つたものばかりは有りませんでした。例の忌味な神尾の癖がと苦々しい面をして控へてゐるのもありました。その苦々しい面をして控へてゐる者も、神尾のやり方の忌味なのに苦々しい面をしたので、其の名刀を見たいといふ熱望は決して苦々しいものではありません。辭を厚うし身を謙下つても後學の爲に見て置きたいと思つてゐた處でありましたが、神尾があんまり我物顔に思はせぶりをするものだから

「如何にも、あの有野の伊太夫が家に名刀があるとは豫て噂に聞いてゐた、噂に聞いた處によれば源氏の髭切膝丸、平家の小烏丸にも匹敵するほどの名劍であるさうな、併し誰が行つても見せた事はない、見た者も無いといふ、それ故、あの名刀は評判倒れ、實は其れほどでも無い劍を、あんまり評判が高くなつた故に、人に見られるのが定まりが悪く、それ故祕して置くといふ藤口もござる、今日は其れ等の疑ひが殘らず晴れることでござらう、喜ばしい事でござる」

やや皮肉まじりに云ひ出でたのは鐵砲方の平野老人でありました。

「まこと此の品が噂通りの名劍であるか或は左ほどの者ではないか、御一見の上で各々方の腹藏なき御意見を承はりたい、拙者とても今日はじめて見る品」

神尾は平野老人の言ひ方が少し癪にさはつたやうでありました。併し此の老人は此の席の中での刀の目利でありましたから、多少は警戒しました。萬々が一、この刀が評判ほどのものでないとすれば、眞先に此の老人から槍が出ると思ひましたから、少しは氣味が悪いと見えます。それだから自分はまだ此の刀をそれほどの物で無かつたにしろ、幾分は責任が逃れるし、若し評判通り非常な名劍であつた時には、思ひ入り此の老人から取締めてやらうといふ腹なのでせう。

それですから老人の方でも、また多少の意氣張が出て、眼鏡を拭いて掛け直しました。平野老人につづいては師範役の小林が名を得てゐました。この兩人の外の者と雖も、刀に就ては皆相當の眼を持つてゐないものはありません。或ひは平野や小林以上に眼の肥えてゐて名の聞えないものが一座の中にゐないとは限りません。

一應アッと云はせたけれども、開けて口惜しき玉手箱では折角の趣向が何にもならぬ。こんな事ならば、一應自分が見て置いてから、此の席へ出した方が宜かつたと神尾は多少自分の輕卒を悔ゆるやうになりつつ漸く包みを解いてしまつて、箱を開くと古金襴の袋の中には問題の太刀が一振。それから神尾が袋を拂つて其の白鞘の刀に手をかけて鄭重に拔いて見ました。

刀身の長さは二尺四寸。神尾主膳が其れを拔いてつくづくと見ると例の平野老人は眼鏡の面をそれに摺りつけるやうにして横の方から見ました。小林文吾も亦其れを前の方からながめて居ました。一

座の連中は、或ひは近い處から、或は遠い處から頻りに覗いたり眺めたりしてゐました。主膳はつくづくと見て

「うむ」

と考へ込んでゐましたが、そのまま何等の意見も述べないで平野老人の手へと渡してやりました。平野老人は其れを恭しく受けて改めて法式通り熟覽しました。平野老人は打ち返して二度まで見ました。

「うむ」

これも唸るやうに、うむと力を入れて云つたままで、次なる師範役の小林文吾の手へと渡してやりました。小林師範が其れを受けて頻りにながめましたけれども、これも一言も意見を述べませんでした。さうして、やはり無言のままで次へ渡してしまひました。同じやうにして其の刀が列座の人々の手から手に渡されて、いづれも考へを凝らしてながめてゐましたが、誰とて、それに就て極めをつけて見ようと言ふものは無く、斯うもあらうかといふ意見をさへ述べるものはありません。さうして無言のままに受取られて刀は席を一巡し漸く神尾主膳の手にまで戻りました。

「さて如何でござるな、各々方」

その刀を鞘へ納めながら神尾主膳は一座を見廻しました。けれども、誰もまだウンともスンとも云ひませんでした。相州物であらうとか、いいや備前とお見受け申すとか、大よその見當さへ附ける人もありませんでした。大よその見當を附けてさへ笑はれることを恐れるほどに、わからないのが此の刀でありました。

「區より一體に板目肌が現はれてゐるやうでござるな」

平野老人が漸く此れだけの事を云ひました。相州物とも大和物とも云はないで、肌の事から云ひ出したのは、大綱を述べないで、細論にかかつたやうなものでありました。この老人も多少手古摺つたものと見えます。

兎も角も平野老人が、これだけの口を開いて見ると、次には小林師範役が何とか言はなければならない立場になりました。

「模様を一見した處では肌が立つて地鐵が弱いやうにも見受けられる……が」

最後のがといふ處へ、最も多くの餘地を殘して置きますと

「左様」

平野老人は呑込んだやうに頷きました。併し何が左様だか、列座の人にはあんまり呑込めないやうであります。そこで老人は

「その地鐵がなあ」

と附け足したけれども、地鐵が如何したのだか、いよいよ呑込めなくなりました。これだけ言ひかけたら、あとは小林師範役か誰かがバツを合せて呉れるだらうと思つてゐた處が、小林は其れから何と

も云ひませんでした。一座の者も默つてゐましたから、老人は自身の言葉尻を持ち扱つてゐると列座の中から

「則重……則重……則重……ではないか」

と吃りながら斯う云つた者がありました。これは粗忽かしいので通つた市川といふ御藏のかかりでありました。まだ誰も劍呑がつて國も云はなければ年代にも觸つて見ないうちに、單くも其の銘を言つてしまつた處は成程粗忽かし屋であり正直者であることがわかります。

「以ての外」

平野老人は首を振つて肯ひませんでした。市川の云つた事を刎ねつける事によつて、自分が持て餘した言葉尻が立て直りました。

「則重ではござらぬ」

平野老人は首を振つたから、粗忽かし屋の市川は一時、面を赤くしましたけれど、老人があんまり手厳しく刎ねつけたものですから反抗の氣味となつて

「そ、そ、そんならば、そんならば、老人のお目ききは……」

と云つて反問しました。焦き込むと吃る癖があるから、いつもなら可笑いのであるけれど、誰も笑ひませんで、却て市川に同情するやうな心持で老人の返答を相待つてゐるやうな者さへあります。それは則重と見たものが此の市川一人ではなく、大分同意見の者があるらしいのです。市川と同意見であるけれども、まだ左様も言ひ出し兼ねてゐる時に市川が皮切をしたから、我意を得たりと云はぬばかりに、内心で市川に同情してゐるらしい者もあります。

「成程、則重と云ひたい處である、一應は左様云つて見たい處で、市川氏の仰有るのも御無理は無い、大灣れに鉈が優れて多く匂の深い處、則重の名作と誰も云つて見たいが、それよりはずんと高尚で且つ古いものぢや」

平野老人は斯う云ひました。

「そ、そんならば老人のお目利は」

市川は再び老人に返答を促したけれども老人は頓に返事が出來ないで困しんでゐる容子を小林師範が傍から見て

「これは近頃の好題目、口に出して云うては皆々遠慮がある故に入札として見たら如何でござるな、各自の見る處を少しの忌憚なく紙へ書いて、名前を記さずに此れへ集めて見ようではござらぬか」

小林が斯う云ひ出したのは老人にも救ひであり一座も皆同意しました。言ひ出したいけれども恥を掻くといけないと思つて遠慮してゐたものが多いのを、それが無記名投票になれば恥は掻き捨てになり、當れば名譽になるのですから、忽ちに多數の同意を得て筆と紙との用意が出來ました。各々筆を取つて紙片に思ふ所を書いて捻つて盆に載せ、二十餘人の者が殘らず投票をしてしまつた後に開票の事になりました。

開票して見ると其の鑑定に大膽を極めたのもあり、小心翼々と疑問を存したのもあつたが、いづれも其れを古刀と見ることには異議はありません。新刀と書いたものは一人もありませんでした。備中の青江であらうと書いたり、備前の成宗と極めをつけたのもあり、大和物の上作と書いたのもあり、或は飛び離れて天座神息などと記したものもありました。其の觀る處の區々であるだけ其れだけ捉まへ處が少いものと見えましたが、さすがに則重と書いたものが六枚ありました。二枚三枚と適合したのは他にもあつたけれど、六枚揃うたのは則重だけでありました。

「如何もわからぬ」

開票して見て、いよいよ刀の異體が不思議になつてしまひました。則重も亦正宗門下の傑物だが、今ここに評判に上つてゐるやうな寶物としては物足りない處があります。

「それでは、いよいよ則重かな」

一同の面の色に歴々と失望の色が見えまして、それがやや輕侮の表情に變つて行くのを見てゐた馬大盡の雇人幸内は堪らなくなりましたから

「申上げまする、これは則重ではござりませぬ、數年前、本阿彌様が主人の家へお立ち寄りになりました時分の御鑑定によりますれば……」

さてこそ本阿彌が引合に出されて來ましたから、一同は言ひ合せたやうに幸内の面を見ました。本阿彌といふ名前は、兎にも角にも此の場合重きを成すのであります。

「本阿彌家の折紙があるならば、あるやうに最初から云つて置くがよい」

と平野老人が呟きました。

「いいえ、折紙があるのではござりませぬ」

と幸内は言譯をしました。

「如何したのぢや」

「本阿彌様は折紙を附けませぬ、手前共の主人も折紙を附けて戴く事は嫌ひなのでござりまする」

「して、本阿彌が何と云つた」

「本阿彌様が申しまするには、この刀は伯耆の安綱であらうとの事でござりまする」

「ナニ、伯耆の安綱」

「はい」

「ははあ、伯耆の安綱か」

と云つて、一旦、鞘に納められた太刀が再び鞘から拔け出しました。

「成程」

「成程」

彼等は手から手に渡してつくづくとながめました。

「それだから云はぬ事ではない、一見しては地鐵が弱いやうだけれど、よく見てゐると板目が立ち、

見れば見るほど刄の中に波が立ち後世の肌物とは丸で違ふ」

平野老人は得意になりました。宛ら本阿彌を自分の味方に引きつけたやうに鼻高々と一座を見廻すと小林師範役は

「成程、さう云はれて仔細に見ると地鐵に潤ひがあつて弱いやうな處に深い強味がある、全く拙者共の目の屆かぬも道理」

と云つて服してしまひました。

「伯耆の安綱といふのは之れか、名にのみ聞いて拜見するは今日が初め」

一座は幾度も幾度も其の刀を見ました、見れば見るほど感心の體でありました。主人役の神尾主膳も得意になつてしまひ、則重と云つた人々さへ、自說の破れた事は悔いないで、其の刀に見惚れてしまつてゐました。自然、幸內の肩身も廣くなり

「本阿彌樣も、しかと安綱とは仰せになりませんで、若し伯耆の安綱でなければ、それと同じやうな、また其れよりも上の作であらうと御鑑定になりましたさうでございます」

「成程」

「斯樣な刀には我々共が極めをつけるは恐れ多いと本阿彌樣が御謙遜になり、主人も亦、極めをつけて戴くことが嫌ひなのでございまして、唯寶刀として藏つて置きましたのでございまする」

「成程」

ここの一座には、安綱を見たものは何れも初めてでありました。

伯耆の安綱は大同年間の名人、その時代は一千年以上を隔てたものです。よし安綱であつても無くても、それと同格或ひは同格以上のものであらば、其れは寶物とするのに充分であります。

見直してゐるうちに、一座は誰とて其れに不服を唱へるものはありませんでした。

「攝州多田院の寶物に童子切といふのがあるさうぢや、これは源頼光が大江山で酒呑童子を斬つた名刀、その刀が卽ち伯耆の安綱作といふ事だが、拙者まだ拜見を致さぬ、その他、大名のうちに、稀には安綱があるとも承はつたけれど、何れも其名を聞くばかり」

と云つて平野老人は、再び手許に戻つて來た名刀を貪り見ると、神尾主膳も亦老人と額を突き合せるやうにして刀ばかりを見てゐました。

五

その席はそれで濟みました。主人も客も始めあり終りある會合を滿足して退散しました。

ただ此處で變な事が一つ起りました。それは幸內の行方であります。幸內は彼から御馳走になつて神尾家を辭したのは夕方の事でありました。勿論その歸る時も小脇には伯耆の箱を抱へて歸つたのでありましたが、其れが有野村へは歸らずに、途中で何處へ行つたか姿が見えなくなつてしまひました。

有野村の馬大盡の家では誰も幸内が此の會合の席まで來たといふことを知つたものはありません。一日や二日歸らないからと云つて、それは例ある事だから誰も不思議とは思ひませんでした。ただ一人、心配なのはお銀様ばかりです。今日は約束した三日の期限が切れるのに、幸内がまだ歸つて來て呉れない事をお銀様は心配してゐました。三日の期限が切れたから、直にお父様に咎められるといふわけではないけれど、あの刀は祕藏の刀である故に、心配になります。

それでも、幸内を信じたお銀様は、やがて幸内が持つて歸ることと信じてゐました。

けれども其の三日も過ぎて終つた其の夜も遂に幸内が歸りませんでした。夜が明けてお銀様はやや強く其の事を心配しはじめた時分に、この屋敷へ馬に乘つて若黨をつれた立派な武士が、不意に訪づれて來ました。

その武士が來て案内を乞ふと、有野家の執事といつたやうな老人が先づ騷ぎはじめました。

「御支配様がお出でになつた」

その騷ぎがお銀様の部屋までも聞えると

「御支配様がお見えになつたさうな」

とお附きのやうになつてゐるお君を顧みてお銀様が云ひました。

「御支配様とは如何なお方でございますか」

とお君が尋ねました。

「それは此の甲府のお城を預かつて、勤番のお侍をお指圖なさるお方」

とお銀様が說明しました。

「それではあの甲府のお城の殿様でございますね」

とお君が受取りました。

「この甲府には大名はないけれど、あの御支配様が同じおつとめをなさいます」

「此方様へは度々、その御支配様がお出でになるのでございますか」

「いいえ、滅多にそんな事はありませぬ、若し、そんな事のある時は、前以てお沙汰があるのに、今日は如何してまあ斯んなに不意にお出でになつたのでせう」

不意に此の馬大盡へ訪ねて來たのは駒井能登守でありました。

新任の勤番支配が何用あつて、先觸もなく自身出向いて來られたかと云ふことは、此の執事を少なからず狼狽させました。

「馬を見せて貰ひたいと思つて、遠乘の道すがらお立寄致した次第、このまま厩へ御案内を願ひたいもの」

斯う云はれたので執事は安心しました。

斯うして駒井能登守は有野村の馬大盡の伊太夫に案内されて其の厩と牧場とを見廻つてゐます。能登守には若黨と馬丁とが附いてゐました。伊太夫には執事の老人と若い手代とが附いてゐました。

伊太夫は六十位の年輩でありました。馬を見ながら、或處は能登守の說を謹んで聞き、或處は能登守に敎へるやうな事があります。

「名馬といふものは滅多に出て參るものではございませぬな、斯うして數ばかりは幾らか揃へてございますれど、何れを見ても山家育ちで……、せめて此の中から一頭なりともお見出しに預かりますれば、馬の名譽でございまする、また拙者共の名譽でございまする」

斯う云つて厩を見て行つたが、一つの馬の前へ來ると能登守が、しばらく足を留めてゐました。伊太夫其の他の者も亦同じく其の馬の前で留まりますと

「この馬は强い馬らしい」

能登守が立つて見てゐる馬は今まで見てゐる馬のうちで一番强さうな栗毛の馬でありました。

「よく其れにお目が止まりました、その邊が此處では逸物でございませうな、牧場の方へ參ると駒で一頭、ややこれに似た悍の奴がございまするが」

「これで丈は」

手代が主人に代つて

「四寸でございまする」

「成程」

能登守はまだ種々と其の馬をながめてゐました。

「お氣に召しましたならば、一責め責めて御覽遊ばしませ」

伊太夫は傍から勸めました。

「如何も、拙者には、ちと强過ぎるやうぢや、馬はまことによい馬だけれど」

「左樣な事はございますまい」

「昔、楠正成卿は三寸以上のを好まれなかつたとやら、四寸の强馬は分に過ぎたものに違ひないが、併し乘つて面白いのは、やはり少々分に過ぎたものを乘りこなす處にあるやうぢや」

「左樣でございますとも、其のお心掛さへお有りなされば、ドノ樣なお馬にお召しなされても怪我はあるまいと存じまする、それに私共にては、見所のありさうな馬には、昔の掟通り白轡五十日、差縄五十日、直鞍五十日を馬鹿正直に守つて仕込ませました故に、拍子も割合によく出來てゐるつもりでございまする」

伊太夫は此んな事を能登守に向つて語りました。能登守は此の栗毛に乘つて見ようといふ心を起しました。

程なく能登守が馬に乘つて勇ましく馬場を駈けさせる姿を伊太夫は此方から見てゐました。それとは少し異つた處で

「お君や、あの方が御支配樣でありませう」

と云つて椿の木の下で、お君を招いたのはお銀樣であります。

「まだお若い方でございますね」
お君も木の蔭に隠れるやうにして、やや遠く能登守の馬上姿を見てゐました。
「ほんとに、まだお若い方」
とお銀様が云ひました。お君が氣がつくとお銀様が馬上の御支配様を見てゐる眼の熱心さが尋常でないことを知りました。
お銀様も、やはりお若いお孃様である。お若い殿方を見るのは忌なお氣持もなさらないものかとお君は坐ろに氣の毒になつて來ました。それで自分も其の御支配様が、馬に召して、だんだんに近い處へ打たせてお出でになる姿を、お銀様と同じやうにながめてゐますと
「お幾つ位でせうね」
お銀様が斯う云ひました。
「左様でございますね」
お君は、この時に御支配のお面とお姿とをよくよくとながめました。馬は二人の方へ向いて駈けて來ました。その間は可なりありましたけれど、此方は木の蔭に隠れてゐましたから、向ふではわかりません。
「お孃様、御支配様は大へんお綺麗な方でございますね」
「ええ」

とお銀様は此の時振り返つてお君の顏を見た眼つきに悲しい色が浮びます。
「歸りませう、失禮だから」
自分が先に立つてさつさと家の方へ行つて了ひます。お君は是非なく其あとについて行きました。
お居間へ歸るとお銀様はわざとしたやうな笑顏を作つて
「お君や、お前の髪の毛が少し亂れてゐる、其れをわたしが直して上げませう」
と云ひ出しましたから
「お孃様、それは恐れ多いことでございます」
と云つてお君が辭退をしますと
「いいから、ここへお坐り」
強ひて鏡臺の前へお君を坐らせてお銀様は其の後へ廻りました。
お銀様は少し亂れたお君の髪を撫でつけてやりました。さうして自分の差してゐた結構な簪や櫛を拔き取つて、それをお君の頭に差してやりました。
お君は、お銀様が何でこんな事をなさるのかと變に思はれて堪まりません。
「お君や、お前、今日はわたしになつて御覽、わたしと同じ髪を結つて、わたしと同じ着物を着て、さうしてお前が此の家の娘になるといい」
「お孃様、何を仰有います、飛んでもない事を」

お君は呆れてゐますと
「わたしがお前になつて、お前がわたしになつた方が宜い、ね、さうして御覽、わたし此んな髪の飾りも要らない、此んな着物も要らない、帶も要らない」
「まあ、お嬢樣」
お君がいよいよ呆れた時に、外でムクの吠える聲がしました。
髪の飾りも要らない、着物も要らない、帶も要らないと云つたお銀樣はお君の呆れて言句も出でない間に、ついと次の間に行つてしまひました。
お君は其れも氣にかかるけれど、今吠えたムクの聲も氣にかかります。障子を開けて見るとムクが今しも馬に乘つて馬場の外へ打たせて行く能登守の馬を追ひかけて、其の足許に絡みつくやうにして吠えてゐます。
「まあ、あの犬が殿樣に失禮な」
お君は驚きました。ムクを呼んで叱らなければならないと思ひました。
「お嬢樣、ムクが殿樣に失禮をするといけませんから呼んで參ります」
と斷つて、あわてて其處を駈け出して
「ムクや、ムクや」
お君はやや遠くから呼びました。お君から呼ばれさへすれば、いくら遠くにゐても返つて來るムク

が此の時は、いよいよ能登守の馬の足に絡みついて、遠くから見てゐると馬と人とを襲うてゐるやうに見えます。
それを馬上の能登守が持て餘してゐるやうでしたから、お君は安からぬ事に思うて息を切つて、馬場から牧場の方へと枯草の原を駈けて行きました。
その中に、駒井能登守は堪り兼ねて馬から下りてしまつたやうであります。或はムクが烈しく襲ひかかつた爲に落馬をされたのではないかと、お君はいよいよ安からず思ひました。
馬から下りた能登守が馬の口を取つてゐると、其の時にムクも溫和しくなつてしまひました。其處へ息を切つてお君が馳せつけて來て
「ムク、まあ如何したのです、お殿樣へ御無禮を申上げて」
お君はせいせい云ひながらムクを叱りました。駒井能登守は莞爾としてムクの頭を撫でながら
「叱つては可かぬ、こりや良い犬ぢや、此の犬のお蔭でわしは助かつたのぢや」
と云つて、駒井能登守は一間ほど前の處の草の中を指さし
「其處に古井戸がある、その古井戸へ、すんでの事に馬を乘りかける處であつた、それを此の犬が追ひかけて來て留めて呉れた、初めは狂犬かとも思うて、鞭で二つ三つ打ち据ゑたが、それでも退かぬ故漸く氣がついた、この犬が居なければ、わしは馬諸共此の古井戸へ落ちて助からぬ事であつた、ああ危ない事であつたわい」

と云つて能登守は汗を拭きました。
「まあ、左様でございましたか、ムクや、よくお殿様に危ない所をお教へ申しました、お前はやつぱり良い犬でした」
お君は駈け寄つてムクの首を抱きました。その時、能登守はお君とムクとを見比べてゐましたが
「この犬は、お前の犬か」
「はい、わたくしの犬でございます」
「お前は此處の家の……」
「雇人でございまする」
能登守はお君と其の犬との親身な有様を凝と見つめてゐました。伊太夫をはじめ能登守のお伴の者が其處へ駈けつけたのは其の後の事であります。

駒井能登守は有野村の馬大盡の處から歸り道に
「一學」
と云つて若黨の名を馬の上から呼びました。
「はい」
「あの犬を大切にしてゐた娘を其方は見たやうな女と思はぬか」

「はいはい、その事でございまする、私も其のやうに申上げようかと存じて居りました處でございまする」
「何と思うてゐた」
「遠慮なく申上げても宜しうございませうか」
「遠慮なく申して見るが宜い」
「左様ならば申上げてしまひまする、あの女の子は奥方様に生き寫しでございまするな」
「さうか、拙者もさう思うたから其方に聞いて見た」
能登守は莞爾として一學を顧みました。
「左様でございまする、奥方様より歳は二つ三つ若いやうでございまするが、あれで奥方様と同じお作りを致させますれば、全く以てわたくし達まで見違へてしまふでございませう」
「其の通りぢや」
さうして馬を打たせて、御勅使川の岸を東へ歩ませて行きました。
「殿様」
「何だ」
「あの奥方様は何時頃、こちらへお見えになりまする」
「それは何時ともわからん」

「御病氣の御容態は、如何でござりませうか」
「別に變りはないやうぢや」
「一日も早くお迎へ申したいと、家來一同その事のお噂を申上げない日とてござりませぬ」
「年内はむづかしからう、年を越えても事によると……」
「來春になりますれば、是非お迎へに上りたう存じまする」
「彼も此方へ來たいと云つて、いつの手紙にも其の事を書いてあるが、あの身體では覺束ない故に留めてある」
「殿様も御心配でございませうけれど、奥方様も定めてお淋しいことでございませう、どうかお迎へ申したいものでございます」
「一學」
「はい」
「あの栗毛を受取りに行く時、あの女にも何か物を遣はしたいものぢや」
「左様でござりまする」
「あの犬の爲に怪我をせずに濟んだのぢや、犬と持主に心付を忘れぬやうに」
「然るべきものを調へまするでござりませう」
「その時に、一應あの女の身の上を聞いて見るが宜い、若し邸へ來るやうな心があるならば、伊太

夫へ話をして呼んで見ても宜い」
「はい」
一學は主人があの女の事を親切に思うてゐることに氣がつきました。

六

馬大盡の雇人の幸内は三日目の日が暮れてしまつても遂に屋敷へは歸りません。
伯耆の安綱と稱せし彼の名刀も亦幸内と共に其の行方を失つてしまひました。
この前後の事、甲府の町うちに折々辻斬があります。
三日か四日の間を置いて、町の端れに無殘にも人が斬られてゐました。その斬り方は鮮かといふよりも酷烈なるものであります。
一刀の下に胴斬にされてゐたのもありました。袈裟に兩斷されてゐたのもありました。首だけを刎飛ばしたのもありました。丁度神尾主膳の家で刀のためしのあつた其の夜も亦稻荷曲輪の御煙硝藏の裏に當る處で、一つの辻斬があつた事が其の翌朝になつてわかりました。
斬られたのは幸内ではありませんでした。處の方角も幸内の歸つて行つたのとは違ひますし、殊に斬られた本人が近在の煙草屋でありましたから、直に本人の家族へ沙汰があつてこれ等が駈けつけて

泣きの涙です。

町奉行の役人と前日神尾の家へ集まつた師範役の小林文吾と其の弟子共も駈けつけました。

町奉行の檢視の役人は、現場に立つて面を見合せて腕を組んで

「確に物取の仕業ではない」

「勿論の事、これで此の一月ばかりの間に四箇の辻斬」

もう一人が、やつぱり浮かない面をして現場を今更のやうに見廻すのであります。

「それが皆んな同じ手」

と、もう一人が云ひました。

「非常な斬り方である、これは如何も……」

と云つて、三箇の役人が一度に小林師範役に眼を着けました。

彼等には何とも解釋がしきれないから、それで小林の意見を促すやうな眼つきであります。

「此れだけに斬る者は……」

と云つて、小林も頭を捻つて思案に餘るやうでありました。

「刀が非常に大業物であるか、さも無ければ、人が非常な斬手である」

小林は今其の屍骸の斬口を檢査して見て舌を捲いてゐる處でありました。この一ヶ月來これで四度、辻斬があつたのに、其のうち三度まで小林は立會つてゐました。

先日神尾の屋敷で「樣物」があつたのも、一つは此の辻斬があつたから、それに刺戟されたものであります。

一人二人の間は話の種であつたけれども四人目となつては町の人の戰慄であります。町の人の戰慄と共に、役向の責任でありました。さうして此の小林文吾に取つては、當に劍道の面目といふことになりさうです。

「若し當地に住居致す者にて此れだけの手腕のある人ならば、拙者に心當りのない筈はないが……併し其の見當がつかぬ、察する處、他國の浪人が何れにか隱れてゐて、夜な夜な狼藉を働くのではないかと思ふ」

「兎も角も、今夜より一層警戒を嚴重に致さねばならぬ」

小林文吾は自宅へ歸つて色々と考へ込んでしまひました。

小林は小野派一刀流を本として田宮流の居合、神道流の槍などを得意としてゐる人であります。彼は此の斬手がたしかに城内にある勤番武士のうちの誰かであると見當をつけてしまつてゐました。城下及び領内にも腕の利いた人が無いことは無い、百姓町人の間にさへ相當に出來る人を知つてゐるけれども、それ等の人に此んな荒つぽい藝當が出來るものではない。その斬り方の酷烈な事を見ても、到底普通の人情を備へたものには出來ない仕業である。さて城内の勤番武士の間に其の人ありとすれば其れは誰だらう、小林はその見當に思ひ惑うてゐます。